
アイ・エス

仮面ライダーマンティス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイ・エス

【Nコード】

N0563Y

【作者名】

仮面ライダーマンティス

【あらすじ】

女性にしか使えない筈の最強兵器インフィニット・ストラトス（略称IS）に何故か……というか父親のやらかした珍事によって乗れるようになってしまった佐藤洋はその操縦技術を学ぶためにIS学園へ入学することに！？

第3どころかアンティークとすら揶揄される第1世代ISに乗り、無限の空を駆け抜ける！

後に 変態 の2つ名を轟かすか1匹の狼の伝説がここに！

第1話 強くてハダカでヤバい奴！？（前書き）

多分大多数であろうはじめましての方ははじめまして、とある投稿サイトで書かせて貰いましたがこの度、本サイトで改めてデビュー致しました仮面ライダーマンティスと申します。

最初はオリジナル作品でデビューしようと考えてましたが中々に苦戦し、ちよつと息抜きに書いた小説を投稿させて貰いました。かなりアホな作品ですが、笑っていただければ幸いです。

第1話 強くてハダカでヤバい奴！？

第1話 強くてハダカのヤバい奴

誰得というネットスラング——所謂ネット隠語が存在する。

これは『一体だれが得するんだよ？』という言葉の略で、余りに意味不明で無価値な為、それを見た者が理解に苦しんだ際、或いは呆気にとられた時口にするセリフであり、今現在、僕こと“佐藤^{さとう}洋^{よう}”が置かれている状況がまさにそうだと言えよう。

『悪いなあ、脱いでもろおて』

そう口にしながら脱ぎたての、まだほんのり温もりが残った僕の制服一式を探る屈強そうな警備員のおっちゃん。彼は明日から僕が通う事になる。この国家直営・世界唯一の『IS学園』の警備を務める番人であり、未来のエリートを不審者の魔の手から守るに足る。^{スリガン}非常に遅しい——もうなんていうの？丸太見たいな足と金属見たいな腕をしたスキンヘッドの中年男性だ。

その彼に学園内では目立つ余所の制服を着用していた僕は目を付けられ、こうして机とパイプ椅子しかない狭い詰め所に連行され、荷物を調べられていたのだ。

ホント、1話から誰得な展開過ぎる状況と言えよう。

「ふむ、取り合えず怪しい物はない、と……。ほんまにすまんなあ、ホレ、ここって世界中のエリートが通う学校やろ？ 色んな怪

しい奴ひつきりなしに訪ねて来るもんやから兄ちゃんみたいな子供でも、一応用心させてもらっとるんや。分かるやる？」

「はあ……」

一頻り手荷物を確認した後に最もらしい事をかたる警備のおっちゃんに僕は曖昧に返事をする。これから通う事になる学校の警備を担う人間の言葉としてなんとも頼もしい限りだが、如何せん現状で僕はまだ『護られる側』ではなく『排除する側』として認識されている事と、依然として制服を返してくれてない。狭い詰め所で屈強な中年と2人きり、パンツ一丁で相対しているという大変ハードな状況が僕をたまらなく不安にさせる。一刻も早くここから出たくてしようがない。

「さて……、兄ちゃんもこないな狭い部屋にいるのは嫌やる？　せやからなあ、正直に全部話してくれへんかなあ。悪いようにはせえへん。ホレ、おっちゃん目え見てみ。これが嘘付くように見えるか？」

嘘付く人間の常套句の様な言葉を口にしながら、変わらず疑心に満ちた視線を僕に向けるおっちゃん。案の定、僕のこれまでの説明なんかこれっぽっちも信じちゃいない。

「いや、ですから、その……さっきもいいましたけど僕は今日からこの学校にですな」

「転入する事になったって話やる？　勿論学園側からのお達しも聞いとるで？　けど俺が聞いてたのは“操縦科”の生徒さんや。兄ちゃん男やる？　それなのに整備課ならともかく操縦科の手続き書類とかって可笑しいやん？　“IS”って男には使えへんやん？」

あくまで僕を不審者と決めつけつつも、一応筋の通った事を口にするおっちゃん。

そうなのだ。僕がこれから通う事になるこの『IS学園』は、10年前に開発され、世界の軍事バランスを崩壊させた“女性にしか扱えない”最強の機動兵器 インフィニット・ストラトス——通称ISの操縦並びに開発・整備技術を学ぶ為に設立された養成機関なのだ。

その特性上、生徒の男女比は当然の様に1：4と圧倒的に女子が多く。ましてやISの製作や整備技能を学ぶ整備科ならともかく、僕が通う事になる操縦科などは当然、女子率100%であるのが然るべき状況なのだ。基本的に（・）は（・）

しかし何事にも、例外というものはある。

「だからそれもさつき説明した様に、俺も（・）同じ（・・）なん（・・）です（・・）よ！ 今年に入学した例の世界初の男子みたいに——！」

「織斑一夏くんの事やる？ おるんやな最近。あいつのニュースが出て以来。自分もそうやないかと錯覚する奴。ヒロシお前クスリとかやつとるんやないのか？ あーいうのはアカンで？ 本人だけやのうと周りの人間も不幸にするから」

ダメだこのおっちゃん。早く何とかしないと！

最早1も2もなく僕の事を不審者かヤク中と決めつけて疑っていない。そりゃ確かに僕はその『世界初の男性操縦者』である織斑君みたいに騒がれてはいない……というか“ちよつと特殊な事情”があ

る為、余り目立てる立場にないから嘘くさく感じるのは無理もないが、だからって正規の転入書類を見せて尚、『良く出来た偽装書類』と判断するのはどうかと思う。

それとさっきからヒロシヒロシ言ってるけど僕の名前は洋と書いて“ヨウ”だ。

とにかくこのおっちゃん。まるで人の話なんか聞いちゃいない。

「いや、おっちゃんヒロシの気持ちもよう分かるで？ なんとってここは、将来世界に羽ばたくエリート女子高生が通う女の園、可愛いくてええ娘がたくさんおる。男から見たら楽園と言ってもいいところや。けどそういう所で純粹培養された娘こそ、変な虫が近づいて来た時に抗う術を知らへんちゆう事も間々ある。せやからおっちゃん、そんな娘を命懸けで護る義務があるんや。……そしたらまあ案の定、ヒロシみたいな絵に描いた様な不審者の登場や」

ふう。と落胆を思わせる溜息をしながら、おっちゃんは机の中から何故か懐中電灯を取り出し、分解して中から単一電池を抜き取り、立ち上がる。

「あ、あの……色々ご立派なご高説はいいんだけど……それって結局全部、おっちゃんの勘なのでは……？」

僕の後ろに回って逞しい腕でヘッドロックするように僕の首を抑え、脂ぎった頬を擦りつけてくる。鳥肌がたった。

「おっちゃんの勘はなあ。ものごっつよう当たるねん。間違いないけどヒロシ、お前はクロヤ。このまま兄ちゃんを本部なり警察になり突き出してもええんやけど、それやと見る目の無い連中が用意してき

た二セ書類に騙されて、ヒロシという狼を迂闊にも学園に解き放ちかねへん。せやからまずは洗いざらい告白して貰えへんとなあ——というわけで1本、いつてみようか？」

単一電池を握り締めながら、この世の終わりかと思う様な恐ろしい事口にする。

「い、1本ってその、ク、クスリか何かですか？ あの夜の街とかで売ってるヤツ！ いや、ああいうのはいいと思うなあ。精神壊しちゃうし、周りの人の人生も……ね？」

「ヒロシはホンマにオモロイなあ、この状況でそんな言えるなんて大したタマやで？ けど許さへん」

にんまりと脂ギツシユな笑顔を作るおっちゃんは、僕の首をロックする腕に一層の力を込める。

「ちょっ……、こんなおかしいじゃないですか！ 僕は全部ちゃんと説明しましたし、持ち物だって言われるがままに……！ こんなの犯罪だ！ 訴えてやる！」

「よー考えてみいや、ケツに単一乾電池でファイト一発やで？ 突っ込まれたあ言うて警察駆け込むわけにもいかんやん？ それとも、恥晒すの覚悟の上で行けるか兄ちゃん？」

な、何と言う計算し尽くされた策略！ この男天才か！？

「大人しゅうせいや、正直に全部言うて反省せん兄ちゃんが悪いねんで？」

「……もしもあなたの予想通りのことを言って、反省していたらどうしました？」

「もちろん単一乾電池に決まってるやん。がはっはっはっ！」

結局一緒じゃないか！？

マ、マズイ……！ このままでは連載第1話目から僕（主人公）の肛門括約筋が大活躍するといつとんでもなくハードな展開に！

でもって、その体験の果てに目覚めた僕は

——いや、実は僕、ロボットなんですよ、お腹減ったなあ、ああ、こんなところに単一乾電池、しかもポリウム満点のアルカリがあるじゃないか！ いただきまーす……こうしてお尻にある穴……バツテリーチャージ！——

最悪だっ！！

マズイ、マズイぞ！

折角それまでの経緯はどうあれ、女子率80%以上の樂園エデンに入学してきたというのに、いきなりそんなマニアックなルートに突入なんてあり得無さ過ぎる！

そうなる前に何とかせねば……！

「あつ！ むここの茂みで織斑君と女子があられもない恰好で……！？」

「なんやて！？」

一瞬の隙をつき、僕はおっちゃんの太くて逞しい腕から逃れると財

布などが入った段ボールを手に取り、真っ直ぐ窓を目指す。開けている暇はない。突っ込むしかない。多少肌が切れるかもしれないが、肛門括約筋が切れるより遥かにマシだ！ 迷ってるひまなんかない。

「イ、エアアアア！」

雄叫びと共に僕は窓へ突っ込む。砕け散るガラス。肌に感じる外の空気が最高に気持ち良く。アスファルトの上に転がった際、小石が痛かったが、それ以上に自由を得た悦びに満ち溢れていた。アイ・アム・フリー！

ヒロシ待てえ！ と相変わらず人の名前を間違えたおっちゃんが怒声をあげて追いかけてくるが、無論待つ筈が無い。ふり返ることすらせず走り出す。

周囲の女子生徒から悲鳴が上がる。僕の勇ましさと露になった肉体美に失禁でもしたのかもしれないが、今はそんな事気にしてられない。悲鳴を上げたいのはこっちなのだ。

僕は走る。自らの大切なモノ——肛門の純潔を護る為に！

IS学園1年1組担任にして、学年主任、1年の女子寮長、更には非常時の警備に関する全権を与えられた織斑千冬おりむらちふゆの毎日是非常に多忙だ。多くの肩書きには権利や権威と共に相応以上に責任と義務が付随する。

顧問を務める茶道部が休みで顔を出す手間がないこの日にしたって、クラス代表対抗戦の打ち合わせやアリーナの使用申請、程なく始ま

る訓練機を用いての実践演習のカリキュラム作成などやる事には事欠かない。

（全く……他の先生方は私をサイボーグか何かと勘違いでもしているのか？）

学生時代に蔑称としてつまらない男子に言われ、自分に対し半ば盲目的な信仰を抱く女子生徒も敬称として自分の事をそう呼ぶ『鉄の女』の字に思いを馳せながら、小さく溜息を洩らす千冬。

今の自分の仕事に不満があるわけではないし、暇を持て余すのよりは多忙な方が性にあっているが、それもなんだかねで適当な休息が合ってこそ、真にくつろげる場所があってこそなのだ。

その点で行くと、数か月前より分かっていた事とは言え、今年から入学してきた弟が自身の寮長を務める1年女子寮に入ってきてしまった事が実に惜しまれる。

何せ折角家に帰っても、家事を完璧にこなし、明日着て行くスーツまでこさえてくれ、且つマッサージまでしてくれる弟がいないのは殆ど意味がない。立場を弁えて1人の生徒として扱わなければいけないのも、正直、疲れる。

更にはその弟が、最近女性関係でかなりアレな事になっているのも、千冬としては頭痛の種であった。

♪
♪

そんな彼女の携帯に、飾り気のない初期設定のままの着信音が鳴る。

「もしもし私だ。……………何、侵入者だと？ 警備は何をして――

——ハッ？ パンツ一丁？ ブービートラップ？ 報告は迅速かつ正確にといつも言っているだろう！？」

ただでさえストレスが溜まり気味な所で聞かされた不鮮明で有りながら『学園に不審者突入』という危険な報を受け、思わず声を少し荒げる千冬。その叱りを受け、落ち着きを取り戻した校内のセキュリティチームオペレーターは、数少ない情報をまとめ、彼女に報告する。

——時間は本日15時20分頃、“操縦科への転入生を自称する少年”を不審に思った校門警備員が呼び止め、詰め所に連行し手荷物検査をしている最中、少年はパンツ1枚と衣服を除く全装備を奪還し詰所の窓から脱走。一報を受けたセキュリティチームがコンディションレベルイエローを発動し、捕獲に向かった所、半裸の少年は信じ難い身体能力と逃走しながら仕掛けた即興のブービートラップを駆使し、20名近く常勤する警備隊員の3名を行動不能にし、依然校内を逃走中——

という旨であった。

「門前のあの男から逃げ切ったというのか？」

ひとしきり聞いた上でまず1番驚いた点について疑問を口にする千冬。彼女の認識の中で、これは中々に厄介な事態だという事になった。

何せあの筋肉質な警備員は、その女子生徒や自分を含む若い教員を見る目付きがいかがい点、弟に対し『己リア充！ 何時かお前の肛門にキツツイのかましたるさかい覚悟せいや……』と単一乾電池を弄くりながら恨み言を漏らすなど変態行為に目を瞑れば、恐ろしく強靱な守護者であると言えるからだ。

そんな男が容易く突破を許したばかりか、さらには民間から出向した彼とは異なり、学園内の防衛を任された全員が千冬直々に鍛え上げた経験値も豊かな女性ばかりで構成された IS 学園セキュリティチーム の精鋭たちが満足な装備を持つていないであろうたった 1 人の少年に苦戦を強いられるなど、育成機関であると同時に各国のパワーバランスに影響をもたらす最新鋭機やその操縦者が多数在学する国際機関としてはあつてはならない由々しき事態だ。「もしや亡国機業の工作員か？」という危惧さえ浮かぶ。いずれにせよ迅速に解決すべき問題だ。

「あつ、こちらにいらつしゃったんですか織斑先生。明日から転入してくる例の 2 人目の男子生徒の件なのですが――」

「すまない山田先生、その件は君に任せる。私はこれからセキュリティ本部で侵入者の捕獲を指揮しなければならない。――フン、何処の国の特殊工作員だか知らないが、この私が護る学園領地に土足で踏み言つた事、存分に公開させてやろう」

「は、はあ……」

優秀な指揮官とは物ごとに置いて常に最悪の事態を想定して動く慎重さと、重い立った事を即座に行う決断力と行動力が求められる。オペレーターとの報告と、切羽詰まった気持ちにじみ出ている彼女の声を聞いた千冬は、相手を考えうる最悪の敵として想定し、同時に自分に対する宣戦布告と見なし、まだ見ぬ侵入者に対し、蛮勇を褒めながら、全力を持って、これを駆逐する意思を固めた。

正直、いいうさ晴らしにもなる。

「岸田、私だ。侵入者が使用したブービートラップの特徴を教えろ。私にも少し知識がある——ふむ、そうか。よし、今から私の指示通りに部隊を動かし、侵入者をB-18区画へ追い込め……ああ、そうだ。無理して捉え様とせず、常に最低でもツーマンセルで動くように厳命。敵は素人ではない。それから全校生徒への外出禁止を呼び掛ける」

さながら女將軍という言葉がぴったりなほど堂々とした立ち居振る舞いで電話越しに現状の指揮官に指示を出し、足を一歩司令部へと早歩きで進める千冬。その顔には、不機嫌さや緊迫感とは別に、僅かばかりの高揚感も窺えていた。

「くそっ！どうなっている！？ 奴ら急に動きが良くなったぞ？」

アリーナと呼ばれるISの実践訓練を行うドームと校舎を繋ぐ通路にあるちよつとした林の中の茂みで僕は息を殺し、身を屈め、先程から急速に統率がとれてきた敵部隊の追撃をかわそうと試みてはいるが、恐らく今の彼女たち相手では難しいだろう。

逃走序盤、僕のトランク스에靴下+スニーカーという最高にセクシヤルハラスメントなコーデイナーに頬を紅潮させながらも職務に従事して容赦なく訓練用硬化ゴム弾を装填したハンドガンで狙いに来た彼女たちは当初、個々の身体能力こそ確かなものの、皆が皆、自分1人で僕を捉える事も容易と考えての事だろうがバラバラに行動し、故に罠にかける事や、うまく誘導して同士打ちを誘発させる事も出来たが、ある時を境に闇雲な攻勢を止め、引くべき時は引き、

攻める時も必要最低限の攻撃に留め、確実にこちらの体力や装備を削いでくる消耗戦に変えてきたのだ。
といってもトランクスだけだが

既に親父が絡んだトラウマ物の事件により小学3年生の時点で、自衛隊新人隊員と同等の体力を有する事になった強靱な肉体を誇る僕の体力も限界に達して来ており、これまで猛攻を耐え抜いてきたトランクスもあちこち破れ、これまた大変な事になってきていた。

僕の体力が尽きて捕まるのが先か、トランクスが限界に達し、僕が全裸+靴下&スニーカーという最高にセクシャルハラスメントな痴態を晒すのが先か……いずれにせよ破滅は時間の問題であった。

こうなってくると、向こう側には優れた指揮官があり、ただの高校生である僕を某国の特殊工作員か何かと勘違いしてガチで殺りにかかってきていると考えるのが自然だろう。

全く、何がIS学園だ女の園だ！ やはり楽園と称される所には口くなしがないのだろう。例えば都心に存在する化け物どものあのワンダーラン……いや、この話はいい。

こうなってくると当初考えていた。身の安全を確保した段階で学園に通う従姉に服を持って迎えに来て貰い、同伴で職員室まで行って事態を収拾するという手段も難しくなってくる。何せあの優秀な指揮官の事だ。携帯の会話など容易く傍受し、こちらの位置を割り出すであろう。

いつそ白旗を上げ投降し、取調室で正直に話すか？
いや、正規のルートを取りながら単一乾電池を肛門に突っ込もうとする警備員のいる所だぞここは？ 国際法に基づいた捕虜の人権など望みようがない。

こうなればもう、徹底的に逃げおおせながら従姉を見つけ、彼女にすがるしかない。

その為にはまずこの包囲網を突破せねば！ 意を決し、僕はランボ―もビックリなワンマンアーミーとして、孤独な戦場へと駆け出して行く。

「まさかこれ程とはな……」

外部からの侵入などの有事の際、学園の全てを統括する司令部なるセキュリティールームに到着し、司令官の席に着いた千冬は、報告に合った謎の侵入者（警備員の証言により以下コードネームH I R O S H Iと呼称）能力に驚きを隠せないでいた。

その強靱な体力や戦術に対する知識、ブービートラップ技術などは元より、恐るべきはその精神的な強さである。敵陣の真つただ中、着実に追い込まれ、満足な装備も余力もなく。普通なら降伏か自決の二択を迫られる極限の状況下の中で彼は事もあるうに正面突破を仕掛けてきたのだ。

更にその過程で、飛び掛かった隊員の1人がそのトランクスを掴んだ際、彼は何の躊躇もなくそれを破り捨て、靴下とスニーカー、更に左手首にデジタル腕時計と言う最早新時代を彷彿させる恰好になって尚、全力で走り切り、女子率100%の部隊は男子の全裸に興味と羞恥を抱いた結果、動きが著しく悪くなった部隊の隙間を抜いたのだ。

目的遂行の為ならば自らの尊厳もかなぐり捨ててその精神と、決し

て諦めぬ不屈の心、正に完成された戦士ソルジャーと言える存在————実際には只の変態でしかないのだが、とにかく千冬の中ではそう格付けされていた。

「……現場にISの使用を許可すると伝える」

「しょ、正気ですか織斑先生！？ 作業員1人にISの使用なんて前例が……」

「それを言うならそのたった1人の作業員に学園がここまで侵入を許した前例すらそもそもにない。政府への言い訳は後で幾らでも捻える！ 早くしろ」

「あゝ、織斑先生……」

通常のマニユアルから逸脱した命令に戸惑いを見せるオペレーターに声を少しばかり荒げる千冬。そんな彼女の機嫌を窺いながら、緑色の髪の毛と小柄な体格に対しやたらと目立つ立派な乳房が印象的な童顔の女性“山田真耶”やまだまやが恐る恐る声をかける。

本当は今の様な状態の千冬には声をかけたくないのだが、職務上、立場上、どうしても彼女に伝えなければならぬ用件があったのだ。

「山田先生、今は非常事態だと言った筈だ。通常の業務に関する事なら後に……」

「い、いえ、それがそういう訳にもいかないといいますが……先生たちが今捕獲しようとしている侵入者さんが、先程お話しした転校生の佐藤洋君なんです」

まるで3時間並んだ拳句『商品が購入できるのはここまでです』

とギリギリであぶれた人にいうような沈痛な面持ちで千冬に真実を告げる真耶。

すると彼女は背を向けたまましばし沈黙し、ギギギ……とサビかけた玩具の様な音を立て、「なん……だと……？」と週刊連載の少年漫画の引きで使われそうな表情で振りむいた。

——侵入者、確保完了しました！——現在訓練用の模擬弾を受け昏倒中。これより本部へ護送します。——ふえあ……そ、それよりとりあえず何かはかせましょうよ先輩いゝこのままじゃその……。

——フフ、この程度で照れるなんて可愛いわね宮崎ってば

一方、司令部のメインモニターでは指揮官の早すぎた最終手段の決行によって出撃した3機のISに文字通り裸一貫で立ち向かった結果、ボロ雑巾の様になった全裸の少年の姿が映し出されていた。

第1話 強くてハダカでヤバい奴！？（後書き）

基本的には息抜き投稿なので更新は遅いと思います（汗）

第2話 ルームメイトは金髪（ブロンド）の麗人（前書き）

感想が嬉しくてストックもないのに書き上げて即投稿（笑）

今回のお話で皆大好きな金髪のあの娘が登場！

IS要素は3話に繰り越し……

第2話 ルームメイトは金髪（ブロンド）の麗人

第2話 ルームメイトは金髪^{ブロンド}の麗人

僕は、ひよつとしたら知らず知らずの内に大人の階段を昇り、魔法使いになる権利を放棄してしまったのかもしれない。

それも、スーツの良く似合う。若いキャリアウーマンっぽい感じの美人さんと……だ。

今、僕は限りなく生まれた時のそれと近い恰好で、というかぶつちやけ見覚えのない真新しいトランクスー丁で、横長のソファに座っている。周囲はガラス製のテーブルを中心に向かい合う様にソファが置かれ、周囲にはゆったりとしたスペースが取られつつも観葉植物や絵画などが置かれ、一流商社の応接室……といった印象のある部屋だ。

そして正面には夕日が差し込む窓に背を預ける彼女がいた……。

お、落ち着けヨー・サトウ。1番いい所が記憶の中に無いぞ。もしやあまりにも衝撃的な展開すぎて記憶が飛んだか？ そんな昔の口ブレのセーブデータみたいな真似があつてたまるか！

大丈夫、きっと僕の脳は大丈夫だ。落ち着いて順に思い出すんだ。

……まず、僕は目を覚ました。んで、身体を起こしたらこの部屋でトランクスー丁でいたわけだ。……“ある程度のこと”なら大体できそつなこの部屋に。

そんなキョロキョロしている僕に気が付いたお姉さんが、こちらに顔を向ける。意思の強そうな目つきが印象的な女性、なまじ容姿が完璧な分、ある種の迫力の様なものすら感じる美人さんだ。

そして訳も分からず混乱している僕に対して彼女は言ったのだ。「

気が着いたか？ 思っていたより早かったな」……と、まあなんつか、男としては実に残念な事を言われたわけだ。

……その前は？ えーっと、何だろう、記憶が混乱してはつきりと思いつけない。確か転校の手続きの為にIS学園に訪れてやたらにかつい警備員のオツチャンに詰め所に連行されて服を脱がされて……ダメだ。その後の記憶がまるで思いつけない！ 一体どういう過程を経て狭い部屋でおっちゃん相手に脱いだ僕が、こんな美人のお姉様とアレがコレしてそうだったのか、まるで過程が想像できない。もしかこの美人こそあのおっちゃんの正体であり、魔女か何かの呪いであんな姿にされた所、通りかかった僕とこう、キスをした事で呪いが解けたというファンタスティックな要素でも取り入れなければ説明が出来ない。

つまり……… 1番肝心な部分が思いつけないという事だ！
ちくしょう！ 残念過ぎるにもほどがあるぞ！？ あれだ、宝物にしていた初恋の人、広部さんとのツーショット写真を従姉の手で落書きされた時くらいの残念さだ！

それにそんなホニヤラパーな関係になって置きながら、彼女の名前すら知らないというのはかなり問題だ。……その、責任とかはじめ的な意味でも。とにかく思いつかなければならない。彼女の名前や素性、出会った経緯、そして何より行った行為の詳細を！

………ダメだ！ 思いつけない！！

ああ、ああ、憎い！ 記憶がないのが憎い！ 加えて失われた記憶を無意識に妄想で補完しようとしている自分のクリエイティブな脳が嫌だ！ 加えて思いつくとする過程で彼女の主に首から下を凝視した結果、一戦終えたばかりだというのに欲情し、股間を膨らま

している自分が嫌だ!!

……いや、だが、待てよ……。さっきの彼女の言葉——思ったより早かったを考えれば……。このままではいけないのではないか……。？このまま引き下がるべきか？……。否、早さで失望させてしまった分は、回数でカバーすれば結果としてOKなのではないか？。若さに溢れる今の僕ならば問題は……。

よし、思い立ったが吉日とばかりに己に気合いを入れつつ、僕はソファから立ち——

「佐藤起きたー？」

……僕はそのままお行儀よくソファに座り直した。やや前屈み気味に。

平然と扉を開けて入ってきたのは……。白を基調としたIS学園の制服に身を包んだ僕の従姉“著莪^{しゃが}あやめ”だった。イタリア人の母親の血を受け継いだ金髪をボサボサにし、碧眼に眼鏡をかけた。容姿だけなら文句のつけようのない美人。

そして僕にとつて、同じ日に同じ病院で生を受け、双子の様に育った言つなれば相方の様な存在だ。しかしそんな彼女が一体何の用でここに？。これから僕は彼女の期待に応えれべき再戦に臨まなければならぬというのに……。

「ああ、著莪か。丁度いい所で来た。どうもこの男、目を覚ましたのはいいが自分の現状を把握しきれていないらしい。身内のお前から説明してやってくれないか？」

「えっ、マジですか！？。うわー、あんだけ派手に暴れといて覚えてないって佐藤お前……」

僕が著莪のタイミングの悪さに不満を抱いているのとは逆に、美人さんは逆にどこか安堵したように彼女を迎え入れ、僕の隣に座らせる。何がおかしいのかケラケラと笑う彼女はそのまま、僕の記憶の空白の（^{ミミ}ング）部分^{リング}に何があったのかを愉快そうに話し始め、それを聞く内に、僕は芋づる式に先程まで展開されていた激戦の記憶を思い出すと同時に、戦闘後半、的確な指揮で僕を苦しめた司令官が目の前の美人さん改め織斑千冬さんであるという事実^{ミミ}に恐怖した。あの噂に名高いブリュンヒルデ（世界最強の女性）に僕はあろう事かシチュエーションに紛らわしい物があつたとはいえ、男女のエトセトラを行おうとしたなんて……一体どこの自殺志願者だ！？

「その顔から察すると一通り思い出したようだな。……その、なんだ。まずは落ち着け……」

アレ、気の所為だろうか？ 僕の方に顔を向けた途端、織斑先生の顔に微妙な紅潮が……ハッ、もしか学園側が繰り出した数々の攻撃を勇ましく鮮やかにかわしてきた僕の姿をモニター越しに観て一目惚れ——おいおいジョニーなんてこつたい。学園について早々僕って奴は早速フラグを立てちまいがった。それも女性教師なんて言う1週目の攻略がかなり難しそうなルートを……いや、待て。それにしては妙だ。視線が僕の顔より気持ち下を向いているしそもそも『落ち着け』の意味が——ハウッ！

「で、佐藤。どうしてアンタはこの状況でこんな所を腫らしてるのかな？ ん？」

そんな僕の疑問は臀部より下にあるその……その、なんだ。パンツ越しに膨らむアレをガッチリホルドする著莪の手によって解消される。そうだ。すっかり忘れていた。僕のアソコはつい先程までの勘違いですっかり解放状態になっていたのだ。

するとナニ……いや、何か？ 織斑先生が妙に顔を背けて言葉に詰まっていたのは、僕の股間の全開っぷりを見てという事か！？
もしかこの女性^{ひと}、存外に男に対し免疫がないのか？ 女尊男卑社会になって久しい昨今、そういう女性も増えてきていると言うが彼女の様なクールビューティと呼べるような人まで……マ、マズイ！
織斑先生のギャップに興奮した僕のアレが鎮まるところかますます勇ましく——！？

「うわあ、ひでえ！ この期に及んでまだお前……アハハハッ！」
そんな僕のナニの変化に目ざとく気がついた著莪が楽しそうにニギニギと弄る。久しぶりに会ってお前、何と言う事を……！

同じ病院で同じ日に生まれた著莪とは、家が200mも離れていない近所同士と言う事もあって従姉弟というより双子の姉弟同然に育った為、昔からじゃれあい日常茶飯事だったし、流石に思春期に入ってから一緒に風呂に入る事はなくなったが、徹夜でレトロゲームに没頭し、同じベッドで寝る事なんかも中学時代まで日常的にあった。加えて彼女自身、恥じらいというのが微妙に欠けているのか、よく僕の親父と共謀して僕の部屋に巧妙に隠してあるエロ本を発掘しては晒しものにするなど非常に性質の悪いイタズラを頻発してきたのだ。

この社会情勢の中、良くも悪くも男女を意識せずに接してくる彼女の姿勢は美徳なのかもしれないが、正直1番の被害に遭う身として勘弁してほしい。というか織斑先生も僕らのやり取りに明らかに困っているし、とりあえず手を離してほしい。

「……著莪、お前たちの関係については深く詮索するつもりはない。しかしそういう事は2人きりの時にやれ」

ああ、織斑先生がとても居心地悪そうに……しかも絶対僕らの関係を誤解している。

その後、著莪が「ハイ」と口にしながら僕のアレを解放。僅かな時間で人として、男として、余りにも多くの大事なモノを失った気がするが、取り合えず僕は晴れて転入生として認められる形になったのだ。

…… たったそれだけの事にどれだく苦勞と犠牲を払っているんだ。

「ハイ。こちらが今日から佐藤君が暮らす事になるIS学園男子寮になります。操縦者科の校舎からは少し離れてますから、遅刻しない様にしてくださいね？」

「ハア……」

あの後、織斑先生が持ってきた書類に必要な事項を書き込み、僕は改めて入学手続きを済ませた後、小柄で童顔の割に大変良い乳房をお持ちと言う素敵な先生——山田真耶先生に連れられて学園の外れにある男子寮へと案内された。

ISは基本、女性にしか扱う事が出来ないが整備や武装の開発などは当然の如く性別を問わず可能なので男子生徒も少ないが【整備課】に在籍しているのだが、これが中々に不遇を強いられている。何せ世は女尊男卑社会の真っただ中と言う事もあり、大企業や国会における女性CEO・議員の数も年々うなぎ登りであり、それに反比例して男性の扱いは悲しい事になっている時代。巷では男性が見知ら

ぬ女性に突然声を掛けられ、パシリにされる光景なんてのも珍しくもなく。男性の社会的地位は、セガの家庭用ゲーム機並に一般的には軽視されている。

それに起因するのは当然、「女性にしか操れない最強兵器」の台頭な訳だが、その最強兵器について学ぶ本校においてもその価値観は反映されているのはこの男子寮の外観を見て容易に理解できる。

流石に学園創立から数年しかたっていないだけあって、建物自体はまだ新しさが残り、作り。部屋の広さや設備、男子100%特有の男臭さも含め「平均的な学生寮」としては及第点と言えるだろう。

だが、

「こりやないって……」

「アハハ……すみません」

焦燥に狩られ漏れた僕の言葉に山田先生が苦笑を漏らす。そう、気分はまさに某セガの大ヒットアーケードゲームのコンシューマー版をプレイした時のそれそのもの。というのも入学案内パンフレットやTVの特集で取材された時の超豪華リゾートホテルも真つ青な絢爛豪華な女子寮に比べ、あまりにも普通なのだ。

最強兵器の未来の乗り手〃世界中の国を代表するエリートを育てる国立IS学園はその性質上、世界中の操縦者候補生に安全と経済的負担の軽減から寮生活を強いる事になるのだが、そんな彼女たちが快適な学園生活を過ごせるようにする為にベラボーな国家予算を費やしており、学園敷地内は訓練用アリーナから校舎内施設から娯楽施設に至るまで高級レジャー施設並に充実しており、プライベートの象徴である寮もまた、二人一組であてがわれる部屋は高級ホテル

のそれと何ら遜色がない。また大浴場は金すら取れる級の作りであり、朝夕の出る食堂はレストランの域だ。

一方こちらは典型的な学生寮、生徒の少なさを考慮して各自個室があてがわれてるメリットはあるが、一部屋当たりの大きさは生活最低限のスペースである6畳1間、小ざっぱりしたフローリングの1ルーム。大浴場は昔の銭湯のようにシンプルで有り、食堂は平日の朝しか出ない。因みに親から振り込まれる月々の仕送りは3万なので、食費削減は今後の重要課題と言えるだろう。

また、女子寮が厳重なセキュリティが施されている学園敷地内の中にあっては、男子寮は学園の外れ。僕の見た所、この敷地内においては非常に防衛網の薄い作りになっていて、仮に僕がこの学園を強襲するテロリストなら真っ先に制圧される様な位置にある。

アレか、いざとなっても男子はまあ、どうなってもいいという事だろうか？ 確かに僕だって男子と女子の安全なら迷うことなく後者を取るが、それは僕が住んでない場合の話だ。

ついでに言っと校舎までの距離がkm単位で離れている為に早起きも必要される。

何て言うかも、分かり易過ぎる待遇の差であるが……まあ、それを差し引いても1人暮らしの高揚感はある。何せもうあの頻繁に命の危機が訪れる実家から――あの親父から離れる事が出来たのだ。どこだって天国なのは間違いない。

そう気持ちを切り替えた僕は山田先生に爽やかなサムズアップを決めて部屋の鍵を受け取り、入室。先に贈られた荷物の詰まったダンボール3個が置かれた部屋にかばんを置いた後、食堂や浴場の利用時間や門限などの簡単な説明を受けた所で明後日からの事も説明さ

れた。どうやら僕は著莪や例の男子のいるクラスではなく3組になるとの事だ。

そうして全ての説明が終了した所でバイブにしていた携帯をチエックすると著莪からの着歴とメールがあつたのに気がついた。《9時頃お菓子持つて遊びに行くから取り合えずサターン使えるようにしとけ》との事らしい。

相変わらずだなと苦笑しつつ、とりあえず言われた通り制服や部屋着、SSや各種ソフトなど当面の生活必需品を詰めた段ボールを開けて言われた通り準備をする。

何気にもう夕食を取らないまま8時過ぎてしまっていたが、まあ今夜は彼女が持つてきてくれる菓子で腹を満たす事にしよう。

午後8時30分ISS学園女子寮——従弟の佐藤から送られた《了解》という件名オンリーのメールをチェックした著莪は約束通り菓子とペットボトル飲料がタップリ入った袋を手に上機嫌でルームメイトに別れを告げる。

「んじゃね鈴。多分今日は佐藤んトコに泊まると思うから」

「ね、ねえ……マジで泊まるのあやめ？　だってその……男の部屋に……」

いつも通りの自然体で部屋を出ようとする著莪に対し、彼女のルームメイトにして仲の良い友人。そして中国の代表候補生にして1年2組のクラス代表である鳳^{ファン}鈴音^{リンイン}——鈴は顔を紅潮させながら彼女に尋ねる。何せ彼女はこれから男子寮に忍びこみ、本日、学園中を

騒がせた転校生である従弟の元で『一夜を過ごす』と言っただ。男女交際に人1倍の興味と怖れを抱く10代乙女としては、友人の行動に戸惑いを隠せないでいた。

しかも――相手は従弟とはいえ、全裸で学園を駆け抜ける様な変態の所に、だ。

転校してからまだ2週間程度の付き合いでこそあるが、鈴にとって著莪あやめという友人は羨望すら抱けるほど気持ちの良い女性だった。母親譲りの整った容姿やスタイルは元より、それを全く意にしない気安さ、老若男女関係なく誰とでもすぐ仲良くなれる社交性は、女性と言う立場だけで傲慢な態度を取る矮小な連中とは真逆なものを感ずる。何より同学年であるにも拘らず、どこかしら大人びた印象を受けるのも魅力の1つだろう。

転校当初、その人柄からクラス代表に選ばれた著莪に対し、鈴は『私とクラス代表を変われ』とにべもなく言い、当の著莪を除くクラス中の女子から悪感情を抱かれたのだ。女尊男卑の思想こそ抱いていないが誰に対しても些か不遜な態度を取る鈴は、例えそれでも一向に構わないと思っていた。

所詮、人なんてものは圧倒的に優秀な能力さえ見せればおのずと付いてくるもので、自分にはソレがある。だから多少の横柄な態度も然るべきものという考えだったのだ。そもそもに自分はこのクラス唯一の専用機持ち、少々来るのが遅れたくらいで代表になれないなどとい話の方がお役所仕事も甚だしいのだという考えを信じて疑わなかった。

そしてそんな彼女に対し、あやめは少し考えた後にこう言ったのだ。

『うーん……まあ、元々面倒だったから譲ってもいいけどさ、1コ条件がある。1組の奴らみたいに代表の座を懸けて勝負！　なんてのはどう？』

鈴はそれを聞いた後、最初は鼻で笑ってこそみたが、実力をクラスの連中に見せる丁度良い機会だと考え了承したのだ。

そして数日後行われたクラス代表決定戦——彼女は敗北したのだ。試合にはなく。著莪あやめという人間の器に……

鈴の第3世代機である《^{シエンロン}甲龍》に対し、あやめが選んだ機体は訓練機でフランスの大企業《デュノア社》製の第2世代ISである《ラファール》。圧倒的な性能差を前に試合は終始、鈴のペースであったにもかかわらず、結局負けたにもかかわらず、彼女は——著莪あやめは笑っていたのだ。

まるで純粋なゲームを楽しむ子供の様に、装備の差もまるで意に介さず果敢に挑み、エネルギー残量が0になるその瞬間まで決して諦めずに己の知力と体力の全てを賭けて、真っ直ぐに。

そして負けた後の第一声がこれだ。

『負けた負けた！　やっぱ強いね代表候補生は、けど次は負けねー』

と、鈴はポカンと開いた口がふさがらなかった。そして、気が付くと周囲では激しい勝負を繰り広げた両者を称賛する拍手に包まれていたのだ。健闘した著莪は勿論、機体性能差に躊躇などせず、決して手を抜かずに全力でこれに向かった鈴にも、気がつけば彼女は当初目論んでいたよりも遥かに居心地の良い形でクラスの代表になっていたのだ。

その時、鈴は著莪に尋ねた。

『アンタ最初っからこうなるって分かって試合した？』
すると彼女は

『まさか。こっちはただクラス代表の立場を賭けるだけで代表候補生や専用機と真正面から戦える機会があつたからやっただけ、勿論勝つ気でね？』

と答え――

『何でそんなに強気になれるんのよ。普通無理って思うでしょうが専用機持ちの代表候補生と訓練機乗りの1年なんて……』

『だから面白いんじゃない！ トライ&エラーって知ってる？ 私アレが求められる状況って結構好きなんだよね』

と言ったのだ。

その笑顔を見て、鈴はまんまと思ってしまったのだ『ああ、イイ女ってコイツみたいなの事言っただろうな……』と――

それから鈴はルームメイトという偶然も相まって、学園生活での大半の時間を著莪と過ごしてきた。放課後の部活の時以外は殆ど一緒と言っても過言ではないだろう。おかげでこの学園に来た最大の目的である想い人と別クラスになってしまったという不満も随分と軽減され、かなり楽しい学園生活を送れている訳だ。

そして、そんな彼女と一緒に話しているとセガというゲームメーカーの素晴らしさについての次に話題になるのが同じ日に生まれてそ

のままセツトで育ってきたという従弟「佐藤洋の存在だ。

著我曰く『あんまり賢くなく。誰とでもじゃれつく出来の悪い犬みたいな奴』『どっかもう一人の自分みたいな感じのする相方みたいなもん』とエライムラのある評価を受けるその少年に鈴はかねてから興味はあった。……無論、男性としてではなく友人が実家で飼ってるペットに対する興味的な意味合いで。

恋人同士ではないのにある意味で実の夫婦以上に強い繋がりを持つパートナーがいる。

それが彼女を『イイ女』たらしめている要因の1つではないのかと鈴は推察していたのだ。

そして、叶うなら自分も『アイツ』とそんな関係になつてみたい……。

そう考えた鈴は瞬間、ある企てが脳をよぎった。

「ねえあやめ、あんたとあんたの従弟って明日の午後とかは時間ある？」

「えっ、あー……多分大丈夫かな？ どうせ佐藤も荷物整理しかやることないだろうし、何？ 午後から一緒に遊ぶ？」

「ううん。それよりちょっと面白い事を、ちょっとね……」

閃いてから数秒、あっという間に構築された『明日のイベント』の青地図を思い描きながら、少しばかりニヒルな感じで微笑む鈴の提案に、著我がノリノリで乗ったのは言うまでもないだろう――

「コーヒー淹れました。ここにおいておきますね織斑先生」

「ん、ああ、ありがとう山田君。すまないな……結局残業に付き合わせてしまった」

時刻は間もなく午後１１時を迎えようとした所のＩＳ学園職員室。先に帰っていいと言ったにも関わらず律儀に残業に付き合ってくれた副担任の淹れたコーヒーを受け取る千冬。数時間に渡るデスクワークですっかり固まってしまった身体を伸ばし、胃に熱いコーヒーを流し込む。

「それにしても大変でしたね夕方の事後処理……。幸い佐藤君のご両親や彼の所属している陸上自衛隊からの苦情が無かったので救いですけど……ていうか笑ってましたね。彼のお父さん……」

本日夕刻、ＩＳ学園敷地内で起きた全裸の少年による襲撃事件は国家機関の権力のフル活用でどうにか表沙汰になるのは避けられたがそれでもネット上ではやれ『女尊男卑社会に警鐘を鳴らす為に命懸けの特攻をかけたテロリストの暴走』だの『女子生徒に捨てられ自殺した男子生徒の怨霊』だとか早くも話題になってしまい。事態鎮圧にＩＳを出撃させた弁明も含め関係各所への謝罪と報告がこの数時間の主な仕事内容だった訳だが、その中でも本来なら最も抗議して然るべき陸上自衛隊ＩＳ開発部——佐藤の叔父で著我の父親が責任者と務める研究機関や彼の実父からの軽い応対に山田はそろ寒いものを感じていた。

実の息子がこちらの一方的な誤解で殆ど全裸にひんむかれ、武装し

た女子生徒に散々追い回された拳句にISで袋叩きにされたというにも関わらず、その話を終始ゲラゲラ笑って聞き流し、拳句『やっぱアイツ、俺の息子だなあ』。俺も昔同じような事をした』などと俄かには信じられない事をいつてのけたのだ。

アンタら親子は2代に渡り何を伝承したんだ！ と温和な彼女がツッコみたくなつた程だ。

「まあ、ある意味では予想通りに反応ではあるな……。何せ佐藤は過去に3度車にはねられた事があるらしいのだが、その内2度は父親による前方不注意が原因らしい。……急な便意に襲われて駐車場で遊んでる息子の姿が目映らなかったらしい。他にも主に父親や祖父が原因で幾度となく平和な日常の世界で死にかけた過去があるらしい」

「……私が佐藤君なら何の躊躇いもなく児童相談所に飛び込んでいくんですけど……。というか、随分彼の事に詳しいんですね織斑先生？」

俄かには全てが信じ難い佐藤の経歴を聴きドン引きする真耶であったが、同時に浮かんだ疑問をそのまま口に出す。《世界で5番目に確認された男性操縦者》でこそあるがどういう訳か織斑一夏とはまるで正反対に世間にその存在を知られていない佐藤の事に妙に詳しい千冬の言動に違和感を覚えたのだ。

「……佐藤自身は私の事を初対面だと思っているようだが、実のところ、私は7年程前にアレと会った事があって……。陸自の駐屯所で新人隊員と同じ訓練をさせられていたよ……」

当時まだ『ISの軍事利用は全面的に禁止する』というアラスカ条約が締結されておらず、各国家間に緊張が走っていた当時、まだ十代後半であった千冬は半ば強制的な形ではあるが、自衛隊の準隊員と言つ肩書きで所属し、様々な技能を学ぶ事になっていたのだが、その中でも良い意味でも悪い意味でも名の知れた『佐藤教官』の所で学んでいた時期の事だ。

親子2代で自衛隊に所属し、祖父は第2次大戦を生き延びた歴戦の勇士でブービートラップの神と呼ばれる人物。本人も『猛吹雪の日』にバスタオル一丁で出掛け、全裸で帰つて来た』だの『偶にかめ。め波の練習に励んでいる』『某国に職場の情報売っている』だのぶつ飛んだ噂に事欠かない彼の訓練は非常に大雑把且つ危険であり、千冬はそのずぼらな安全管理によつて何度も死にかけながらも、反面で精神と体力をギリギリまで追いつめられ、成長を余儀なくされた日々を送っていたある日の事。当時9歳だった佐藤は夏休みに入つて間もなくの頃、父親に手を引かれ大の男も根を上がる千冬らや新入隊員と同様の訓練並びに雑用をやらされていたのだ。

父親に聞いたところ、彼曰く『いやね？ 洋の奴が友達から貰ったとかいうネズミの化け物のキーホルダーをいじりながら「夢の国に行きたい」なんて言うからよ。「ゲームの世界になら連れてってやるぜ？」って聞いたんだよ。そしたら目を輝かせて「行きたい」って言うから連れてきたんだよ』という意味不明な解答が帰つてきて理解に苦しんだが、とにかく佐藤は掃除や洗濯などの雑用に追われながらも自分たちと同様に十数kgの土嚢を担いで数十kmの距離を走るなど小学生であることを加味すれば立派な児童虐待級の訓練を強要され、強靱な体力と父親のズレた精神を培つたらしい――

「……まあ、そういう訳で当時は弟に接するように何度か話をした

り傷の手当てなどをしてやった事があるんだが……数年ぶりに遭ってみれば、見事に父親似な小僧に育っていた訳だ」

「世の中には色んな親がいるんですね……」

焦燥に狩られた様子で口にする真耶の言葉に『全くだ』と同意する千冬。自分たちの親の様に無責任に子供を捨てる親もいれば、佐藤父の様に破天荒な思考パターンと行動で息子を振り回す親もいる。

人は人生のスタート地点である親元だけではどう抗っても選ぶ事が出来ないのだなと改めて世に蔓延する必然的な不公平を痛感する。そして同時に――

「……………あの男、今回の件を恨んでいなかったな……………」

「え？ ああ、そうですね……………」

その様な不公平や不平等、理不尽に対し、微塵の悲観を抱かない佐藤の態度に千冬と真耶は思考を傾ける。

色んな意味で凄まじい親族に幼少の頃から虐待スレスレの目にあわされながらも微塵も気にした様子も見せず親子関係を保ち。自分を裸にした警備員に対しても、ボコボコにした女性生徒に対しても、それを支持した自分たちに対しても、彼は一切、恨みの感情を抱いていない。それどころか目覚めた時にはどっという訳か股間を全開に滾たぎらせていたのだ。

頭にガタがきているのか。はたまた稀代の大物なのか……。

「佐藤 洋。か……………」

ふと、その名を呟きながら、今後弟と深い関わりを持つ男（無論、性的な意味ではない。……多分）に想いを馳せる。ブリュンヒルデ（千冬）であった――

第2話 ルームメイトは金髪（ブロンド）の麗人（後書き）

次回はいよいよIS主要メンバーが登場！

でもってようやく佐藤の専用機も登場する予定です。

因みに佐藤の活躍はすでに筭たちにも知れ渡っています（笑）

第3話 灰狼（アッシュフルフ）（前書き）

皆様お待たせいたしました。

最新話の投稿です。

IS戦はうまく書けたか不安ですが……楽しんでいただければ幸いです。

第3話 灰狼（アッシュフルフ）

第3話 灰狼 アッシュフルフ

あの屈強な警備のおっちゃん（スプリガン）との肛門の純潔を賭けた激闘から幕を上げた僕のIS学園生活二日目の朝は、ボサボサの金髪が鼻をくすぐ擦る感触から始まった。

夜中、予告通りビニール袋いっぱい詰め込んだお菓子とジュースを持参してやって来た著莪と明け方近くまでゲームをした後そのまま僕たちは寮に備え付けられたシングルベッドで重なるようにして寝落ちしてしまっただけらしい。鼻孔を擦るのは、著莪のシャンプーの匂い。中学の頃まで……といってもまだ2カ月程だが、毎晩の様に嗅いでいたものだ。

お互いの実家が200mも離れていない上に自衛隊員やIS開発者及びその助手、ネトゲ廃人という職業柄、共に両親が家をあげがちな事情もあった為、夕飯と一緒に食べた後にどっちかの部屋で深夜までゲームをし、そのまま寝てしまうというのは日常的にあったから、このシチュエーションに特段、同様なんかはしない。しない筈なのだが……

「んん……アレ……もう朝……？」

服越しに伝わる感触に数か月前にはまだ感じられなかった明確な柔らかさが……コイツ、もしかや成長したというのか！？

確かに冬場は厚手の服に覆われていまいち確認は取れず、実質的には半年ぶり位だが、その頃の著莪の胸なんてまだこんな……コレが……コレが二次性徴の力だということのか！！？

「今何時だろ……ってオーイ佐藤く！ お前はそんな目を見開いた状態で寝てるのか？」

素晴らしい……全くもって素晴らしいとしか言いようのない現象だ。これはもう奇跡の所業。生きとし生ける全ての男子諸氏の希望と言っても過言ではない。僕は人体の神秘に歓喜し、朝日が差し込む窓に意味もなく敬虔な信者の如く祈りを捧げたい衝動に狩られた。

「おーい！ いい加減無視すんなっつの！」

「はうあつ！！？」

だが、そんな僕の神への信仰は突如男子にとって最もデリケートな部分に稲穂の如く走った衝撃によって消し去られる。

先程から僕が人類の進化や人体の神秘について大変に高度な考察に没頭しているのが面白くなかったのか。いつの間にか目を覚ましていた著我はあるう事が健全な10代男子特有の生理現象でその……朝から大変立派な事になっていた僕のアレを掴み……

「オラオラオラオラオラア！」

「アバババババババツ！」

彼の名作《。ヨ。ヨの奇妙な冒険》の3代目主人公ばりの勢いで著我が僕のナニに猛攻を仕掛け、僕は壊れた人形の様な奇声を上げてのたうち回る。

——ああ、神様。僕が一体何をしたというのですか？ 僕はつい今しがたまで、この世界に二次性徴という素晴らしい現象を生み出してくれた貴方に、感謝の意を示したいたのですよ？

「ふう、やれやれだぜ」

「うぐう……」

「ホラ、佐藤。もう目が覚めたでしょう？　ボチボチ起きて飯食わないと約束に遅れるぞ！」

自分が男の子にとってどれほどな苛烈な事をしたのか理解してないのか、彼女は悪気なくニツコリと笑いながら起き上がる。時計を見ると確かに既に10時を回っており、12時の待ち合わせまであまり余裕がない。

「ああ、そうしたいけど男子寮^コって休日^コは食堂やってないんだよな……。女子寮は男子禁制だし、食べるトコって他にある？」

「んー、ならアリーナに向かっちゃおっか。あんまりメニューないけど軽食とかおいてあるカフェあるし、それが購買にあるコンビニッて手もあるけど」

「ならアリーナの方に——」

「310号室　佐藤——ここだな」

昨日まで主の居なかった男子寮の部屋の前、IS学園に在籍する80名ばかりの男子生徒の中で唯一の操縦科生徒であった（……）

織斑 おりむら いちか 一夏はインターホンを鳴らした。時間は既に午前10時過ぎ——彼の基準では休日と言えど十中八九起きているであろう時間を見越しての訪問の目的は無論、今後何かと行動を共にする事になるであろう自分に続く『二人目の操縦科生徒』である佐藤 洋への挨拶だ。

2月に起きた驚くべき偶然の連続の末、世界を揺るがす大ニュースと共に半ば強制的に通う事になったIS学園に入学して早1月半。一夏はこの日を心待ちにしていたのだ。

何しろ本校は世の女尊男卑社会の要因となったISについて学ぶ世界唯一の教育機関。女子の女子による女子の為に設立された女の園と同じく高倍率の入試を受かった世間的にみれば充分に優秀と言える男子でも、女子とは深い溝——否、決して埋められない高い壁がある。

そんな絶壁の向こうの女子エリアへと唯一人放り投げられた彼は言わば珍獣扱いであり、また寮の中では「何故だか」敵意を向けられるか腫れもの扱いされ無視されるかの2パターンが殆どであり、正直な話、すこぶる居心地の悪い日々を過ごしていた。

現在の社会風潮に良い感情を抱いていない身としては自分と言う存在がこの学園の中心に聳そびえるそんな男女の壁を多少でも低く出来ればと入学当初は思っていたが、これが中々思う様にいかない。

現に自分を『ISを操縦出来る男子』としてではなく、1人の「織斑 一夏として」扱ってくれている友人と確信できるのは、幼馴染の《篠ノ（の）之 篤》ほづきと《鳳 鈴音》ファン リンインに入学当初に勃発したクラス代表決定戦の末に分かり合えたイギリス代表候補生の《セシリア・オルコット》そして鈴を経由して知り合った。著莪あやめの4人くらいであろう。

そんな一夏にとって、これから知り合う佐藤 洋はさながら歓迎すべき増援とも言える存在であつた。詳細は知らないが自分と同じ様に偶発的にIS操縦者になつてしまったらしい同い年の少年。彼との邂逅が待ち遠しく。『約束』に先んじて会いに来たのだ。無論、そこに性的な意味合いはない。

「まだ寝てんのかな……？」

インターホンを鳴らして既に数十秒。何かしら部屋の中でドタドタと物音が聞こえるが、ドアが開く気配はない。もしかして入寮1日目にして既に部屋に招き入れる友人が出来て、ふざけ合っているのだろう？——だとしたら羨ましい。と、現状高校ではまだ1人も同性の友人が出来ていない一夏は素直に思う。

「おい！ 佐藤くん？」

しばらく待った後、今度はドアを少し強めの力でコンコンとノックし、その名字を呼ぶ。

するとしばらくして——

「ハイ！」

今気付いたとばかりに間延びした返事と共にドアノブが開く。すると視界には見覚えのない自分と同じ位の背格好の少年と、見覚えのある。天然物の金髪をボサボサにした眼鏡の少女が……居た。

それも、黒髪の少年の背中に金髪の少女が抱きついていてという。第3者視点から見れば、かなり親しげな様子で、男子寮の一室と言う空間で——

「おっ、一夏じゃん！ オッス！」

「えっ、著莪の知り合い？」

「オ、オジャマシマシタ……」

至って自然体で自分に挨拶をする著莪や、そんな彼女に背中から抱きつかれた状態でも自然体で彼女に疑問符を向ける佐藤と思われる少年を尻目に、一夏は固まった表情で機械的に扉を閉めるのであった。

「アハハ、そつかそつか、勘違いか。俺はまたテッキリ二人がそういう関係なのかと……」

時間は間もなく午前11時になるうかと言う頃、僕と著莪は初対面で行きなり『深夜ふと目が覚めたら両親が実にアブノーマルなプレイスタイルで自分の弟妹の生産を行っている様を見てしまった中1男子』の様な間抜け面を向けた織斑君に対し、本日の待ち合わせ場所である第1アリーナに程近い位置にある学園内のカフェテリアで今朝の事に対する説明をしつつ、遅めの朝食としてホットドッグを口にしていた。

「普通にゲームしてそのまま寝落ちしただけだって、まあ確かに迂闊に開けて先生とかだったらまずかったけど」

「命拾いしたよな？」　って訳でここは佐藤の奢りってことで」

「いや、なんでそうなるんだよ。この場合は著我も共犯——」

「このご時世で女子の言い分と昨日全裸で校内を駆け回った男子の言い分、どっちが信じられるんだろっね？」

「くっ……」

ニヒヒと楽しそうに笑いながら一緒に頼んだアイスカフェラテを飲む著我。そうだった。コイツが先に学園に来てからの期間は平和そのものであったが、基本的に彼女は僕の財布を自分の第2の財布として扱い。只でさえなけなしの仕送り（毎月3万円）しか収入源の無いペラペラの財布を恋人の様に親身になって金を貸し、悪魔の如き利子を加えて取り立てる消費者金融の如く搾り取るのだ。

目を瞑れば思い出す。未だに断ちきれぬ悲しみの連鎖——

「なあ佐藤。寒いからおでん食べよう。てか奢って。ていうか奢れ」

「ノーと言える日本人の僕はキチンと反抗」

「よし、じゃあこうしよう。じゃんけんしてアタシが買ったら佐藤がおでん奢る。負けたらそうだな——キスしてやる。思いつきりデイーブなやつ。……いい？ アタシ絶対パー出すからね。パー。じやーんけーん……」

この時点で僕の選択肢は2つ。仮に僕がチョキを出せばこの手の事で嘘を付かない著我は必ずデイーブなキスをするだろう。しかしそうならなつたで著我は翌日学校中に『僕とキスした』という話を面白おかしく広め、校内ではクールなナイスガイとして決めている

る僕のイメージは総崩れ。更に憧れのマドンナである広部さんに妙な誤解を与えてしまう——事実上僕には、ゲーを出し、泣きながら著莪におでんを奢る道しか残されていないのだ。

やはり食費の節約は豊かな学園生活を送る上で重大な課題になるだろう……。

一方、そんな僕らのやり取りを見て、織斑君はまた不思議なモノを見る様な目をしながら、僕に質問をする。

「なあ佐藤、あやめ。お前らっていつもそんな感じなのか？ 何て言うか——スッゲー仲いいのな」

「え、そうかな？ 従姉弟でしかも近所同士で過ごしたなら大体こんな感じじゃない？ 殆ど姉弟と変わらないもんだし」

「いや、ウチの場合姉さんとはそこそこ歳離れてるし。それにそうだな……仲の良い幼馴染は2人いるけど……2人共なんでか俺への当たりが強いんだよなあ」

そう言いながら溜息を零す織斑君の少し丸まった背中中は、IS発表以前からご近所でも有名な力カア天下で知られる実家斜向かいに住む安田さん家のご主人に似ていた。ハハーン、さては彼、石岡君と同じタイプの残念系男子だな？

小中9年間で大体いつも同じクラスになっていた石岡君。彼は今どうしているだろう？

中3の1学期期末試験前日。僕が時を操る魔法に憧れ、ほんのささ

いな悪戯で彼の部屋にあつた目覚まし時計の針を1時間戻した結果、テスト初日に遅刻した結果内申点を下げ、当時成績が横並びで僕と争っていた私立烏田高校の推薦枠を奪われた結果、1ランク下の高校に行く事になってしまった彼は、今、どんな間抜けな伝説を紡いでいるのであろう……。

「あ、いたいた！ アンタたちもう来てたんだあやめ！ 一夏！
で、そっちの奴が例の……？」

と、僕が今のこの空の下の何処かでロクな事をしていないであろう旧友に想いを馳せていると。近づいてくる3人の女子生徒が現れた。その中でも一番小柄で、何処となく猫を連想させる印象の少女が著莪や織斑君に親しげに声をかけ、何故か僕には微妙な距離を保ちつつ、珍獣を観察する様な視線を向ける。

一目惚れひつめぼれさせてしまったのかもしれない。

「おはよ鈴^{リン}。うん、そう。こいつが従弟の佐藤。まあバカだけど1つ仲良くしてやって」

「その自己紹介はないんじゃないか著莪？」

「や、大事な事だし……ねえ？」

何故か当然の様に僕にバカの式を成り立たせる著莪をジト目で見るが、彼女は全く気にしない。全く、お前は何年僕の従姉をやっている？ 僕と言えbaumと色々あるだろう？ イケメンだとか。クールに見えて実は熱い男だとか。今はアイドルとして絶賛活躍中の広部蘭こと鬼灯ランさんの中学時代の未来のダーリンだとか。小4の

夏休みの自由研究で石岡君を被検体サンプルに祖父じいさんに仕込まれた十数種類のブービートラップを駆使し、極めて多種多様かつ詳細な情報を記録した『意外と簡単なブービートラップ』というテーマの研究成果を提出するくらい知性溢れるナイスガイだとか。

——因みにまたまた余談だが、この研究成果はあまりの完成度から6年たった現在でも動画系サイトで見る事が出来る。興味のある者は『玄関開けたら1秒でブービートラップ』ないし『いつてきまああああ——！？』のどちらかのキーワードで検索すれば見つかるので試してみるといい。

自宅玄関前を一步出た途端、地上数メートルまで瞬時に釣りあげられたバカそうな10歳前後の少年、それが件の石岡くだん いしおか 勇気君だ。

「フーン、まあ確かにバカじゃなきゃ裸で学園走りまわらないわよね。——あたしは鳳 鈴音。あやめとは同じクラスでルームメイト、で一夏とは幼馴染の中国代表候補生よ。取り敢えずよろしくね佐藤」

「篠ノ乃 篝だ。……………よろしく」

「セ、セシリア・オルコットですわ。……………本来なら貴方の様なその……破廉恥な殿方とはあまり親しくしたくはないのですが……あやめさんの従姉さんという事ですし、一応、“友人の友人”として扱わせて頂きますわ……」

そんな著莪の酷い紹介の所為せいか。或いは昨日の一件あるが未だに尾を引いているのか。鳳さんはまだいいとして、長い黒髪をポニーテールにセットし、少し釣り上がった目と急成長を遂げた著莪すら凌駕するかもしれない。大変良い乳房をした篠ノ乃さんと、少しウェーブの掛った金髪のロングヘアに青い力チューシャが印象的なスラリとしたモデル体型の、北欧系女子のオルコットさんら二人の僕に対す

る態度は露骨に変質者を見る様なソレであつた。

僕に気があるのかもしれない。

「フーン。確かに少しバカっぽいけど、案外普通の見た目ね？ てか、アンタたち、従姉弟なのにビツクリする位似てないわねえ」。

もしかして複雑な家庭環境？」

そんな僕と彼女たち二人の間にある微妙な空気を汲んでくれたのか？ 鳳さんが二人とも親しいらしい著莪を絡めてのネタで話題を振つてきてくれた。そこへ更に織斑君も乗る。

「だよなー。それにお前らお互い名字で呼び合うのも変じゃないか？ そんなだけ仲良いのに。それに親戚とかで集まったら面倒じゃないのか？」

「あー、それは著莪が『デス。リ。ゾン』っていうゲームにハマつて、そこに出てくる『横滑り佐藤』っていうのが気に入ってそれで……まあ、半分あだ名みたいなもんかな？」

因みに敢えてスルーさせて貰ったが、親戚関係の集まりの心配は必要な。何故なら数年前、正月に親戚一同が集まった際、僕と著莪の誕生日が同じと言う事に関して話題がふられた際、弟である著莪パパに

『つまりアレか！ 俺たち同じ日に仕込んだってわけだ、やっぱ血を分けた兄弟だな！』

という最低の下ネタを口にして以降、一切その手の会合に呼ばれなくなつたから……。

おかげで子供にとっては最大の収入源であるお年玉も激減である。
親父はビンボー神かなんかか？

「……一夏、あやめ。談笑もいいがそろそろ向かわないとアリーナの
使用時間になってしまうぞ」

「ああそっか、あんがと筈。そんじゃ佐藤、あたしら先に出るから
会計は任せた！」

「ってオイ！ ホントに僕が奢るのかよ！？」

「なんならまたじゃんけんする？ あたしが勝ったら佐藤の奢りで、
負けたら胸を揉ませてやる。直で。いい？ あたしグー出すから」

「えっ、ま、待て著莪！ ちょっと——」

「じゃんけん——」

その後、僕の財布が3人分のドリンク代と2人分のホットドッグ分、
軽くなったのは語るまでもないだろう……。

当然の話ではあるが兵器として最強を誇るISは、学園の敷地内に
おいても好き勝手に使用は出来ない。例え何時でもどこでもISを
起動できる専用機の持ち主でも。そしてその限られた使用が出来る
場所の1つが、学園内に5つ存在する競技用アリーナだ。

現在、表向きにはスポーツ競技としてその地位を確立しているISを公式大会と同じ環境下で操作し、模擬戦も行えるこの施設は、授業での使用は元より放課後や休日なども向上心のある生徒で連日賑わっており、また事前の申請を行ってそれが受理されれば一定時間、貸し切りにして公式戦と同じ環境下での試合を行う事も出来、そういった試合が行なわれる際は寮の掲示板に大々的に宣伝され、対戦カードによっては休日に予定の無い生徒にとって恰好の娯楽の一環にもなっていたりする。

そして、その日行われる試合はそういった話題性で言えばかなりの好カードであり、広大な観客席にはかなりの人数の女子生徒で賑わっていた。

『学園に2人、世界に5人しかいない男性操縦者同士の対決』

という。滅多に見られない一戦に――

「いやー、夜中に思いついて朝の告知だったのに随分集まったな」

「まあ、これ位は当然なんじゃない？ この間のクラスマッチも含めて一夏つてばもう学校中の注目の的だし、佐藤は佐藤で昨日の騒ぎで色んな意味で噂になってるし。注目された人間同士の対決ではあるからね」

「鈴、あの男と一夏を同じ土台で上るな。注目のされ方が違う」

「そうですね！ あんな変態さんと同じ扱いでは一夏さんが可哀そうですね。そもそもに勝負になるかどうか……」

そんな客席の込み具合を見渡しながらこの注目の一戦をマッチメイクした著我と鈴、そして箒とセシリアは、雑談を交わしながら他の者と同じ様に試合開始を待つ事になっていたが、そんな彼女たちの背後に、威厳に満ちた気配を纏う女性が近づく。

「ほう。篠ノ乃とオルコットは随分と織斑臍肩の様だな?」

「お、織斑先生! 何故こちらに?」

「試合の見物に決まっているだろう。それと小娘共がはしゃぎすぎないかの見張り、といった所だ。隣いいか?」

「ど、どうぞ……」

現れたのは1年生の寮長にして、学年主任。有事の際はIS学園における全指揮権を保有する権力とそれに見合う力量を併せ持つ。まさしく現代の女武将。初代ブリュンヒルデ 織斑千冬。彼女の登場に著我を除く3人の態度や表情はさながら借りてきた猫の様に豹変。そこには畏敬の念とは別に、未来の義姉になるかもしれない人物へのご機嫌取りという側面があるのと言うまでもない事実だろう。

「「「……………」」」

「ん? どうした? いつもみたいにバカ騒ぎはしないのか? 休日なんだ。遠慮する事はないぞ?」

「ハ、ハア……」

「それは、そうなんですが……」

「うう……」

4人の少女たちの座る席の一段上の席に鎮座し、試合前の余興で見
るかのように促す千冬。

しかし『気になるアイツのお姉様』を前にナチュラルな自分をさら
け出せる十代女子がこの広い世界に果たして何人いるのだろうか？
そしてそんな微妙な緊張感の伴う空間を著我だけはニヤニヤしな
がら見守る。

「フン、つまらん……。で、著我、実際のところお前の従弟と織
斑、どちらに分がある？」

そんな緊張でかたまつた3人娘いじりにも飽きた千冬は隣に座る。

この中で唯一、自然体のままな著我に質問、彼女だけが今日これか
ら戦う事になる佐藤と一夏、その両方の実力を把握しているからだ。

「うーん、そうですねー。IS関係ないガチの殴り合いとかなら多
分佐藤が勝つんでしょうけど、IS戦だと……普通に戦えば（……
……）一夏の勝ちは堅いと思いますよ？」

「ほっ」

千冬の率直な質問に、これまた忌憚のない率直な意見を持って返す
著我。

『単純な戦闘能力では勝るがISを使用した戦闘では勝てない』男
女間ならいざ知らず、同性同年代同士による戦いにしては随分と極
端な結果予想だ。

「なにそれ。佐藤ってもしかしてまだ稼働時間少ないとか？」

「いんや。学園^{「」}に来るまでは叔父さんたちにぶっ続けで訓練受けさせられてたらしいから少なくとも一夏よりは長いと思う」

「では、どうして？」

「単純な話で機体性能差。なんつっても佐藤のISって——」

「第1世代機っ!？」

「うん。まあ……」

更衣室でISをより効率的に運用する為に着用するISスーツに着替える最中の雑談で僕が漏らした一言に驚く織斑君。無理もない話だ。

世界で最初のIS 白騎士 が完成してから10年。既にその開発は第3世代機主流で動いているご時世において僕の使う機体は2世代遅れの第1世代。PS3やらWiiなどというハードが席巻するゲーム業界において、未だに名器とはいえ^{セガサターン}SSを熱心にプレイする位、世間から見ればアナログといえるだろう。

「ここだけの話なんだけど、僕のISって元々はコアに異常を来たした欠陥機で、どういう訳かウチの親父が僕、著莪にしか反応しなくなっちゃんだ。それでその原因解明も兼ねて息子の僕に押し付けられたという訳で……」

っていかそもそもコアをブツ壊したのがその親父んだけどね！

この事まで口外すると確実に国際問題に発展しかねない。只でさえ以前、職場の情報を“北”に売ったのがバレそうだったのに……

アレか？　ウチの親父はもしかして日本と僕の平穏な生活を壊滅させる為に送り込まれたどこぞの国家機関のまわしものか！？

「そ、そつか。お前も色々大変なんだな……けどそれじゃあ逆に他のISは動かせないって事なのか？」

「著莪は普通に適性Aだったらしいけど僕の場合は全然。だからコレが僕の専用機って言うより、僕がコレの専用テストパイロットって感じなのかな」

そう言いながら惜しめない哀れみの視線を向ける織斑君に対し、僕は左腕に付けた金属ベルトのアナログ腕時計——待機状態になっている専用機 灰狼^{はいろう}を見せる。ああ、なんだろう。ここに来る事になった経緯を話したらなんだか親父のバカ笑いを浮かべる姿まで思い出して一気にブルーになってきた。

ホント、僕のテンションを下げる事に関して、あのおっさんの右に出る者は存在しない。

『間もなく。試合開始時刻です。両選手はピットに入ってください』

「おっ、いよいよか。じゃあ、アリーナでな佐藤。お互い全力を尽くそうぜ」

「う、うん」

そんなやり取りの所為もあって男二人の間で微妙な気まずさが生まれつつあったが、いいタイミングで呼び出しがかかった事と、気を利かせて明るく振る舞ってくれた織斑君の気遣いにより、幾らか空気は緩和された。

どこか人の気持ちに鈍そうな、石岡君（残念な友人）と同類の匂いがした彼だが、どうやらかなりいい人っぽいのは間違いないらしい。

『間もなくハッチが開きます。両選手はISを起動して発進態勢に入ってください』

スタジアムへと続く薄暗いピットの中で響く女性的な電子音声が続く中、僕は腕時計（IS）が巻かれた左手をかざし、展開。最初は5分くらいかったが、今は1秒強で頭の中でイメージが構築出来る様になった。後はエンターキーとなる一言だけだ。

「行くぞ。灰狼！」

瞬間。僕の身体を白い光が包み込み、視界が開けるとそこにはもう紺色のISスーツの周りを灰色の金属の装甲が覆っており、右手には先端にブレードの付いた自衛隊御用達のIS装備であるアサルトライフル 爪牙^{そうが}が握られている。これが僕、佐藤洋の一応専用機である灰狼の展開状態だ。

全体的なシルエットはシンプルで、色と同様非常に地味。両肩に非^ア接続状態のショルダーラスターも含め、全体的に角ばったデザインではあるが装甲は薄く。なんつーかまあ……何度展開しても冴えない印象のあるISだ。ぶっちゃけ同じ国産で量産機でこそあるが、

第2世代機である 打鉄^{うちがね}の方がまだ幾分華やかでもある。この機体をいきなり多数の女子生徒が観戦する場でお披露目するのは、パソニーで校内を駆け回る様な恥知らずな行為ではないだろうか？
まあ、そんな変態いるとしたら親父くらいなもんだろぅが……

ましてやTVで連日注目される華やかな織斑君の第3世代機と対峙するなど……

僕の心に初めての“試合”に対する戸惑い。圧倒的な機体性能のある敵への恐怖など、無様な敗北を晒すかもしれない事への羞恥心、様々な負の感情が巡る。

——誰もが無理だと思ふ勝負をひっくり返す。それが……楽しいんじゃないか。

「っ！」

だが、次の刹那、僕の脳裏に“彼”の言葉がよぎる。

中学卒業から訓練が完了するまでの2ヶ月間の特訓期間中の内、1週間だけ、ふらりと陸自の駐屯地に現れた後、僕にIS戦や灰狼を扱うコツを伝授してくれた長身痩躯の青年。 魔導士^{ウィザード}と呼ばれた男の言葉が——

『あらゆる性能で現行機に劣る旧型、時代遅れのアンティーク。確かにそれがこの機体に向けられる正当な評価だ。だが、それがどうした？ 所詮ISを動かすのは人間だ。最新鋭機を生み出す技術も

また人の英知が生み出すものなら、その機体性能を引き出すのもまた操縦者の知恵と技術、勝利への執念だ。答える佐藤。お前がなりたいのは高性能機に依存し、ただISという絶対的な力に使われる（……）だけのマネキンか？ それとも、ISという道具を支配し、機体の限界を己が力で突破する誇り高き戦士か？ もし前者になりたいというなら、俺がお前にその機体より遥かに優れた機体をくれてやろう。だが、もし、痛みと共に歩み続けるというなら――

――

――俺がお前に、力の使い方を教えてやる。

彼曰く。前者の道もまた1つの答え。最新鋭機の開発に心血を注ぐ技術者の努力や、それを使いこなすテストパイロットたちの努力もまた誇り高き戦いではある。だが――

「時代遅れの機体を手に、そんな最新鋭機やその使い手を戦う。それともまたいい――、愚かで無様と揶揄されるのが何だ。僕は……僕だ！」

女尊男卑も、旧型も新型も関係ない。親父の汚い尻ぬぐいだって、きっかけでこそあるが僕がここに在る意義じゃない。

僕は……そうだ。ISによる戦闘という最高の舞台で空を駆け抜け、強敵たちと戦いたくて、この学園に来たんだ。そして今、その最初の機会がもう眼前にある。

何を恐れる必要がある？ 待ち望んでいたものは、もう目の前にあるんだぞ？

『試合開始1分前です。選手は直ちに入場してください』

僕の心の中を覆っていた霧が晴れるのと同時に無機質な電子音声に

続き、ハッチが開く。

見えるのは何処までも広がる青空。

聞こえるのは、戦いを待ち望む。観戦者たちの声援。

僕は1度、深呼吸した後にスラスターを起動。フワリ、とIS独自の浮遊感に包まれながら空へと翔ける。

アリーナ中央、上空20mには既に織斑君が駆る彼専用機 白式が待ち構える。

僕の灰狼とは別物みたいにカッコイイ、純白の機体。——心なしか『キヤー！ 佐藤君素敵——！ 抱いて——っ！』より『織斑君がんばって——っ！』という声援の方が多いのは、多分この機体のデザイン差だろう。

「……………」

「どうかした？」

ふと気が付くと、織斑君はまた不思議なモノを見る様な目で見つめる。もしや彼には男色の気があるのだろうか？

「いや、さっきまでと随分顔つきが違ってたってさ。なんつか……いい顔してるっていうの？」

やはりそうだ！ 間違いない！！

そう言えばこいつ、ISスーツを着る際も『佐藤って意外といい身体してるんだな』とかいって僕の引き締まった肉体を舐めるように見ていた……様な気がする。

なんてこった……。

まさか女子率80%の学校に転入して最初に男のハートを奪ってしまっなんて、いくらなんでもトリッキー過ぎだぞヨー・サトウ！

だが落ち着け、例え織斑君にそっちの気があるうとも、例え僕に特別な感情があろうとも、今の彼は1人の敵。余計な雑念は捨て、これから始まる戦いに心を向けるべきだ。

「ん、なんだ？ 俺なんか変な事言ったか？」

「い、いや別に……気持ちだけ受け取っておくよ」

「?? お、おう……」

ゴメンよ織斑君。生憎僕にそっちの趣味はないんだ。

内心で彼の気持ちを丁重に断った僕は、再び雑念を捨て、爪牙を構え、距離を取る。

<READY?>

試合開始10秒前——正面に映し出されたタイマーが戦闘開始までの時を刻む。

織斑君の操る白式もまた、刀を模したブレードタイプの武器を呼び出し構え、僕たちの間にピリピリとした。それでいてどこか心地良い緊張感が生まれ、耳に届く会場の喧騒も遠くなる。織斑君の表情もまた、感情の色を消し、集中力を高めている様だ。

5……4……3……2……

胸に燦^{くすぶ}る闘争心を令、解放する！

GO！

「おおおおおつ！」

試合開始の合図と同時に、僕は獣の様な雄叫びをあげて大地を蹴りあげる様に前へ跳び出し互いの間合いを詰める。

次の瞬間、僕と彼の剣はガキン！と耳に響く金属音を上げて火花を散らす。織斑君の顔には驚きの色——明らかに機体性の差がある僕が、初手からいきなり突っ込んでくるとは思っていなかったらしい。動きに僅かだが反応に遅れが生じている。

「うおつと！ いきなり突撃で来るなんて……意外と熱いんだな佐藤は！」

しかし、そこは最新鋭機とその乗り手、僕の勢い任せの剣撃を近接ブレードで的確に受けた後、罅^{つば}迫^ぜり合^あいの状態に持ち込んだ後に出^ト力で僕を押し返す。

奇襲じみたこちらの攻撃に笑みすら零す。

「けど、この間合いなら俺は負けない。何しろ俺は接近戦専用だからな！ ハアアアッ！」

次の瞬間、僕の身体に子供の頃に車で撥^はねられた時のそれに似た衝撃が襲いかかる。罅^{つば}迫^ぜり合^あい状態から巧みに僕の爪牙を下方へと逸らした白式はそのまま間髪^{かんぱつ}入れ時に上段から渾身の力を込めた

一撃を振り下ろす。

僕も咄嗟に態勢を整え刀身でそれを受ける。だがかなり無理をして取り繕った防御態勢は、所詮は張り子の虎、エネルギーを著しく消費する 絶対防御 の発動こそ免れたが僕はその太刀の威力に吹き飛ばされ、地上に叩きつけられる。

「バ、バカげていますわ……。第3世代機に第1世代機でいきなり正面から挑むなんて」

「上手く耐えたからいいけど、ヘタすりや今ので瞬殺だったわね……」

「やはりあの様な変態。（私の）一夏の敵ではない」

「相変わらずバカだねえ」佐藤は

戸惑い。呆然。確信。そして愉快。佐藤の一連の特攻↓玉砕の流れにそれぞれの感想を口にする著我ら4名。その心象は『興奮して迫る猛牛とそれを華麗にかわす闘牛士』に近い。

性能差が明らかな上に能力値も未知数な相手に正面から挑むという彼の行為は、本格的な戦闘訓練を受けている鈴やセシリアから見れば、愚の骨頂とも言える様だったのだ。

「……………フン」

しかし唯一人、この場で最も 闘い を理解している筈の千冬だけ

は、彼女らとは違う感想を抱き、どこか機嫌がよさそうにしていた。

「オーイ、大丈夫か？」

佐藤が駆る灰狼がアリーナのグラウンドに叩きつけられた事で舞い上がる砂埃の中、予想外に景気よく吹き飛ばされた彼の身を案じてか呼びかける一夏。絶対防御を持つEISを装着している以上、怪我をしているという事はまずないだろうが、或いはあまりの衝撃に気を失っているかもしれないという判断だ。

だが、それは失策となる。

警告：この機体はロックされています

「なっ！」

眼前に映し出されるディスプレイに表示された警告を読み終えると同時に、突如土煙の向こうから飛来した小さな物体の突撃により、白式のシールドエネルギーが僅かずつ削られる。

一瞬の動揺の後に慌て回避運動を取り、ハイパーセンサーの機能を全開にして攻撃の発信源に目を向けるとそこには、落下によって生じたクレーターの上に立ち、先程ダメージから来る痛みから苦悶の表情を浮かべながらもアサルトライフルを構え、現在進行形でこちらに向かつて打ち続ける佐藤の姿があった。

気絶していてもおかしくない程の衝撃を受けてから僅か数秒。彼は驚異的な早さでリカバリーし、立ちこめる砂埃を強かにも利用して、こちらに反撃を仕掛けたのだ。^{したた}

「気付かれたかつ……！」

こちらの予想より数秒は早く回避運動を取り始めた白式の動きをセンサーで確認しつつ、僕は短く舌打ちをしながらその場を移動。もう少しエネルギーを削れるかと思っただがそこまで甘くなかった様だ。

上空では今もフルオートで射出され続けている弾雨を機動力にモノをいわせて回避する白式。その機動力には舌を巻きたくなるが、こちらに対抗して射撃武器による反撃はおろかシールドを呼び出しているの防御すらせず、回避運動を取りながら『近づく隙』を窺っている様にも取れるその動きから先程彼が漏らした言葉が真実である事を確信。どうやら白式には本当に中遠距離に対応した装備はないらしく。完全な接近戦オンリーな機体であるらしい。これはパワーとスピードで大きく劣り、それなりの装備を持ってこそいるが、致命打を与えられる装備を持たない僕と灰狼にとって、非常に有益な情報だ。

不確定要素も多いが、僕はある1つの作戦が思いつく。

そして数秒たった後。マガジンの弾丸を撃ち尽くし、それまでけたたましい音を立てていたライフルが沈黙した次の刹那、雄叫びを上げてブレードを構える白式が迫る。

僕はスラスターを後方に向けて吹かし、襲い来る衝撃を可能な限り軽減させながら、爪牙で彼の攻撃を受ける。

「悪いけどもう撃たせない。このまま押し切らせて貰うぜ！」

「だったら僕は引くまでだ！」

また距離を取られて射撃武器でチマチマ攻められては面倒とみてか一気に勝負を決そうとする織斑君に向け、僕は残弾の尽きた爪牙を投擲^{とうてき}。彼は近接ブレードでそれをあっさりと弾くが、それにより彼の意識から一瞬逃れた僕はスラスターを全開にして上空に飛び、アリーナ周囲に半球状の発生した透明のバリアに足を着け、そこを全力で蹴って再び地上へと降下する。

「うおおおおおっ！」

「特攻！？」

そう。彼の言う通りこれは捨て身の特攻だ。スラスターの出力に加え、落下という作用を利用して重力を、さらにエネルギーシールド蹴る事で脚力による勢いも加えた。灰狼^{ほくら}に出来る最大スピードでのこの身そのものを武器にした体当たりだ。前方に向けて腕を交差し、僕は1つの巨大な弾丸となって白式に体当たり。僕がまた距離をとっての射撃戦を仕掛けると踏んでいた織斑君は完全に虚を突かれたと言った様子で僕と言う名の攻撃をモロにその身で受け止めて吹き飛ばす。無論、白式も僕の灰狼もシールドエネルギーがかなり削られたが、幸運にも僕が狙いは最高の形で達成される。

「つつつ………っ！ 雪片^{ゆきひら}は！？」

今の衝撃で織斑君は、武器を落としたのだ。そしてそれこそが、僕の狙い。

それまでの彼の動きから、僕は織斑君の白式は少なくとも『射撃装備・防御装備がないこと』と『とっさに呼び出せる武器が無いこと』を確信し、彼を無力化するには彼を今現在持っているブレードから引き離すのが1番と踏んだのだ。

ISには武器を粒子化してそれをいつでも実体化出来る便利な機能があるが、その呼び出しには馴れた者でも数秒、不慣れなら最悪十数秒の時間が必要となっており、その間彼は完全な無防備だ。更に僕の右手には特攻前に事前に呼び出し準備をしていたグレネードランチャーが握られており、彼が少しでも武器呼び出しの為の動作をすれば間髪入れずに打ち込める準備が整っている。

そして、もし、可能性も高くはないだろうが僕が密かに予想する第3の予測——『白式には近接ブレードしかない』ならば……

「クソッ！ 間に合えっ……！」

白式の遙か後方、フィールドの端に突き刺さっている武器そのものを破壊すればいい（……………）。そうすれば彼はまともな攻撃手段を失い。事実上僕の勝利は確定だ。

そしてその第3の予測が的中し、スラスターを全開にして突き刺さる自分の唯一の装備に向かって翔ける織斑君の動きを見て、僕は迷うことなく引き金を引く。

如何に第3世代機のスピードを以てしても弾丸を超えることは出来ないし、発射されたのは威力抜群のグレネード弾だ。僕は密かに承知を確信し、笑みを零す。だが……

「ハアアアッ！」

「なっ……………！」

そんな僕の勝利の確信は一瞬にして瓦解する。咆哮と共に白式はそれまでとは比べ物にならないスピードで加速し、僕が放ったグレネード弾が着弾するよりも早くブレードまで引き抜き、それを守ったのだ。

虚しくアリーナの壁に穴をあけただけのグレネード弾が生み出した黒い爆煙を背に、彼は劣勢から一転して再び優勢を手にした者特有の笑みを零す。

イグニッションブースト
「瞬時加速……使えたんだな」

「まだロクに使いこなせてないんだけど……そういう佐藤こそ、捨て身の特攻を決めたかと思ったら武器狙ったり、よくもまあ次々と攻め方変えてくるよな……スゲーや」

対して苦し紛れの強がりや冷や汗を零しながら作り笑顔を零す僕に彼は称賛の言葉をくれた。機体性能を考えれば充分に健闘し、対戦相手である彼にそれなりの脅威を与えられたようだ。——無論、それだけで満足するつもりなど微塵もないが

僕は最終的に失敗した策への未練を断ち切るかのようにグレネードランチャーを投げ捨て、新たな装備を呼び出す。グレネード弾は威力こそ高いが通常の銃弾に比べ弾速が遅い上に装弾数も少ない。万全の態勢を取り戻した白式にはまず通じないだろう。持ってるだけ無意味だ。

気持ちを切り替え、僕は新たな一手——恐らくは最後の一手となるであろう攻撃の為に、サバイバルナイフを模したショートブレードを装備。その切っ先を白式に向けて、宣言する。

「もう僕には織斑君を翻弄させる様な手札は残ってない。正真正銘、正面突破で行くっ！」

僕の最後の策——それは策とは言えない真の特攻。捨て身の力ウンターアタックだ。防御や回避を頭から一切除外し、織斑君が僕を仕留めるより早く。彼を仕留める。機体のスペックやこれまでの戦闘経緯から考えればまず間違いなく無謀な手段だ。だが、なればこそ、相手の慢心を誘え、自身に覚悟を持たせる事が出来る。

「……ああ、いいぜ。全身全霊で、叩き潰してやる！」

そんな僕の言葉を虚言とは捉えず信じてくれた織斑君は、正面から受けて立つと言い、近接ブレードの刀身を縦に展開させ、そこから白い光刃を発生させる。

「零落^{れいらくびやく}白夜——白式唯一の武器 雪片式型 の必殺技。この光の刃はシールドを切り裂いて本体に直接ダメージを与える事が出来るんだ。当たれば文字通り一撃必殺。その分エネルギーもバカみたいに食うんだけどな」

どこかニヒルな笑みを零しながら、数少ないと思われる手札を明かす織斑君。どうやら僕を誘っているらしい。『俺の首、獲れるものなら獲ってみろ』と——

バカだな彼は……そんな挑発をされて、燃えない男がいるわけないじゃないか！

それに元よりこちらは背水の陣、相手の得物が大振りになる事だけ見れば、寧ろ僥倖とすら言えるだろう。

僕は左足を一步前に踏み出して突撃体制を取り、織斑君もまた自身の身体で雪片と呼ばれるブレードを隠し、間合いを悟られない様に

する居合いの構えを取る。両者の間で視線と行動だけで意思疎通がなされた瞬間である。

この張り詰めた。それでいて心地良い空気——たまらなくゾクゾクする。闘争本能が呼び起こされる。

「勝負だっ！——」

互いに負けず劣らずの叫びと共にスラスタ―に火を灯し、一気に距離を詰める白刃の騎士（織斑君）と灰色の獣（僕）。

2機が接触するまでの時間は2秒程だが、極限まで集中力が高まった僕らには数十秒にも感じる体感時間だ。その遅々として一瞬の中で、僕はひたすら心を1つ所に向ける。ただ早く。織斑君が剣を振り下ろす前にこの最後の牙を彼の喉元に突き刺して仕留める。それだけで終わる。それだけが勝機。

だから灰狼よ。時代に取り残された旧世代機よ。今この瞬間だけ、スペックの限界を超えてみせる！！

勝利と言う名の餌^{えさ}を求める獣の様に！

——ウオオオオオン！

沈みかけた夕日が辺りを茜色に染める中、IS学園保健室前の廊下で制服に身を包んだ一夏は簾らと共にたった今出てきた千冬を迎える。

「千冬姉。^{ちふゆねえ} どうだった佐藤は？」

「学校では織斑先生と呼べといつも言っているだろう織斑。——心配しなくても佐藤はただの打撲とスリ傷と脳震盪^{のうしんどう}だけだ。目が覚めればそのまま帰れるというお墨付きまで得ている」

「そっか……」

姉弟という関係が鼻肩を生んでいると思われない様に敢えて教師と生徒を引いた態度で弟に先程まで戦っていた対戦相手の具合を知らせる千冬。そんな彼女から佐藤に大事が無いのを聞いた一夏はホッと胸を撫で下ろし——ようやく戦いの勝利を手放しに喜ぶ事が出来た。

「あんだだけ派手にグラウンドに叩きつけられてよくまあそんだけで済んだわね……普通に死んだんじゃないかと思っただわ」

「怖い事言っなって鈴。まあ俺も今の今まで気が気じゃなかったけどさ……」

「まあ、最後は半ば自爆でしたものね……。零落白夜を発動させた白式に正面から挑むなんて……頭の検査を本格的になさった方がいいのかもしれないわね」

佐藤の立場からすればかなり散々な事を口にしながら数時間前の戦闘の決着を思い返すセシリア。彼女たち観戦者の視点から見た決着は、ものの見事に順当。リーチやポテンシャルの差を全く考慮せずにつっ込んだ結果、白式の必殺技をモ口^{くち}に喰らい。一瞬でシールドエネルギーが0になったと同時に強制解除され、アリーナのグラウンド

ドと滑った末に壁に叩きつけられるという3段オチの惨敗だった。スポーツ競技とは言え1つ間違えれば試合でも充分に死ぬ可能性があるという事を実証したという観点からみれば、貴重な一戦と言えるかもしれないが、大半の女子生徒から見た印象は『佐藤、自爆乙（笑）』『ないし』『やっぱり織斑君ってカッコイイよね？』であつた。唯一の救いは今現在、散々な評価を受けている当の佐藤が夢の中で思春期特有のエロい夢を見てニヤ氣ヅラですやすやと眠っている事だろう……。

「佐藤には目が覚めるまで著莪が尽き沿うとのことだからお前たちはもう解散しろ。——織斑はここで少し残れ、確認したい事がある」

その後も試合の様子について蛇足的に語りだす女生徒達に手を叩きながら解散を促し、一方で一夏を引き止める千冬。幕たちの算段としては、この後に一夏の祝勝会とばかりに4人で外で夕飯でもという考えもあつたが寮長にして未来のお義姉様になるかもしれない相手に逆らう訳にもいかず、せめて肩を並べるライバルたちと痛み分けであつただけ幸いと思いながら、若干の後ろ髪を引かれつつ、その場を後にする。

「で、千冬ね……織斑先生、俺に聞きたい事ってやっぱり……」

一方、当の一夏自身にも残された意味は薄々分かつていたようで、真剣な面持ちを彼女に向ける。

「ああ、織斑貴様……零落白夜のリミッターは自分で解除してないな？」

そしてその予測は質問の内容も含めピタリと的中。一夏は「ああ」

とハッキリと頷く。

「佐藤が最後の攻撃を宣言した段階で発動させた時は確かにいつも試合で使う時みたいな、セーブ状態だった。けど、佐藤のISが迫って来た時、何て言うのかな……何か黒くて大きな力の塊みたいなを感じた瞬間。白式が勝手にリミッターを解除したんだ。それだけじゃなくて何て言うのかな……漠然とだけど、声が聞こえた様な気がするんだ。——『奴を討ち滅ぼせ』っていう」

「声だと？ 白式のか？」

「分かんないけど多分そう——で、気がついた時には反射的に佐藤に全開の零落白夜を叩き込んだ。……まるであの瞬間だけ白式に主導権を取られたみたいな感じだった」

どこか見ていた夢の内容を語る様な漠然とした口調であの試合の終幕を語る一夏。ISを操縦する経験はまだ数える程しかないが、それでも今回の様な事態がかなり異常なものである事はなんとほなしに感知する事が出来た。

IS（白式）がIS（灰狼）に対し、明確な敵意を向けるという異常事態を——

「成程な……よく分かった。お前ももう帰って構わないぞ織斑。白式の異常に関してはこちらで調べるから預かっておく。この件に関してはあまり口外はするな」

「わ、分かった……」

どこか必要以上に冷静に、まるで『大した問題ではないからこれ以

上は考えるな』と暗に自分に言い聞かせる様な姉の言葉に戸惑いながらも、この姉の考えに間違いはないという信頼が勝ち、ガントレット（待機）状態になっている白式を渡す一夏。

そしてそのまま言われた通り男子寮へと帰っていく弟を見送った姉は、沈みかけた太陽を見ながらハア、と溜息を漏らす。

「『本来ISを保有していない筈の陸自の倉庫に封印されていた機体』と聞いた時、まさかとは思ったが……まさかこんな形で貴様と再会する事になるとはな……灰狼——いや、魔獣」

ジャバウォック——千冬がよく知る“彼女”が愛する『不思議な国のアリス』の中に出てくる詩に登場する黒き魔獣、白い騎士と相対し、互いに互いを討ち滅ぼし合う事を宿命づけられた存在。

そして10年前、白騎士（最初のIS）を生み出した稀代の天才篠ノ（の）^の乃^{たはね}束^{たはね}の共同研究者であり、且つ彼女が唯一自分と同格の天才と認め、彼女が1人の男として愛し、その愛を拒んだ少年——魔導士^{かねしろ}金城^{ゆづ}優^{ゆづ}が作りだした最初のIS。それが佐藤洋のISの正体なのだ。

「念入りに細工して機体を数段階劣化させる事で封印を施した様だが、格上（白式）相手に挑む乗り手（佐藤）の闘争心に呼応して目覚めたか……だとしたら厄介だな」

もしも彼女が——篠ノ乃束が今もこの世界に魔獣が存在していると知れば間違いなく。それを操る佐藤すらも含め、本気で潰しに掛かるだろう。何故ならばその存在は彼女が頭の中で描く『不思議な夢の国』を終わらせる存在であり、束の想いに対する金城優の『拒絶の証』でもあるからだ。

自分の思い描く世界の為ならば彼女は何処までも我儘に、わがまま 他を一切顧みずに動けるのだ。

だからこそ千冬はかつて彼女の親友であり続けた。相容れぬからこそ惹かれ合い、根本にどこかシンパシーを感じた彼女の傍にいた。交わる事はなくてもずっと隣にいる平行線のように。

だが、現状、今の彼女は束を止められない。今の彼女はどこまでいっても 導き手 でしかないのだ。

「ならば今の私に出来る事は————結局1つか」

壁にもたれかかりながら黄昏時の空を感慨深げな顔で見つめながら彼女は腹を決める。それは篠ノ乃 束の友としてではなく。1人の教育者としての覚悟。佐藤（教え子）を護る為の決意だ。

その為にはまず佐藤を『あの世界』に連れて行くのが1番だろう。かつて親に捨てられ間もない頃。財政難であった家計に置いて食費を浮かせる為に身を投じた弱肉強食の世界。心身を鍛え上げる場としてはこれ以上に無い環境だ。

「一夏との戦いで見せた無謀と紙一重の勇猛さ、判断力と決断力。その全ての根幹となっている勝利への執念————紛れもなく素質はある。後はお前次第だ佐藤」

狼 となり、魔獣を使いこなせるかどうかは————

次回、【アイ・エス】のもう1つの世界が始まる————

第3話 灰狼（アッシュフルフ）（後書き）

ハイ、前回の投稿が一週間ちょっとぶりです。

本職は郵便局員の仮面ライダーマンティスです。

と言う訳でやたら長くなりましたがIS主要キャラの登場から佐藤のISによる初戦闘まで一気に書かせて貰いました。

『長過ぎだバカ！』と仰る方、ごめんなさい。素直に謝ります。

佐藤のIS 灰狼、私の文章力ではイマイチイメージが湧かないという方もたくさんいると思いますがそこはおいおい人物・IS設定みたいなのを投稿して補完したいと思いますが、“通常時の戦闘能力”はハッキリ言って戦闘能力は打鉄などと大差ない代物ですマジで（笑）

作中最後でチラッとネタバレするその正体に関しては、近い内に明らかにする予定です。

でもって次回からは物語のもう1つの舞台『半額弁当争奪戦』も始まります。

ISキャラが半額弁当に命を懸けて挑むとか、そういうアホな展開もあるので楽しみに（笑）

それとちよつとだけアンケート的なモノをしたいのですが、今後作品に登場するベン・トーサイドのキャラで皆さんのご意見を窺いたいと思います。

（1）現状登場が確定してるキャラ（過去話含む）

・佐藤&著莪の変態親族の皆様

・佐藤の中学時代の残念な友人（石岡君、小口君、三沢君、加戸君など）及び広部さん

・佐藤の残念な寮仲間（内本君、霧島君、神田君、矢部君など）

・オルトロス姉妹（IS学園生徒会副会長ポジション）

・顎鬚、坊主、茶髪ら狼の面々や半額神

マッスルデカ
・筋肉刑事のキャラクター（作中ネット内のみ）

（2）検討中メンバー

・槍水姉妹

・井上あせび

・二階堂 連

・帝王

（3）現状では多分出さない予定のメンバー

・白梅梅

・白粉花

・その他全ての『ベン・トー』キャラ

というのが現状の私の考えなのですが、もしこのプランに意見がある場合は感想などと言ってくれると嬉しいです。因みに佐藤を辱める白粉ポジションに関してはISサイドのあるキャラを変態化させ、佐藤をボコボコにする白梅ポジションには箒を当てようと思っています。

必ずご意見を反映させられるとは限りませんが、今後の参考にもなりますので、たくさんのご意見、お待ちしております！

第4話 誇りと空腹の大衆向け大規模小売店（スーパーマーケット）——<前編

お待たせしました。『アイ・エス』ベン・トーパート突入！
といっても実際はまだ闘わないけどね！（爆）

今回はIS学園に転校した佐藤の日常。という感じの話です。
前回の反省で前後編にしましたが、前編の時点で既に長いです。ご
めんなさい。

ベン・トーの文体を意識して書く文章がとんでもなく濃くなって
しまう……楽しいんですけどねw

第4話 誇りと空腹の大衆向け大規模小売店（スーパーマーケット）——<前編

需要と供給の交差点、誇りと空腹の狭間——

全国のどこにでもある平和と日常の象徴たる大衆向け大規模小売店^{スーパーマーケット}は、ある瞬間、ある一定の場所で獣の咆哮が響き、人が飛び、血が流れる激しき戦場となる。

敗者には空腹と屈辱が、勝者には最上の実り、“神の恵み”が与えられる。現代の戦場で、今宵も獣たちは、己の資金と生活、誇りを懸けて狩り場を翔ける。

——古くは、騎士。そして現代においては、人は彼らを 狼 と呼ぶ。

女尊男卑社会の最前線たるIS学園に通うおよそ80名の男子生徒が学園生活は海兵隊員ばりに過酷且つ理不尽にして抗いようのない多くの不自由を強いられるがその中でも地味に、しかし日々の生活に置いて欠かせない問題となるのが夕食の確保であろう。

毎日の朝晩に於いて金にモノを言わせた一級食材と、一流のシェフと栄養士が多样且つハイグレードなメニューが待ち構える食堂が鎮座する女子寮と違い。男子寮の簡素な食堂はそのグレードやメニュー数などという話し以前の問題で、平日の朝のみしか開いておらず、男子生徒たちは一日の勉学を終えた後の夕飯と休日に至っては3食

に渡り、自身の力で糧を確保しなければならぬ事を意味する。

これは現在の社会風潮の果て、年々家事を専業とする主夫が増えた事を視野に入れ、若いうちから炊事の技術としつかりとした経済観念を持たせる。というのが学園の建前だが、要は『締めるところはどこまでも締める』という学校——国側の冷徹な処置と言えよう。

実際、1人暮らしの自炊なんて言うのは余程の知識と経験がなければ却って高くついてしまうものだ。

因みに噂の域を超えないがこう言った制度を置く事で男子生徒には慢性的な空腹・貧困状態に陥れる事で「穴があつたら突っ込みたい！」とか言っちゃうほど盛んな性衝動を抑制する為の措置——という話もある。

そういった過酷な食糧事情に対し、男子生徒たちの対応もまた千差万別だ。

実家からの送られる潤沢な仕送り（資金）にものを言わせて少し足を伸ばして外食に繰り出す者。

仲の良い数名の友人グループで集まり、当番制で夕飯を作る事により、資金や手間の解消を図る者たち。

赤字覚悟で趣味としての料理に没頭し、作り過ぎた分を割安で隣人に提供する者。

因みにこれは特殊な例だが『男子高校生に如何に潤沢な資金が必要か』と言う旨を切実に書き綴った手紙を父親に送り、仕送りのアップを要求した某1年生Y・S君（操縦科所属）は数日後に『セミッ

て食えるんだぜ?』という何故か半疑問形で書かれた一生必要のない知識が書きこまれた返事を送られたという切ないエピソードがあった事をここに残しておこう。

その中でも本校で2人しかいない織斑一夏の夕飯対策は王道にして特異。多くの男子生徒が心からそのシチュエーションを妄想しつつも無理と悟り、成し得た者に惜しみない憎悪の念を抱く。ラブコメのテンプレートイベント（お約束）――

「ウス等。いつも悪いな」

「あ、ああ……い、いや気にするな……こ、これも幼馴染で同門の義理……という奴だ……」

時刻は午後7時50分を少し回ったところで、男子寮と女子寮の丁度中間に位置するベンチの前で一夏は自分の姿を視認するや否や駆け足気味で風呂敷に包まれた重箱――その日の二人の夕餉^{ゆうげ}を手近づいてくる。

正式な待ち合わせは8時なのだが、彼女にとってはそんなのは問題ではなく。衝動的なものだ。

一部では『女殺し（レディ・キラー）』とも称される微笑みを向けられドモリながらも彼女は週に1度のこの時間がまた訪れた事に至上の悦びを感じる。何より嬉しいのはこの一時が『ライバルの介入を絶対に受けない』と保障されている事だ。

事の始まりはクラス代表対抗戦が終わって数日経過した際の大浴場でのセシリア・鈴との会話中『男心を掴むには胃袋から』という話

題が出た事だ。

彼ら共通の想い人である一夏はその家庭環境もあってか同年代の中では非常に家事が出来る男であったが本人の話によると1人分だけ作るのも味気ないということで入寮後はもっぱらカップ麺かコンビニ弁当・外食で済ませているという何とも有益な情報を事前に得ていた彼女たちは、『しょ、しょうがないから私が何か作ってきてあげるわよ！ 育ち盛りでそんなんじゃ、栄養とか偏っちゃうでしょ？』とかなんとか言って差し入れをし、あわよくば通い妻的なポジションを確保しようとか思っただがそうなる当然、同じ事を企てるライバルの存在が疎ましい。そこで協議を重ねた結果、『大浴場条約』が3人の中で締結されたのだ。

この条約の主な概要は『月曜日は箒。水曜日はセシリア。金曜日は鈴。それぞれが週1回、一夏に夕飯をさし入れる。それぞれが担当日以外で決して抜け駆けをしない事。逆に担当日、夕食中には絶対に介入しない。何らかの事情でその日都合がつかない場合は翌日（箒の場合なら火曜日）に繰り越される』といったものであり。彼女たちは通い妻という魅惑のポジションを妥協する事で、僅かな時間ではあるが一夏と確実に二人きりになれる時間を手にしたのだ。

リスクを避け、確実な実益を得る。恋する乙女はいつの世でも強かだ。^{したた}

そして水面下でそんな乙女の駆け引きが行われたことなど露知らない鈍い一夏は、そのおこぼれとして週3で女子の手作り弁当に扱われるという大変にリア充爆発しろな想いをしているのだ。全く以つてこれだからMFの主人公は……失礼。

とにかくそう言った経緯もあって若い男女は街灯が照らすベンチの

下で、2人きりの野外ディナーを楽しんでいたのだ。

この日の筈の用意した弁当はおにぎりと手羽先の煮付けをメインに据えつつも、おひたしやつけもの・ダシ巻き卵などの和風のおかずで統一した栄養のバランス・ポリウム共に申し分の無く。ポットに入れた暖かい味噌汁やデザートとしてカットフルーツも鎮座し、付け入る隙がない。若い癖に健康志向な一夏の性格も把握したライオンナップだ。

「うん旨い！ 筈はいい嫁さんになれるな！」

天然ジゴロの常套句の様な使い古された殺し文句を言い、筈の顔を真っ赤にさせながら彼女の用意した弁当をモリモリ食べる一夏。実際彼女の料理は3人の中でも特にクオリティが高く。如何にも腹をすかせた育ち盛りの男子と言った勢いで若干多めに用意された3段重ねのお弁当をあつた言う間に平らげる。その後、せめてもの感謝の意とばかりに一夏は近くにある自販機で2人分のお茶を購入し、食後の些細な談笑を始める。

それぞれのクラスで起きた出来事、いよいよ本格的になる実技訓練に関する話題。剣道の話題や他愛のない思ひ出話など。ささやかだが幸せな一時に、普段釣り上がった印象のある顔つき筈の表情も綻ぶ。

「そついや筈って確か佐藤と同じ3組だよな？ ちょっと気になる事があるんだけど……」

「む……何だ？ あの変態に何かされたのか？」

だが、その中で話題が先週転入してきたとある男子生徒の事になった途端。彼女の顔にあからさまな嫌悪感が現れる。

『お前は何故2人の甘いひと時の中であんな変態の話を持ち出す！
？』

と一夏の胸倉を掴んで問いただしたくなるような衝動に、駆られる。

「変態つて……いやさ、アイツって何か、寮や廊下で見かける度に生傷増やしてるみたいだけど、どうかしたのかなって思ってた……」

そんな箒の無言の怒りをなんとなく感じた一夏は少々怯えながらも尋ねる。あの模擬戦から一週間経過し、クラスの違う一夏と佐藤は寮以外では廊下で顔を合わせるか1組と3組合同の実技演習でしか顔を合わせないが、その度に彼の顔や身体には包帯や絆創膏が増えていて、心なしか痩せ細っていく雰囲気のみて取れたのだ。

加えてどういふ訳か帰ってくるのがいつも22時から23時近くであり、聞けばここ一週間の夕飯はずっとどん兵衛かソイジョイと言った財布に優しいラインナップだという。

重ねて言うが若い割に健康に気を使うジジ臭い。且つ人の良い彼はそんな彼を心配し、佐藤と同じく3組で、しかもクラスの代表を務める箒に何か知っているか聞こうとしたのだ。

だが、佐藤の生傷について話題になった途端。箒は鏡と対面したガマ蛙のごとき不自然な脂汗を流し、表情を固める。

「ワ、私ハ何モ知ラナイゾ……」

「いや、その片言口調。知ってますって言ってるもんだぞ箒さん……」

痛々しい程に透けて見える狼狽っぷりを見せる箒に彼の王子様は容

赦のないツツコミを入れる。すると彼女は『俺が犯人だつて言う証拠でもあるのかよ!』と自分を追い詰める探偵や刑事に反論する。その時点でもう負け確定の犯人ばりの逆ギレ口調で言ってしまう。

「ほ、本当に知らないぞ私はっ！ 確かに教室では何度か佐藤の顔面に木刀を叩き込んだが、アレは奴が人と会話してる時に目を見ずにむ、胸の方を見て話したり『篠ノ乃つて名字、呼び難いよね？ 仮に僕と結婚すれば佐藤 篝……うん、呼びやすいねハニー』とか身の毛のよだつ寝言をほざいたり、お、お前の事で『なあ、織斑君つて実は男色家?』とか意味の分からん事を口にするからだ!」

「イヤイヤイヤ！ もう充分白状してるからね？ つていうか木刀で顔面つて普通に大問題だろ……」

——篝つて、佐藤と関わりと俺に見せないキャラを見せるよな。

などと感心しながら佐藤の生傷の原因をこちらが問いただしすらせずに洗いざらい白状する篝に哀れみを含んだ視線を送る一夏。

「ま、まあその……アレだよ。確かに佐藤の発言にも多少問題あるのかもだし、アイツは頑丈そうだけど、クラスメイト相手何だからもうちょつと優しくしてあげてもいいんじゃないのか……？ 流石に木刀でつていうのは……」

「て、手はそれなりに抜いている！ そ、それに佐藤の生傷に関しては私じゃない！ 基本的にはビンタメインだからな!」

「ビンタメインって言いたいくつバリエーションがあるんだよ……。何となく初対面の時から思ったけど篝とセシリアってやっぱり佐藤の事嫌いなのか?」

「好きとか嫌いの話ではない。変質者には警戒心を抱く。一般的な女子として当たり前前の感覚だ。そもそも——ん？」

どうして想い人との楽しい夜のデートで変態の話をしなくてはならないのかという憤りを感じながら会話をする中、篝の目には今まさに話題に出ていた変質者あらため佐藤洋とその従姉の著莪あやめがボロボロな出で立ちと疲れ切った顔で、スーパーのビニール袋とお湯が入っている様子のカップ麺を大事そうに抱えながら夜道を歩く姿が目映った。

「ん、どうしたんだ篝？ …… って佐藤、あやめ！ どうしたんだよその恰好！？」

急に固まった篝の視線の先に顔を向け、一夏もまた2人の姿を確認。例によって絆創膏と包帯だらけの佐藤は言つに及ばず、著莪までも生傷だらけであり、夜道で女の子がという様子は事件性すら感じるというのが一般的な感覚だろう。

「アレ、一夏に篝じゃん？ こんなトコで何やってんの？ 逢引き？」

「あ、ああ合挽き！？」

「いや、挽き肉じゃないから」

サラッと放たれた一言に文字変換を間違える程動揺する篝。その軽快な口ぶりこそ相変わらずであるものの、いつもハツラツとしている普段の彼女からは想像できない程、今の著莪は疲れ切っていた様子だ。

「あつ……もう5分だ。折角だしここで2人と一緒に食べよつか佐藤？」

「ああ、うん。そうだね……」

更に佐藤に至っては生気が殆どないといった様相であり、一夏は思わず往年の名作ゲーム『バイオハザード』に出現するゾンビを思い出す。しかし一応言葉は届いた様子であり、一夏と篤は占有していたベンチのスペースを融通し、右から著我、佐藤、一夏、篤という横並びで、4人は夕餉を開始ないし再開する。

「いただきます」

両手の人差し指と中指に割り箸を挟んだ状態で手を合わせ、日本特有の食材や作ってくれた者への感謝の言葉を唱えながら、人類の叡智^{いち}の結晶たるカップ麺——その中でも五指に入る完成度を誇る名作『どん兵衛^{おにぎ}』の蓋を開け、ズズズ……と近年ストレートタイプに変化した麺を啜^{すす}る2人。

彼らの今日の夕飯はこのどん兵衛に加え、著我は鉄板の鮭^{さけ}おにぎり、佐藤はゴボウのてんぷらをそれぞれビニール袋から取り出し、手に伝わる温もりと完成された和風ダシのツユの味わいで摩耗しきった心を癒していった。

「な、なあ篤、俺が言うのも何だけどその……」

「あ、ああ、そうだな。よ、よかったら少しつままないか2人とも？ 大分なくなってしまったが……」

自分達の隣で黙々（もくもく）とカップ麺^{めん}を啜り、いくらか生気を

取り戻した様子でありながらもやはり尋常じゃない。といった様子の2人に残り少なくなった自分達のおかずが入った重箱を差し出す筈。正直、貴重な時間を邪魔された事に多少思う所はあるが、そんな些細な事を言っている場合ではないとすら感じるほど、2人の雰囲気は異様ですらあった。

「ああ、いや。いいっていいって！ デートの邪魔した上でそこまですぐはなれないよ。あたしらの事は気にしないで……まあ、野良犬……いや、『負け犬』が正しいか。そんなのが二匹その辺をうろついてる程度に思ってたよ」

だが、そんな筈の複雑な心境がこもった恵みを苦笑しがちに断る著我。佐藤相手ならいくらでもおかずの横どりや理不尽なたかりもする彼女だが、存外こういった雰囲気とか、乙女の心境には敏感なのだ。「いや、でも断るのもあれだし……」と未練がましそうな目で見ると、佐藤の口に残り一口になった鮭なしの鮭おにぎりをつつこみつ、残り半分となった佐藤のてんぷらを横取りし、さっぱりとした印象のあるどん兵衛のツユに油のうまみを追加させ、佐藤を涙目させる。

「ハア……今夜こそはいけるって思ったんだけどなあ。なんだよ大猪^{じし}って……結局今日も『犬』のままか……」

「著我は普通に寮の食堂があるんじゃないの？」

「あそこのラストオーダーは19時半で“時間”を待ってたら間に合わないんだよ……。つーか、ここまで負けが続いて食堂なんか頼れるかつつの！ <狼^{おおかみ}>になるまではゼッティーやめねーし、それまでだったら何日だってどん兵衛生活してやるっつの」

「また“トライ&エラー”？……けど、そうだな。僕も今日は何か……悔しかった。戦って負けるのはまあ、いやだけど納得出来るけど。大猪を前に何もできなかったのは、豚の蹂躪じゅうりゃんに対して何もできなかったのは、凄く悔しかった。どのみち他に選択肢はないけど……このままじゃ、終われない」

「……なあ、何の話をしてるのか出来れば話してくれるとありがたいんだけど……」

空腹くうぷくと屈辱くつじやくを拭ぬぐい去る飢えた犬の様に一気に夕飯を食べ尽くした後、それぞれの胸中を述べると同時に 狩り に対しての決意を新たにする佐藤と著莪。互いの環境も、狩り場に向かう理由も違うが、2人の気持ちはいつもの様に、当たり前前の様に1つだった。

「“犬”だの“豚”だの“狼”だの、お前らは一体何の話をしているのだ？」

しかし、そんなある種の『2人の世界』に入る佐藤らを前についに耐えかねて一夏はかねてから気になっていた日ごとに増える佐藤の怪我も含めて彼ら2人が一体何をしているのか？ その結果にどうしてボロボロになってカップ麺を嚙かっているのか？

著莪は気を遣って敢えて自分たちを無視する形で会話を進めてくれていたが、逆に彼らの全く実体が掴つかめない会話が気になって仕方がない。

「ん？ ああ、まあ何でもない何でもない。ちょっとだけ過激な難ムズゲーに挑戦してるだけ、デス様みたいな」

「デス様？」

「あー、ゴメン。分かりにくかったか……。まあなんつーの？ 心配はしないでよ。私たちも好きでやってる事だからさ。なっ、佐藤？」

そういつて今しがたゴボウ天入りのどん兵衛を完食した佐藤の腕を引っ張り、「じゃ、若い2人はごゆっくり」と言つてその場を去る著莪。ナチュラルな気遣いや相変わらず一般人には理解しづらいセガネタなど、普段通りとも見える様子だったが、やはりどこか肝心な話をはぐらかされたみたいで、一夏の中では疑問は更に大きくなる。

「『好きでやってる』でボロボロになる……。部活か何かかな？」

「いや、それはないだろう。あの二人は確か<ファミ部>とかいう一昔前のゲームを愛好する部だった筈だ。それにあの生傷……。生半可なスポーツであそこまでボロボロにはならないぞ？」

考えれば考えるほどに膨らむ疑問。最早2人の間には所謂男女のいい雰囲気などは微塵もなく。同級生が夜な夜な行っているらしい。謎の『難ゲー』の正体で頭がいっぱいだった。

「まさかのストリートファイト？ いや、それも微妙だよな……。うーん、分からねえな」

「いつそ尾^つけてみるというのはどうだ？ あまり気乗りする事ではないが、あの2人が万が一にも危険な事に関わっているなら止めねばならぬし」

「そつだよな……。よし、それじゃあ明日の放課後、佐藤たちの尾行だ。あつ、でもいいのか篤？ お前はお前で剣道部があるんじゃないや

……」

「私の事は心配するな。内容はどうあれお前と放課後一緒に居られるなら……じゃない！　が、学友の為だからな！」

疑問と心配、そして僅かな打算も含めながら、明日の予定を立て、その場はお開きとなった。

IS学園だろうと一般的な普通高だろうと関係なく。全ての学生がその若さに溢れた活力を取り戻す時間。人はそれを昼休みと言う。約4時間にも渡る授業を乗り越えた先にある。束の間の休息。女子たちは机を移動させて3人から10人単位の仲良しグループを形成して窓際の2列の追いやられる形で固まった少数の男子生徒の存在など歯牙にもかけず、童貞男子の「幻想をぶち壊す」女子トークに花を咲かせたり自作のお弁当や最近購入したお気に入りチェリーボーイズの小物などのさりげなくも熾烈な自慢合戦に繰り広げたりしており、クラスに僕も含めて10人程の男子は男子でグループを形成して放課後に予定しているプチ合コンの話をしている者たちやとつと1人で食事を平らげ、授業で疲弊した頭を休める為といって机につっぱして寝たりしている。

なんつーか。まあ……ものの見事な隔絶っぷりだ。

恐らく一般的な共学の高校に通う男子高校生からすれば、僕らの事を「選り放題の勝ち組」「パラダイスの住民」などと誤解するだろうが、そんなことはない。やっぱり世の中、バランスというのが肝心なのだ。どんな綺麗事を並べても少数民族は弾圧される。それが

自然の摂理なのだ。愚かな事だとは思うが……

そして、そんな強者（女子）と弱者（男子）の存在によって2分化された教室で僕は何をしているかと言うと、無論、他の残念な負け犬とは一線を画し、4〜5人の可愛い女の子たちに囲まれて「佐藤君、私今日はちょっと作り過ぎちゃったんだけど、よかつた少し食べてくれないかな？」とかわざとらしい事言つてサンドイッチを進めてくれるお嬢様っ娘や、「べ、別にアンタがロクなモノ食べてないから心配して……とかじゃないんだからね！ たまたま早起しただからお弁当作つて、たまたま作り過ぎちゃったからあげるだけなんだから！ はい、アーン」とかホントは料理が苦手なのに僕の為に無理してお弁当をつくってくれちゃうツンデレ娘たちの勢いに押され、「ハハッ、まいったな〜もうお腹いっぱいだよ」と苦笑していたりした。……………うん。まあ、嘘なんだけどね。

本日の僕の昼食は、コッペパンの間にツナとタマネギをマヨネーズで絡めた。所謂ツナサンド120円とパックのコーヒー牛乳100円——以上である。

無論、育ち盛りの高校生のランチとしてはあまりにボリュームが不足しているのは分かっているが、何もダイエットをしている訳ではない。

僕がこんな第3者から見れば涙を誘う昼食を取っているのには2つ理由がある。

1つは言わずもがなの財政面での問題。月3万という厳しい収入に加え、著我と行動を共にすると高確率でたかられる現状を考えて、僕が1日当たりで食費に工面できる額は昼・夜込みで500〜600円が精々なのだ。

故にこれだけ質素な昼食で耐え抜いたとしても夕飯に裂ける費用は

基本300円前後で出せて400円。410円のジャンプコミックスすら購入できない額しか許されないのだ。

そして2つ目は——“今夜の戦い”に備えての準備の為だ。

1週間前、僕と著者をあの世界へと導いた“彼女”の話では、あの場に於いて、身体能力の高さや格闘技経験の有無以上に重要なのは、『意思の強さ』つまりは獲物への純粋な欲求。要するに空腹感らしいのだ。

聞かされた当初、これまでの15年間の経験で物事に於いて精神論に話が及ぶとロクな事がないと思っていた僕はその話を適当に流していたのだが、先週の木曜日、4度目の挑戦となったその日、それまでにない大敗を期した事で認識を改めた。あの日、あまりの空腹に耐えかねた僕は夕刻についついコンビニでアメリカンドッグを購入してしまったのだ。やや甘めのパン生地に包まれたソーセージにうまみに心癒され満たされこそしたが、その満足感が逆に夕飯への情熱を削いでしまい。結果僕は、その夜ウィダーインゼリーしか受け付けられない程に強烈な一撃をボディに受け、それまでで1番惨めな夜を過ごしたのだ。

ただ負けるならいい。しかしその敗因が空腹に負けた己の弱さにあるというのはかなり堪えた。以来僕は、この寂しい昼食の後も、毅然とした態度で耐え、腹の中で暴れる気が勘と言う名の魔物と戦ってきたのだ。

全ては『戦いの時刻』に最大限の力を発揮する為に——

だがそれもまずは最低限のエネルギーを摂取してから。僕はその日唯一の昼食であるツナサンドを包んでいたエロティカルな透明のラップを丁寧に剥がし、パクリ口に頬張る。

全体的にしんなりとしたパンに口の中で絡まるツナサラダの芸術的な味わい。時折口の中を発生するシャリっというタマネギの触感が

また心地よく。ツナのうまみとマヨネーズの酸味は最早至高とすら呼べるレベル。

直径20cm程のそのツナサンドを僕はじつくりと咀嚼^{そしゃく}。ご飯は良く噛んで食べる——皆幼い頃1度は母親から言われた格言だが、これはなかなか役に立つ知恵だ。良く噛む事で満腹中枢^{まんぷくちゅうすう}は刺激され、時間もかける事で食事の満足感が補える上にしっかりと消化される。まさに名言であると僕はこの言葉を生み出した顔も知らぬ人物に賛辞をおくりたい気分だ。

まあ、たった1つのパンを後生大事に10分以上の時間をかけて食べる男子高校生の様は、傍から見れば若干アレかもしれないが、今はみてくれより実を取るべきだろう。

「……………」

「ん？」

その様にして1口当たり30回という模範的な咀嚼をもってツナサンドを堪能している中、僕はふと、自分に向けられた視線に気づく。この1年3組のクラス代表にして僕を1日平均2.5回ひっぱたく黒髪の女武士・篠ノ乃だ。

いつも「殴っていいか？」というホントはサラサラ答えを聞く気のない問いかけの後、時にビンタで、拳で、蹴りで、木刀でと豊富な攻撃手段で僕をボコボコにしつつ、その度に揺れる豊かな乳房の動きをちゃっかり脳内録画する事で僕の中で痛み分けとしてきた彼女の睨^{にら}んでると思える鋭い視線——成程、そういう事か。

初対面から向けられた敵意に満ちた態度と幾度とない暴力と今の熱視線から導き出される答えなど言うまでもない。——アイツど

うやら、僕に本気で惚れているようだ。

恐らくは熱烈な一目惚れ、一週間前の初対面時。僕のカッコ良さに一瞬にしてハートを射抜かれた彼女は当初、自分の中に芽生えた初めての感情に戸惑い^{とまど}。それ故にいついつけんとうな態度をとったり、胸の鼓動の正体がわからず、ついイライラして僕を木刀と撲殺しかけちゃったのだろう。だが、恐らく彼女ももう気付き始める筈だ。僕をひっぱたく度に生まれる胸の痛み、それに随伴してくる「佐藤君とスキンシップが出来た」という悦びに、だが今までの関係性を考えて素直になれない。さんざっぱらボコボコにしてしまった僕が自分を受け入れてくれるか不安で仕方がないのだろう。

ハハッ、バカだな篠ノ乃は。僕がちよつと殺されかけた位で君の事を嫌いになる訳ないじゃないか？ あの親父に育てられたんだぞ僕は？ 悪気なく殺されかける事なんて日常茶飯事なあの佐藤家で15年間暮らしてきたんだぞ？ 君の木刀の一撃くらい、親父のトヨタカローラの一撃に比べれば軽いもんさ。さあ、今こそ勇気を出して言うんだ。怖いかもしれない。しかし恐れるばかりでは2人の関係は縮まらない。勇気を出して、こう言うんだ！

「いつまで食べている？ もう予鈴は鳴ったぞ？」

「そう。『いつまで食べて——』ってえ……？」

気がつくとも目の前に今しがたまで僕に熱い視線を送っていた篠ノ乃が目の前に立っており、さりげなく黒板横に備え付けあった時計を見て見れば、彼女の言う様に昼休みは終わりをづけ、後数分で5時間目の授業が始まるという所まで来ていた。おかしい、僕の中の感覚と40分以上の時差がある。

僕は未だ3分の1程残ったツナサンドを持ったまま、頭を抱えた。

「タイムリープ……いや、この場合キングダムゾン……ボスカ！？」

「全くもって意味が分からんのだが、とりあえずその大事そうに持っているパンを食べるなりしまうなりしたらどうだ？」

僕の小粋なジョジョネタにも気付かず、冷たいツツコミを入れながらその豊満な乳房を乗せる様に腕を組む篠ノ乃。何だ？ 僕を誘っているんじゃないのか？

少し勿体ないが彼女の言う様に時間もないので残りのパンを一気に口に突っ込みコーヒー牛乳で流し込むという張り込み中の刑事の様な食べ方で昼食を終えた僕は思考を再び彼女の方に向ける。少し気恥ずかしいがやはりここは男から動くべきだろう。

「あ、ああうん、そうだね……ところで篠ノ乃、ちょっと聞きたい事があるんだけどいいかな？」

「な、何だ……？」

「結婚式は和風と洋風、どっちがいいかな？」

「……………は？」

やはり彼女のキャラクターを考えるなら神社で挙げるのが妥当なのかもしれないが、ウェディングドレスに憧れない女子はいないとも聞く。僕としてはどちらでも構わないので彼女の意向を優先させる方向で話を進めたい。……けど、その後の『夜のひと時』に関しては妥協しないぜベイビー？ フフ

「……………佐藤。その問いかけに答える前に私の質問に1つ答えてくれないだろうか？」

と、僕の間接的且つ小粋な口説き文句にしばし固まっていた篠ノ乃だった。だが、やがて何故か冷たい印象を受ける微笑みを僕に向けながらロッカーから何故か木刀を取りだし、僕に質問を返す。アレだろうか？「子供は何人欲しい？」という思春期男子の耳には何故かエロく聞こえる微笑ましい質問だろうか？ハハ、せっかちな僕のハニーは。

「分かった。何でも聞いてくれて構わないよ？」

僕はいつも以上に爽やかな笑顔を彼女に向け、右手で髪の毛をかきあげるポーズ決めちゃったりする。すると彼女はニコッと笑みを作った後、僕に尋ねた。

「そうか。では遠慮なく聞こう。——遺言はあるか？」

「え…………？」

気がつくと僕は、何故か数時間後の保健室のベッドの中で眠っており、昼休みの記憶の大半を失っていた。

入学してから度々お世話になっている保健室のベッドから起き上がると、そこには眼鏡をかけた小太りのクラスメイト うちもとひろあき 内本宏明 君がおり、僕が気を失っていた間に終わった5・6時限目の授業ノ―

トのコピーを渡してくれた。何ともありがたい心遣いだ。

内本君は整備課1年の中でもトップクラスに優秀な生徒で有り、優秀な技術と女子生徒からどんなに無茶な要求をされても……否、その注文が無茶であればある程モチベーションを上げ、必ず応える職人肌として教師陣からの評価も高いのだが、それら全ては彼の隠された性癖に起因するものであるという事は、余り知られていない。

『実は俺もMなんだ』

これは転校初日、僕が軽いアメリカンジョークをかました結果、篠ノ乃にぶっ飛ばされた際、起き上がるのに腕をかして貰った最中で言われた全く嬉しくないカミングアウトだ。

そう。何を隠そう彼は真正正銘、真性のマゾヒストであり、年齢15で自らの性癖を自覚し受け入れた^{もろ}猛者なのだ。女子生徒からの無茶な注文も彼にとってはご褒美以外何者でもなく。本人によれば元々ISへの興味はないのだが、入学すれば男子は100%虐げられるという理由だけでとんでもない倍率のIS学園の入試を突破したらしい。

それはまあ、いい。

人の性癖なんてそれぞれだし、彼がどんな状況に悦びを感じようが、その結果として破滅しようが知ったこっちゃない。しかし問題は、彼が僕の事を『同士』として認識している事だ。連日に渡り篠ノ乃にぶちのめされてる僕を見て『クラス1のS系美人に果敢に挑んではご褒美を貰うアクティブM』として彼並びにその背後に入る集団Mの騎士団 からも一目置かれる存在になってしまったのだ。

全く……君らの様な変態と一緒にしないでくれ！ と言いたい気分

だ。おかげで僕は初日の警備隊との一戦もあつてクラスでは 露出^{ろしゅつ} 狂^{きやう} という不当にして不名誉なレッテルを貼られていて困っているのにその上でDM疑惑とか、勘弁してほしい。

そんな内本君に「全く真昼間っから見せつけてくれるよな兄弟はこのこの」 という冷やかしをうけながら僕は保健室を出て、一旦誰もいない教室に戻って鞆を回収した後に本校舎から少し離れた部室棟へと向かった。

『戦い』が始まる夜8時までではそこで著莪と時間を潰すのが僕の放課後の日課なのだ。

ISの技術を学ぶ専門機関と銘打ってる当学園だが、あくまで教育機関である事に派変わりが無く。当然放課後には多数の生徒が部活動で青春の汗やら何やらを流しており、天下無敵の国立高である本校は無論、そういった面でもバリバリに力とお金をかけていたりする。

エレベーターから冷暖房完備。申請すれば3人から部として認められ、教室と同規模の部室があてがわれ、設備も充実した部室棟の5階。僕と著莪が所属する ファミリーコンピューター部。略してファミ部の部室がある。

中に入るとそこには絨毯が敷き詰められた20畳ほどの部屋があり、その恥にある大型モニターの前でSF^{スーパーファミコン}Cソフト『ドラゴ。ボールZ』スーパー武闘伝』に興じる著莪ともう1人の女子、ファッシュンなのかサイズが合っていないのかは不明だが袖が不自然に長い制服を着た眠そうなトロンとした目元の女の子 布仏^{のほとけ} 本音^{ほんね} の姿が合った。

彼女は織斑君と同じ1組の生徒であり、ファミ部に所属すると同時

に生徒会の書記でもあつたりする整備課の女子だ。見た目通りどこかのんびりとした性格で間延びした喋り方をする。のほほんとして印象を感じる女の子だが、本人曰く優等生らしい。

そして信じ難い事だが、このファミ部に所属する5人の部員の内、何と僕と著我を除く3人が生徒会の役員だつたりするのだ。

副部長は生徒会長でもあり、学生の身でありながら『ロシアの現役代表操縦者』でもある2年の 更識たてしき 楯無たてなし 先輩で、部長は会計であり、布仏の姉でもある3年生の 布仏 虚うつほ 先輩。何でも年中多忙な生徒会のメンバーが校則にある『生徒は必ず何らかの部・同好会に所属しなければならない』というのを何とか守る為に作った部というのがこのファミ部のそもその始まりらしい。

その為、今は布仏こそ来ているものの、基本的に生徒会メンバーの出席率は悪く。僕と著我だけで延々とバーチャに興じて部活を終えるという。ぶつちゃけ実家に入る時と何ら変わらない日も決して珍しくないのだ。

「やった〜5連勝〜」 あ〜ヨ〜ヨ〜来てたんだ〜。ち〜っす！

「遅かったじゃん。何かあった？」

「詳しくは記憶が曖昧あいまいで覚えてないんだけど、ちよつと篠ノ乃にぶつとばされて昼休みからさつきまで保健室で寝てたんだ……」

「何だ日課か。よし、それじゃあバーチャやろうぜバーチャ！ やっぱセガ以外じゃ本音に勝てないよ〜」

「日課ちゃうわ！ 従弟がさつきまで保健室にいたって聞いて感想それだけ？ しかも『そんな事より』的な感じであつさり内容変えてるし。ちよつとは優しい言葉の1つもかけるよ……」

「えゝ……あー、ゴメン。無理。考えるのも面倒臭いや」

「さいですか……。けど僕もちよつと無理。クラスの友達から借りた5・6時限目のノート写さなきゃいけないから。終わってからな」

そう言つて僕は部室の中央にあるちゃぶ台に座り自分のノートと貰ったコピーを広げて書き写し始めた。遊ぶにしても面倒事は早めに片づけるに越した事はない。そして僕が誘いを断ると著莪は「えゝ」とわざとらしい不満の声を上げながらも再び画面上でピ。コロの操作を始める。因みに相手をしている布仏はゲーマーとして相当の実力者であり、セガハードならこちらに分があるが、僕も著莪もそれ以外だと中々勝てない。

というかぶつちゃけ、現在のこの部のメンバーは全体的にハイレベルなゲーマーばかりであり、世間からは娯楽系のゆるい部活と思われがちだが、実際には『髭を生やした某配管工』が亀に攫さらわれたお姫様を救うゲームにハマっているマリ。タな部長を筆頭に、20世紀の遺物として扱われる往年のレトロなゲームを愛して止まないメンバーで構成されている。結構な体育系部活なのだ。無論、部室には歴代のセガハードは勿論、一通りのハードは揃そろっている。

そんな部室でゲームないし授業の予習復習何かを済ませながら来るべき『狩り』の時間を待つのが今では僕と著莪の日課となっており、18時半頃。一応の部活終了時刻に布仏が帰ってからもしばし2人でバーチャ2に興じた後の19時半。僕と著莪は決意を胸に、戦場せんじょうへと赴おもむく。

今日こそは絶対になつてやる—— 狼に！

「お、佐藤達が出て来た。行くぞ箒！」

「あ、ああ……（今回はかなり本気で打ち込んだのにピンピンしてる……あの男、本当に人間なのか？）」

女子寮にある食堂の閉店時刻もあり、殆どの生徒が帰宅して静まり返った部室棟から出てきた黒髪と金髪の男女——佐藤と著莪を遠巻きに視認した一夏は、当初の予定通り。2人が毎晩何をやってあかもボロボロになっているのか知る為の尾行を開始。内心で数時間前木刀で保険室送りにした佐藤がピンピンしている事にドン引きしている箒と共に、付かず離れずの距離を保ちながら2人の背中を追いかける。

本人たちしてみればかなり真剣なものではあるが所詮は素人の高校生。お粗末極まりない尾行。しかしその対象は対象で自分たちが尾けられているなどと夢にも思わない高校生。そんなお粗末な尾行にも全く気付かず、談笑しながら学園敷地内の外を出て10分ほど歩く。

そこにあつたのは大型のスーパー。食料品から生活雑貨・消耗品に至るまで、ある程度のあらゆる品物が、メーカー希望小売価格より優しい値段で売られている愛すべき庶民の味方——大衆向け大規模小売店だ。

「ここがああ2人の目的地……か？」

「バカを言つな。一体どこの世界にスーパーに言つてボロボロになる奴がいる。……何か買物をしてから別の場所に向かうのだろう多分」

てつきり夜の町のアウトロー達が巣くう場所にでも向かうのじゃないかと思つていた一夏は思いもよらぬ到着地に首を傾げながらも、箒の仮説にひとまず納得。確かにこの平和の象徴の様な場所であるに傷だらけになるなどありえない話だ。

恐らくは飲み物が簡単に腹の足しになるものでも買つてスグ出るに違いない。

そう思いながら佐藤達を視認できるギリギリの距離を保ちつつ、目立たない様に普通に買物にきた一般客の様に買う気のない商品に目を向ける。因みに今いるのは鮮魚コーナーの前だ。リピート再生を続ける おさかな天国 が心を癒す。

「へえ、この辺のスーパーには初めて来たけど結構品揃えがいんだな。しかも値段もお手頃……ん。どうかしたか箒？」

IS学園入学まで家事の一切を受け持っていた主夫中学生でもあった一夏は、閉店も迫る時間で一通りの商品が無くなってこそいるが、残された魚の品質や値段を見て、このスーパーのグレードの高さを垣間見る。一方、箒は箒でどこか嬉しそうに、ほんのり頬を赤らめていたりした。

「いや、こうして2人並んでスーパーで品物を物色するというのはその……（夫婦みたいで）いいものだな。などとな……」

「そ、そうなのか？」

今時の女子の間ではスーパーが人気のレジヤースポットなのだろうか？ などと言う荒唐無稽な想像をしながらも、一夏は首を傾げる。そんなこんなで待つこと数分。

本来の目的地に向かう前の買い物と踏んでいた一夏らは当初、佐藤達がちやっちやと買い物を済ませるだろうと思っていたのだ、どういう訳か彼らは精肉コーナーで立ち止まり、まるで芸術品を眺めるかの様に赤と白のコントラストが美しい。角煮用豚バラ肉をジツと見つめていおり、未だにその場から動く気配がない。

「……まさか今日は例の傷云々の用事がなく。ただ2人で作る夕飯の材料を買いに來ただけというオチじゃないだろうな？」

「どうだろうな……けど、何だろうあの2人。確かにずっとあの場所から動かないけど、なんていうか……意識を別の所に向けているというか。“何かを待ってる”って感じがするんだけど気のせいかな？」

「む、言われてみれば確かに……」

一見して極々普通の買い物客に見えるが、ジツと観察してみればどこか不自然な佐藤らの違和感に気づく一夏。そして視野を広げて見ると、そういった不自然さを放つ客が2人だけでない事に気がついた。

お菓子コーナーで新作のスナック菓子を掴みながら裏面の成分表示に目をやる坊主頭の高校生。乾物かんぶつコーナーにあるスティックタイプの粉寒天に目をやるロンゲにピアス、顎髭あごひげを生やしたちよつとホストっぽい雰囲気きふきの男など。下は中学生くらいの女子から高校生、大学生、仕事帰りのサラリーマンなど10代後半から20代半ば位の

男女がよくよく観察してみるとただ買い物に来た風を装って（・・・
・・・・・・・・・・）その場から1歩も動いていない。まるで万
引きGメンの様でもあるが、それにしても雰囲気妙だ。まるでこ
れから戦いに身を投じる武士もののふの様である。というのは第の感想だ。

「アレ？ あそこにいるのって確か……」

「ん？ ああ、更識ちんしき 簪かんざし。4組のクラス代表だな」

そして、そう言った佐藤らも含む“不思議な客”を観察している内
に、一夏の目には自分たちと同じIS学園の制服に身を包んだ。見
知った1人の少女の姿が映った。

彼女の名は更識 簪。生徒会長である更識 楯無の1つ下の妹であ
り、日本の代表候補生で4組のクラス代表でもある眼鏡をかけた内
向的な印象の少女だ。4月と5月のクラス代表同士の定例会議で顔
を合わせ、2、3度会話をした程度の間柄だが、それでも知人には
違いない。そんな彼女もまた、この閉店間際の静かなスーパーでは
『迷彩柄の異彩』を放つ存在だった。

ただ、その異彩っぷりは佐藤ら 何かを待つ者 としてではなく。
寧ろ一夏や第らと同様の 観察する者 としてのものだった。それ
も彼女は、2人にとって当初の追跡対象である佐藤らに目を向けな
がら時折メモをしている。最早一般客の擬態ぎたいすらしていない。

これはひょっとしてこの不可思議な空間の謎を解く重要人物なので
はないか？——そう判断するや否や2人は缶詰コーナーに身を潜め
ながら佐藤を観察する彼女にコンタクトを取る。

「よう更識。お前も買い物……って訳じゃなさそうだな？」

「織斑君に……篠ノ乃さん？」

「突然すまない更識さん。実は聞きたい事があるんだ」

突然自分の名前を呼ばれた事に一瞬驚きの表情を見せるもスグにいつもの感情を無機質とすら言える表情を整え「何？」と淡泊に尋ねる。

一夏はそんな彼女の雰囲気になんぞ若干圧倒されながらも友人の佐藤と著莪のここ数日、生傷を増やしながら夜な夜などこかへ出かけている事。気になって後を追ったら行きついた先が何故かスーパーでこの異様な雰囲気戸惑っていた所、事情に精通した知人「簪を見つければ、声をかけたという経緯をかいつまんで説明した。」

すると彼女は「成程。知らずに迷い込んだ一般人と言う事ね……」と、一夏たちに観察するような視線を見せた後「違法コロシウムを捜査中、サイトーは偶然高校時代の友人が巻き込まれた事を知り、逃がそうとした所で正体がバレ、彼らを人質に取られてしまう。解放の条件は自身の肉体をコロシウムのボスに捧^{ささ}げる事。肥^こえ太^{ふと}った脂ギッシュなメタボボディが迫る……使えるか」と、理解不能な独り言をつぶやいた後、答える。

「説明をするのは簡単だけど、ただ聞いただけじゃきつと貴方達は納得できないと思う。多分私の事を頭のおかしい人を見る様な目で見ると……それはイヤ」

「いや、そんな目で見たりしない。約束する。何を言われても更識の事を信じるよ」

「ああ、約束しよう。だから教えてくれ更識さん。ここでいっただいこれから何がおころうとしているんだ？」

グツと拳を作りながら『お前を信じるぜ』的な事をどうとうという一夏。流石主人公。

実際自身でもこの至って普通のスーパーマーケットにおいて異様と言える空気は感じている。その正体がなんであれ、そんなバカなと切り捨てたりはしない。その自信はあった。

だが……

「そこまで言うなら……教える。サイト……じゃなかった佐藤君たちは、待ってるの、間もなく姿を現す今日の“獲物”をね。そしてここにいる不自然なお客は全員。それを奪い合う為に集い戦う。ライバルたち」

「戦って奪い合う？　こんな閉店間際の至って平凡なスーパーで一体何を！？」

「“閉店間際だから”生まれる物を奪い合うの……それは飽食の時代が生んだ奇跡の果実。需要と供給のクロスポイントに生じた僅かなズレが産み落とす極狭のフィールドにのみ実る獣たちの糧……即ち、半額弁当。サイト……佐藤君達が挑むのは、半額弁当争奪戦」

「……はい？」

一夏と筈の時が、止まった。

「……嘘つき」

— 中編へ続く！

第4話 誇りと空腹の大衆向け大規模小売店（スーパーマーケット）——<前編

てな訳で次回に続く！

そして簪ファンの人、いたらゴメンなさい（orz）

作品をより愉快なことにする為、彼女にはクリーチャー（化け物）
になってもらうことにしました！

これからサイトー……佐藤がどんな目に逢うか。ベン・トー好きな
皆さんはお分かり……ですよね？

同情するなら次回も見てね！（爆）

第5話 誇りと空腹の大衆向け大規模小売店（スーパーマーケット）——く中館

本当は今回で半額弁当デビュー戦は終わらせるつもりだったのですが、前회가ちよつと長すぎたかな〜という反省と、仕事柄（郵便局員）今月と来月は執筆する時間の確保が難しくなってくるので、とりあえず区切りのいいところで投稿させてもらいました（汗）

半額弁当争奪戦……なるべく原作に近い文章を心がけているのですが、アサウラ氏の濃密な文章に比べると見劣りするのは必至だと思うのでその辺は指摘してくれると嬉しいです。

19時48分

僕と著莪はIS学園から徒歩10分程の位置にある大型のスーパーに到着する。一週間ほど前まではただ買い物をする為の場所。夜の町の闇の中、燦然^{さんぜん}と輝く平和の象徴としてしか見ていなかったのは、もう過去の事だ。

全ての始まりは先週月曜日の放課後、ファミ部に入部した僕は美人で気前の良い。生徒会長でもある更識^{よりしき}先輩に『歓迎会開いたげる』[♪]というお誘いを受け、はちきれんばかりに尻尾を振るう犬の如く付いていこうとした所、校内放送で呼び出され、泣く泣く延期（土曜日に開いて貰った）。

涙を噛みしめながら職員室に行く待ち構えていたのは黒いスーツを完璧に着こなすモデル顔負けのスタイルと研ぎ澄まされた刃の様な印象を持つ美人、織斑^{おりむらち}千冬^{ふゆ}先生が待ち構えていた。

『ついて来い。お前を男にしてやる』

そう言われて僕は漢^{おとこ}らしく『ワンワン！』とリアルに犬の真似をしながら彼女の後を付いていった。てつきり僕の初めてを貰ってくれと思ったのだ。

入学三日目にして学園一の美人教諭と放課後の課外授業に繰り出す。僕は何て勤勉な学生なのだろう。

織斑君、これからは君の事を義弟と呼ばなければならぬのかな？

……今思えばかなりバカ丸出しで、1人盛り上がった……。
織斑先生の物言いにも問題があったと思うが……。

学園の敷地内から出た僕は織斑先生の後をヤバいおクスリをキメちやった人ばりのハイテンションで跳ねまわりながら付き従い10分程歩いた。

この時はてつきり、愛と夢に満ち溢れた大人のお城に連れて行かれるものと信じて疑わず、いよいよ持って、テンションがヤバい事になったのだが……その時の自分は正直、あまりにアレなので、うん、あんまり思いたしたくない。

そうしてノコノコ付いて行った先にあったのはそう、今僕がいるスーパーだった。ビックリした。そして何より織斑先生の『ついたぞ』の一言にガツクリした。希望はその後の絶望を引き立てる最高のスパイスだ。

闇夜を照らす温かな光を放つスーパーの前で打ちひしがれる僕の様子を見て、織斑先生は何も知らないと言った様子で『どうした?』と尋ねる。わざとじゃないかと一瞬彼女を疑いつつ、僕はあの一言から始まった期待と絶望を隠すことなく正直に話した。この時の織斑先生の僕を哀れむ様な視線は、今もハッキリと思い出せる。そして幾分の戸惑いの後、僕に言ったのだ。

『もし今夜、私がこれから言う物をこの店で買う事が出来たのならお前の妄想。実現してやってもいいぞ?』

その彼女が指定した物こそが、半額弁当——今思えば先生も随分と意地悪だったと思う。飢えた獣^{けもの}たちの餌場^{えさば}に食欲ではなく性欲に満ち溢れたか弱い少年がノコノコ現れれば、待ち受ける結果は言

うまでもない。それまでイカれた親父と趣味で所有している山を要塞化しちゃう祖父^{じい}さんのおかげで同年代では最高クラスの肉体を自負していた僕のプライドはずたずたに引き裂かれ、それ以来、敗北の味がするどん兵衛^{すず}を嚼^すむ日々が始まったのだ。

更にその翌日、2度目の挑戦となったその日には著莪もついてきた。良くも悪くも、特に僕が関わる『面白そうな事』に飛び付く彼女の習性は高校生になっても健在らしく。前日の呼び出しと翌朝のボロボロな僕の姿を見て、一気に興味が湧き、半ば面白半分で参加したのだ。

その結果、僕は2度目の、著莪は初の敗北を味わい。スーパーのよく磨かれた冷たい床の感触を全身で感じる事になった。

この時、前日の事やその後の織斑先生の説明もあつてある程度は心構えが出来ていた僕はまだある程度は喰らいつく事こそ出来たものの、今回が初陣でありまた、面白半分且つ半信半疑で挑んだ著莪は相当に手酷くやられた。

普通の女の子なら心に深い傷を追い、二度と近づくまいと思いかねない程に……だが、根っからのゲーマーにして佐藤一族の一員——あの親父の姪である彼女がその程度でへこたれることはなく。寧ろ半分が金銭的事情である僕以上に純粋な意欲を持って以降土日を除き毎日共にこのスーパーに顔を出している。

入店後、僕らはあくまで普通の買い物客を装いながらまず青果コーナー、鮮魚コーナーを順に歩きながら目当ての惣菜・弁当コーナーに辿り着く。但しここで長々と立ち止まったりはしない。普通に考えれば半額シールが貼られるまでその場に入れば容易に獲得できるのだが、その様な行為はこの領域^{フィールド}に於いては『卑しい』と蔑視され

る行為だ。ましてや弁当を手取る。キープしたままの状態で半額シールを貼って貰うなどという暴挙は論外、そんな事をしようものなら『豚』と罵られ、誇り高き狼に駆逐くちくされるのは必至だ。

織斑先生は言った。『所詮、私たちが狙うのは賞味期限の尽きかけた半額弁当……真つ当な人間からすればみすばらしい事この上ない行為だ。——しかし、だからこそ、そこには確固たる“誇り”が必要なのだ。忘れるな佐藤、著莪。高潔な誇りと純粋な弁当への想い。その2つがあって初めて狼になれるのだ』……と——

なればこそ、僕らは現在3割引が貼られている6つの弁当に敢えて手を伸ばさず、数秒間だけ立ち止まって弁当の内容と配置だけを頭に叩き込み、さも興味などないといったフリをして、その先にある精肉コーナーへと足を運ぶ。ここからは戦場で言うなら陣地取りだ。弁当・惣菜コーナーから付かず離れず、半額シールが貼られる様子を視認できる位置、戦いが始まった際にすぐさま駆け出せる位置をキープし、後は気配を殺して来るべき時を待つ。

ここで僕と著莪の様に仲間と共に来店した者は、互いのターゲットを確認し合う。無論、店内に流れるBGMにかき消されそうな程の小さな声で、著莪と目すら合わせずに尋ねる。

「僕の狙いは『吹き出せ汗！ 漂ただよわせる加齢臭かれいしゅう！ 激辛にんにくハンバーグ弁当』だ。著莪は？」

「本命はからあげ弁当かな。取り敢えず今日はお互い、潰し合わずにすみそうだね」

「確かに……」

僕は依然として角煮用の豚バラ肉の芸術的な白と赤のコントラストを眺めながら、微笑する。そう。今回の様に狙う獲物が違う場合は良いが、同じ弁当を狙うとなると、長年連れ添った人生の相方と言える彼女とさえ、本気で戦わねばならないのだ。そこに躊躇いはないのだが、やはり可能なら、共に弁当を手にレジへ並べるのが理想だ。だからこそお互いの本命が違う事には素直に安堵を覚える。基本的に個人戦にはなるが、弁当コーナーに辿り着くまでの過程で共闘する事も出来る。逆に同じ獲物を狙うとなったら開始早々すぐ隣に敵がいる状態だ。序盤戦におけるこのアドバンテージは非常に大きい。

尤も、^{もって}戦闘の中で僕らが互いの本命を手にする前に他の狼にそれが奪われ、残された弁当が1つしかなかったりしたら、僕も著莪も何の容赦もなくそれを獲りに行く。敵は味方に、味方は敵に、刻一刻と戦況が目まぐるしく変わるのもこの争奪戦の大きな特徴と言えるだろう。

現在の時刻は19時55分。この店の半額シールが貼られる時間——
ハーフプライスラベリングタイム
——半値印象時刻は基本的には20時前後なのでもう何時、^{いつ}僕らに半額の実りを与えてくれる神——
はんがくしん
半額神が降臨してもおかしくない時刻だ。

現在残っている弁当は6つ。それを狙う狼の数は……感知できるだけで12、3といったところだろうか？ まだ未熟な僕らの探知能力では断定は出来ないが、これまでの戦いと比較すると倍率としては程々といったところだろう。

その中には見知った顔もいる。僕らと同じIS学園に通う上級生で僕らの事を『ワンコ』と呼んで戦闘の前や後では気さくに話しかけ、争奪戦の中では1人の対等な敵として本気で殴りかかってくれる気のいい先輩方。その特徴から僕と著莪は彼らをそれぞれ『茶髪』、『

顎鬚』坊主』と呼称しており、僕が出会った狼の中でも特に実力者として印象に残る3人だ。彼らが揃って同じ争奪戦に参加すると、戦いの厳しさはより増すだろう。ましてやもし狙いが僕らと同じなら……

いや、弱気になるのはよそう。今はただ、心を研ぎ澄まし、今日1日でおよそ800kcalしか摂取していない。空腹に鳴く腹の虫に従おう。誰が敵でも関係ない。全力で立ち向かうだけだ！

——パタン

「来たぞ佐藤、アブラ神だ」

僕が決意を新たにした丁度そのタイミングで店の表と裏を繋ぐスタツフルームの扉が開き、遅しい肉体をした中年男性が姿を現す。世間的には一介のスーパー店員である彼だが、この時間、この領域に生きる狼にとって、彼は『神』として崇めるべき存在となる。

僕が狙うハンバーグ弁当しかり、やたらと『！』やら『！？』と言った感嘆符を多用し、。岡修造に匹敵するテンションで作られた弁当の生みの親。その身から漂う調理用油の匂いから『アブラ神』と呼ばれる。戦いののろしを告げる半額シールを貼る 半額神 とし
て——

店に入ると同時に一礼した後に惣菜コーナーに来た彼はポケットから取り出した半額シールを残った品物1つ1つに丁寧に貼っていき、続いて隣の弁当コーナーの前に立つ。
ここでいくつかある掟の1つを語ると、例え自分の目当ての弁当にシールが貼られた後であっても、決して駆け出してはいけない。神を始めとした店側には一切の迷惑をかけてはいけないという事だ。

アブラ神が全ての弁当と総菜にシールを貼り終えた後、再びスタッフルームに戻った時、狼は初めて弁当に迫る事が出来るのだ。狼たちの多くがアブラ神のその逞しい腕の動きに目を向けながら息を殺し、今にも爆発しそうな本能を抑え込んでジッと戦いの時を待つ。僕らもまたそうだ。

そうして待つ事およそ3分。

無駄のない手慣れた動きで全ての作業を終えたアブラ神は来た時と同様に店内に一礼した後、再びスタッフルームへと戻る。

パタン、と店員が台車を転がしながらでも通れる作りになった扉が閉まる刹那、獣たちが一斉に駆け出す！

「行くぞ！」

「おう！」

僕たちもまたその1人、スナック菓子のコーナーや青果コーナーなどといった弁当コーナーにより近い場所を陣取っていた狼たちから少し遅れながらも大地を蹴って一気に駆けだす。著我も僕の1m後方から遅れて突いてくる。スタートダッシュはいただいたと一瞬優越感に浸るが、それが誤りだった事にスグ気づく。

弁当コーナーまでおよそ3m。乱戦の中心から少し離れた所で身長2mは越すであろう巨漢きょかんの狼が僕の前に立ち塞ふさがってきたのだ。

「犬はすっこんでな！」

重みのありそうな容赦ない拳が僕に迫る。が、そこを間一髪のとこで身体を屈めて回避する。僕とてこの一週間ただ敗北を重ねた訳ではない。自らを過度な空腹に追い込む事で弁当に対する執着心を上げ、この業界で言う所の『腹の虫の加護』を授かれる程度には成

長したのだ。例え相手が体重100kgは優に超す巨体の持ち主であらうとも恐れはしない。

僕はそのまま僕を侮りよもや避けられるなどと考えていなかったのか、一瞬動きを止めた巨漢の鳩尾^{みそおち}強烈な一撃を叩き込む。腹っぺらしにはキツイ一撃だ。

「ナイス佐藤！　でもってちよつと背中借りるぞ！」

「えっ……………なっ！」

だが、そんな僕よりずっと侮れない奴がいた。そう著莪だ。巨漢の攻撃をかわし、一撃を決める過程でしゃがんだ僕の背中を土台に彼女は跳躍し、敵のいない空中を翔ける事で一気に先頭の最前列までショートカットしたのだ、しかも着地の際、まさかの登場に驚いたのか。或いはスカートの中がスパッツだったのにガツカリしたのかは知らないが固まった狼の1人をそのまま跳び蹴りで仕留めたりしている。アイツさては僕をこうやって立てないし踏み台などに利用する為に敢えて先陣を切らせたな！？

僕らの位置からだとなれ程早く駆けたとしても1番に到着して戦闘開始前に弁当を奪取するのは難しく。それどころか最前線に到着するまでの戦闘行為は確実に起こる。過去の経験でそれを学んだアイツは僕の勇敢さを利用してまんまと体力を温存した状態で戦列の中心へと斬り込んだのだ。

全く……昔から僕を利用する事にかけてアイツは天才だ。だったらコツチももキツチリ利用させて貰おう。僕は著莪の華麗な跳躍と前線への参入に目を奪われた巨漢にシオルダータックルを繰り出す。

完全に意識が逸れていた上に先程のダメージも残っていた彼は2倍近い体重差はあるであらう僕のそれに吹き飛び、仰向けに倒れ込む^{あおむ}。

まずは1人撃破……だが油断はできない。例え何人倒そうと弁当を獲れなければ勝利はない。この戦いはあくまで争奪戦なのだ。僕は再び駆け、その過程で幾人かのダウンした敗者の姿に目をやりながら戦闘の最前線——弁当コーナーへと飛び込んで行く。

現在戦闘行為を行っている狼は9名、内3人は著莪と茶髪と坊主だ。顎鬚は——意識こそあるものの膝をついている。弁当はまだ1つも奪取^{だうしゅ}されていない。

ここまでで負ったダメージもなく。腹の減り具合も上々——いける！

僕は生き残った8人がそれぞれ行っている3つの戦闘の合^あ間^{いま}を縫^ぬう様にして弁当コーナーに接近、欲しくてたまらない長方形のプラスチック容器に手を伸ばそうとする。しかしそこへ——

「させるかよ！」

先程まで拳をぶつけあっていた坊主と小柄な男の狼が2人がかりで僕の両肩を掴み、力いっぱい僕を弁当コーナーの外にぶん投げた。クソ、後一步だったのに！

悔しさを噛みしめながらも僕は再び立ち上がり、弁当コーナーに目をやる。しかしそこに待ち受けていたのは、1つの絶望だ。

——うっしや！

——獲^とったぞ！

先程僕を2人がかりぶん投げた坊主と小柄な男がそれぞれ弁当を手に使っていたのだ。しかもその1つは……僕が狙っていたハンバーグ弁当だ。どうやら僕を投げた後で戦闘を再開せずそのまま勢いに乗って奪取した様だ。ここで彼らの狙いが同じだったのなら再戦だっ

たろうが、僕にとっては不幸な事に、小柄な男の狙いは鮭弁当だったのだ。

「クソッ！」

あまりの悔しさから僕は衝動的に床に拳を叩き込む。だがまだだ！まだ戦いは終わっていない。ポリウム満点のハンバーグへの未練は残るが未だ弁当コーナーには魅力的な4つの実りが残されている。その中で最も僕の琴線に触れるのは――焼肉弁当だ！

現在生き延びた狼の数は僕を含め7人。弁当陳列棚のまさに眼前で三竦みならぬ四竦み状態で時折お互い牽制し合いながら睨み合う4頭の無名の狼たちと、そこから少し離れた位置で1対1の死闘を演じる著莪と茶髪だ。著莪も大分健闘しているがやはり経験の差だろうが、現在は茶髪の圧され――ハッ！

「著莪！」

僕が戦況の観察をしているまさに今、茶髪の一撃で著莪は吹き飛ばされる慌てて彼女の元に駆け寄るが、僕はこれが狼として誤りであった事に数秒後気づく。

「く……佐藤……弁当はどうなった……」

「ハッ……！！」

そう。僕が彼女の元に駆け寄って声を抱き起こしている目の前で、茶髪は最前列でこう着状態にある4頭の狼たちの所へ斬り込み、焼肉弁当を手にしたのだ。

僕は己の愚かさを思い知らされる。たった数秒で戦況が目まぐるしく変わる戦場で何をボーッと立ちつくしていた？ 拳句の果てに仲間を氣遣ってまんまと弁当を獲られるなど……アマちゃんにも程がある！

更に茶髪の乱入によって生じた隙を突き、4頭の内2頭が強かに獲物をかすめ取り、残る弁当はたちまち1つに——しかもそれは著莪が狙っていたからあげ弁当だ。現在獲り損ねた2頭の狼が最後の^{みの}実りを賭けて最後の戦いを繰り広げている。

「……残った弁当は1つ、からあげ弁当だ。陳列棚の前では2匹の拮抗した力を持つ狼が戦闘中……」

「そつか……ついてるな」

傷つき倒れながらも持ち前のタフネスで立ち上がり、再び戦場へと向かおうとする著莪。

その後ろ姿は気高く、美しい。彼女はもう、立派な狼なのだ。

「2人で突っ込むぞ佐藤。取り敢えず陳列棚の前に入る狼を倒した後で勝負だ。……私に勝てたらキスしてやるよ」

「……いや、突っ込むのは僕だけだ。あの2頭の狼は何とか抑え込む。お前はその隙に弁当を獲れ！」

「なっ……オイ佐藤——！」

驚く著莪の言葉も最後まで聞かず、僕は特攻よろしく2頭の狼に向かって奇襲をかける。

別に当初からからあげを狙っていた彼女に気を遣った訳でもなければ

ば、くだらない自己犠牲の精神にかられた訳ではない。強いて言うなら……利己的な打算。恐らく茶髪との戦いで消耗した著莪の力ではもう、まともな戦闘は行えず、僕が片方を相手取ってる間に残された片方は容易く彼女を倒して悠々と弁当を奪っていくだろう。ならばいっそ、僕が彼らの注意を引きつけている内に奪って貰う方が確実だ。ここまで喰らいつき、傷つきながら2人で惨めに負け越すより、片方が犠牲になって勝った方がいい。その上で正当な報酬^{ほうじゅう}として5つあるからあげの内2つ貰えれば僕は――

「おおおおつ！ 行け著莪！ 納得できないかもしれないけど、その手に勝利を！ 半額弁当を掴め！！」

不意打ち気味なスタイルで2頭に飛び掛かり彼らを引きつけながら、僕は彼女に叫ぶ。

意味が分からなかった。

佐藤と著莪の後をこっそりとつけ、スーパーに辿り着き、その場を取り巻く異様な空気を感^さじながら顔見知りである更識^{さらしき} 簪^{かんざし}を見つけたまでは良かった。しかしそこから彼女に話を聞いてから、今現在目の前で起きている非日常的な光景の全てが、まるで理解出来なかった。もしか自分は夢を見ているのか？ と割と真剣に疑いたくなるほどに、その光景は意味不明で一夏は激しく困惑した。

閉店直前の人気のないスーパー、ジンギスカンのテーマ曲が流れる精肉コーナーの前で、大男と殴り合う佐藤の行動も、IS学園の3

年生と思しき女子に思いきり吹っ飛ばされながらも立ち上がり、何かにとり憑かれた様に死屍累々（るいらい）と人が倒れる弁当コーナーを目指す著者の真意も、そして啞然（あぜん）となる自分と篝の横で『ホウ、相棒の為に自ら男たちに向かい、その肛門の菊の花を散らせるサイトー刑事………使える』と眼鏡を光らせながら、二チャリ………と寒気がする笑みを浮かべてメモを取る簪の目的も………何もかもが、意味が分からなかった。

「な、何が何だかまるで意味が分からんが………と、取り合えず救急車と警察を呼んだ方がよくないか一夏？」

「そ、そうだよな！ と、取り合えず救急車かだよな………！？」

と、自分より少し早く現実に戻った篝が至極もつともな意見に同意し、一夏は慌てて携帯を手にする。この場で起きている事が何であれ、目の前で友人も含めた十数人に人間が気を失い、意識のある者は血を流しながらも殴り合いを続けているという現状は、真つ当に考えて間違いなく異常事態だ。一刻も早く110なり119なりの番号を押し、事態の収拾に努めねば——問題は説明だろう。仮に『お巡りさん大変です！ 今スパーで十数人の若者が半額弁当を賭けて殴り合ってます！』などと通報したら、十中八九イタズラ電話として扱われてしまう。

一夏はまずどのように説明するのが適切か逡巡（しゆんじゆん）する。するとその背後から、彼の携帯をヒョイと奪い取ってたたむダークスーツの女性の姿があった。

「余計な事はせんでいい。この程度の事でイチイチ忙しい警察や医者に迷惑の手を煩（わづら）わせるな。店側にも迷惑だ」

「千冬さ……織斑先生!？」

「何で千冬姉^{ねえ}がここに!？　つか何で止めるんだよ!!?」

「誰もそんな事を望んでないからだバカ者。ぶっ飛ばされた連中も含めてな」

常識的な観点から至って真つ当な対応を取ろうとする一夏(弟)を阻む千冬(姉)。その眼差しはいつもの様に凛々しく。圧倒された一夏は言われるがまま携帯をしまう。

「千冬姉は……ここで何が起きているのか知っているのか？」

「ああ。佐藤をこの世界に引き入れたのは私だからな」

「なっ!？」

「見ろ一夏!」

耳を疑いたくなる言葉を聞き、本日何度目になるかわからない『! ?』を出す一夏。一方、箒が指差す方向に目を向けると、そこには佐藤の捨て身のサポートもあり、ついに念願のからあげ弁当を手にした彼女が勝どきを上げている姿があった。

最後の弁当が奪取された時。それはすなわちこの戦いの終結を意味する。

よく磨かれたスーパーの床の冷たい感触を体中で感じながら、僕の耳には勝利に歓喜する著莪の声が届き、顔を向けるとそこにはからあげ弁当を掲げる彼女の姿があった。

ああ、ついになれたんだな著莪……。

勝利の味を知らない犬から、一匹の狼に……。

僕の胸に渡来するのは彼女への賛辞と、一抹の寂しさ——彼女に勝利を託した事に対する後悔はない。彼女の勝利が自分の手によるものなどと思着せがましい事を言つつもりはない。

だが、生まれた時から一緒に過ごし、両親よりも長い時間を共有した彼女が、自分が未だ到達していない世界に先に足を踏み入れた事実がどうしようもなく。僕の心を締めつける。

「我ながら小さい……」

——ホウ。自身を苦痛と快楽へと誘った大柄の黒人男性の極太のモノを前にサイトーは自身の無力さと生まれながらのサイズの違いに絶望する……と、うん……これはまたイける！

「っー」

な、なんだ！？

突然得体のしれない。心臓が一瞬にして凍りつく様な感覚に過り、僕は痛みを忘れ反射的に起き上がる。もしや数少ない男性のIS操縦者である僕の身柄を狙って、どこぞの組織の魔の手が迫っているのでは！？僕は周囲を見回す。するとそこには、見知った顔がい

くつもあつた。

「大丈夫なのか佐藤？」

「織斑君……どうしてスーパー（ここ）に？」

ハッ……！ もしや今の視線……勇ましく戦いに興ずる僕のカッコ良さに性的な興奮を覚えた彼の視線では！？
ちくしょう……どこまで危険な男なんだ君は！

「中々の粘りだったが、惜しかったな……」

「織斑先生……すみません」

「私に謝る必要などないさ……敗北の辛さも勝利の喜びも、何時だ
って当人だけのものだからな」

先程の邪悪な視線の正体かもしれない織斑君の登場に僕が戦々恐々
としている所に彼の姉であり、僕たちをこの世界に導いた織斑先生、
そしてどうやら僕に惚れているっぽいツンデレ娘の篠ノ乃箒様だ。
そしてその後ろではレジで会計を済ませ、ビニール袋に弁当を納め
た著莪が続く。

「アレー夏たちじゃん！ どしたの一体？」

「あやめ……いや、実は……」

著莪の質問に応える形で織斑君と篠ノ乃様は、最近の僕たちの様子
を心配して後を尾けた後、この場のルールを知る者から説明を受け、
戦いを観戦していたのだという。——ここで問題なのは彼ら……特
に織斑君の“心配”に僕に対する余分な性的な感情が含まれている
かどうかなのだが……いや、今は考えるのはよそ。というか想像

するのも恐ろしい。

「しかし何はともあれ著莪は初勝利だな。しかも目当ての物を獲るとは、中々の戦果だ。——よくやったな」

そんな貞操ていそうの危機に1人身震よそいする僕を余所に、織斑先生はいつものりんとした表情をほんの少し柔らかくして彼女に向かい、微笑ほほえみと賛辞さんじを送る。

それに対して「まあ、半分は佐藤のおかげなんですけどね……」とか珍しくも謙虚な事を言っではいるが、その表情からまんざらでもない気分になっている事が長い付き合いの僕にはスグ分かった。

「ホラ佐藤。お前もいつまでもボーっとしてないでさっさとどん兵衛買ってこいよ。今日は総菜も多少は残ってるみたいだしさ」

と、そんな自身の心中を見透かされたのを察したのだろうか？ 少し気まずい様子で僕をせかさす著莪。だが僕は——

「……悪い著莪。僕はこのまま、“ジジ様の店”に行く。——待っててくれるか？」

弁当や総菜に半額シールが貼られる半値印象時刻は、季節やスーパーの方針等で多少の違いはあれど原則『その店の閉店1時間前』というのが基本であり、よってスーパーの閉店時間が違えば半額になる時間も当然違う。

そしてIS学園近隣で最もその閉店時刻が遅い店が、先刻語られたジジ様の店である。

つまり、僕のように戦いに敗れた狼にとっては敗者復活戦の場にもなるという事だ。

無論、これは口で言うほど簡単な話ではない。

裏を返せば僕以外の多くの負け犬——否、手負いの獣が始まる最終
ハーフライズラベリングタイム
半値印象時刻のこの店の戦いは無論競争率も高く。先の戦いのダメ
ージも考えればリスクも高い。

だが、それでも僕は——

「……おいてけぼりは、ゴメンなんだ」

そう。まだチャンスがあるのに著我に前に行かれるのを甘んじて受け入れられる事なんか、僕には出来ない。

そこにチャンスがあるのなら、どれほど可能性が低くても、リスクがあるうとも……僕は挑みたい！

「……ん、分かった。ならあの公園で待っててやるさ。その代わりに、今度はキツチリ弁当獲って、それで少し私にくれ」

そう言つて著我はポンと僕の肩を軽く叩いた後、一足先に店を出る。やはり以心伝心とでも言うのだろうか？ 『そんな怪我で無茶だ！』とか言わない辺りは逆にありがたい。……まあ、ただ単に雑に扱つてるだけなんだろうけど……。

「オイ、佐藤。お前、本当にまだ続ける気なのか？ やめとけつて！ たかが半額弁当の為にどうしてそこまで無茶するんだ！？」

おつとどういう事だ？ ここに来て僕の身をヒロインの様に心配する男が現れたぞ？ そう、織斑君だ。その横で限りなくどうでもいいものをも見る様な篠ノ乃とは真逆に心から僕の身を案じている。

……やはりガチなのかコイツは！？

「い、いや……気持ちはいないんだけど……うん。生憎、腹が減ってるんだ」

「だったら俺が奢^{おし}ってやる！ 明らかにおかしいだろ！？ 賞味期限の切れかけた弁当の為にここまで傷つくなんて……」

「あ……いや、僕は………アレ？」

またこの間の模擬戦の時の様な恐怖に狩られ、及び腰になりながら織斑君の制止を振り切ろうとする僕だったが、ここで不思議な違和感を覚える。

……なんだろう。元来、食費を削りながらも食事確保したくて始めた事なのに、彼の『奢^{おし}ってやる』という言葉に、欠片の魅力も感じないのだ。無料^{ただ}の上に安全確実に食べられる外食より半額とはいえ金がかかり、且つ殴り合いの果てに手に入れられるかも分からない売れ残った弁当を選ぶ事が、当然の事となっている自分がいたのだ。

織斑君が僕の鍛え上げられた美しい肉体^{からだ}目当ての可能性があるからか？ いや、違う。仮に同じ事を織斑先生や篠ノ乃が言っただとしても、少なくとも僕は同じ想いだっただろう。

著莪との約束があるから？ ……それがあるかもしれない。けど、それだけが全てではない気がする。

この一週間の戦いの中で、欲しくても手に入らない。砂漠の蜃気楼の様なあ半額の弁当に対し、ただ安く得られる食事以上の、特別なモノを見出しているのかもしれない。

そしてその特別なモノの正体が何か知るには多分。自身の手で弁当

（勝利）を掴む以外に方法はないのだろう……。

「どうかしたのか佐藤？」

「いや、なんでもない。とにかく僕は行く。例え生傷をふやすだけかもしれない……。恐ろしくバカバカしい事なのとしても、僕は行く」

「佐藤……」

——多くの男に蹂躪^{じゅうりゃん}され、身も心も辱め^{はづかし}られながらも『それでも僕はイク』という決意を語るサイトー……まさかの第2R^{ラウンド}！？……これは追跡しなくては……！

……アレ、なんだろう？
また寒気がしたぞ……？

——まさかの3部構成！？ 今度こそ後編に続く……！！

第5話 誇りと空腹の大衆向け大規模小売店（スーパーマーケット）——<中絶

というわけで次回こそ必ず！

争奪戦パート、ちゃんと書いてたでしょうか？

第6話 誇りと空腹の大衆向け大規模小売店（スーパーマーケット）

後編

読者の皆さま、大変お待たせいたしました。

序盤の最終幕となる『半額弁当争奪戦デビュー編』（今勝手に命名w）のラストが書きあがり投稿します。

争奪戦描写も難しかったのですが食事描写とかはもっと難しかった

（汗）

アサウラ先生マジパネエ……

原作ベン・トーに比べると数段劣化して見えるかもしれませんがこれからお付き合いいただけると幸いです

全てのはじまりは、あのスーパーでの出会いだった。

彼女——織斑千冬^{おりむらちふゆ}は最近、特にそう思う事が間々ある。

あの日、小学生の弟を養^{やしな}う為にアルバイトをしていて遅くなった当時高校生の彼女は、お腹を空^すかせて待っているであろう弟の為に、出来あいではあるが、栄養バランスも取れ、価格も手ごろな弁当を買^かう為にスーパーに足を踏み入れ、“彼”と出会った事が、全ての物語の始まりだった。

当時、狼の世界を知らず、犬未満の存在であつた彼女は、不幸にも入店したと同時に半額印象時刻^{ハーフプライスレッキングタイム}に巻き込まれ、何も分からぬままに巨漢の狼に襲われた。武道を嗜^{たしな}んでいた彼女は持ち前の身のこなしで応戦するも、戦いの目的意識も『腹の虫の加護』も持たない人間では狼には勝てず、巨漢の放つ拳がまさにその身を貫こうとした瞬間。眼前に『彼』は現れたのだ。

『オイ、相手は一般人の小娘だぞ？ 腹の虫に吞まれるな』

そう言つて一見長身痩躯の青年は、自身の倍の体重であろう巨漢を文字通り一蹴したのだ。そしてその後、前方にある弁当・総菜コーナーを中心に展開されている乱戦の場に戻った青年はまるで1つの舞台の主役の様に場を支配し、駆けた。

時にその細身からは到底想像が出来ない様な腕力を持って自身より大柄な敵を殴り飛ばし、徒党を組んで挑んでくる数名の狼たちと相

対した時はそのコンビネーションを逆手にとり、最小の動きを持って同士討ちを誘発。さらには一流のアスリートですら不可能な跳躍を持って天井を蹴り、強襲するというアクロバティックな戦術を駆使し、誰よりも早く。圧倒的な力を持って……たった1つの半額弁当を手にした。

時に豪快に、時にトリッキーに、動きは総じて美しく。

多種多様なスタイルを持って戦うその姿に、彼女は見惚れ、場の片隅で蹲る怨嗟の念がこもった呟きを口にする。

『ちくしょう……魔導士め……』

「魔導士……」

それが彼女と彼——魔導士の2つ名を持つ狼 金城 優 との出会いであり、後に世界を女尊男卑社会へと変革させる引き金となる。

彼と出会い。狼の世界に足を踏み入れた事により、彼女は数多くの修羅場を潜り、心身に於いて本物の強さを手にする事が出来た。そして同時に、切磋琢磨しあえる友を手にした。

実年齢は1歳年下の先輩狼である優とは、時に拳をぶつけ合い、時に互いが手にした弁当のおかずを交換し合い、時に、お互いがもつ孤独を癒しあった。

両親に捨てられ、周囲の反対を押し切ってたった1人で弟を守り、育てる為、ひたすらに強くなろうとした故に、孤高の存在となった千冬と幼少の頃から神童と謳われ、幼くしてアメリカの研究機関にも出入りする優。住む世界の違う2人はスーパーで出会いをきっかけに友となり、惹かれ合った。

それが友情なのか愛情なのかは……今の千冬にも解らなかった。しかし、“彼女”は違った。

篠ノ（の）乃束——織斑千冬が幼少の頃から通っていた剣術道場1人娘で、優と出会う以前は紛れもなく1番の親友であった彼女と優は千冬と言う共通の友人を介して知り合い。自身と『同レベルの天才』として友人となった。

やがて彼女自身も狼として千冬と優がスーパーに赴く際は同行し、夜の公園などで夕餉を共にした。

幸福で、優しい時間——しかしそれは、後に訪れる世界変革の序曲でしかなかった。

若き2人の天才の邂逅は、ある1つの最強兵器が作られるきっかけとなってしまったのだ。

その兵器の名こそ——インフィニット・ストラトス。

そしてその雛型となる 白騎士 魔獣 ジャバウォック を初めてとする4種の『最初のIS』が完成して程なく。彼女たちの関係に不可逆の変化が訪れた。

『私はね……優君が好き。その綺麗な顔も、束さんとタメ張れちゃう頭脳も、生き方も、そのどうしようもなく孤独な瞳も全部……優君が欲しい——』

『悪いが俺は、君とは生きれない——』

何でも思い通りにして来た天才少女は生まれて初めて思い通りにならない事態に遭遇した。しかも、代えの利かない本気の恋で――

この一連の事件が、後の『白騎士事件』を始めとする多くの事件を引き起こす暴走へと繋がった。

今の社会も、ISも、世界とそこにおける自分達の現在も、全てはあの日のスーパーから始まった。

――自分は後悔しているのだろうか？

この思案にふける度、千冬はいつも同じ疑問を自分に向ける。

答えは多分、ノーだ。

過去の行いを悔やみ、不可逆な時に想いを馳せる事ほど無価値な事はないと思うし、優や束と過ごしたあの暖かい日々を否定することなど、何があっても出来なかった。

過去は所詮過去、思い出を反芻する事は今と未来の糧であるべきだ。だから、自分は導く。

なんの因果か“彼”が残し、“彼女”は全否定した魔獣の担い手になってしまった少年を――

著我との誓いを胸に佐藤が ジジ様の店 に向かい。戦いに敗れた

狼たちの大半も帰った後、一夏と箒もまた、スーパーを出て帰路につこうとしていた。

「もう8時半か……どこか店に入って夕飯を済ませよう」

「ああ……そうだな」

結末と言うかオチはどうあれ、佐藤と著莪が当初予見していたような危険な事に巻き込まれていない事を知り、当初の目的を達成した箒は、ついでに2日連続の一夏との食事の機会を逃すまいと自然な形で一夏を誘う。が、その反応は希薄であり、所謂1つの心ここにあらずといった状況であった。

「もしや……佐藤の事が気になっているのか……？」

怪訝そうな顔で尋ね。『ん、ああ……』と歯切れの悪い返答をする一夏。案の定な答えに箒はやれやれといった様子で諭す。

「お前がそこまで心配する事ではないのではないか？ 確かに些^{こや}か過激な戦いではあるが、当の本人が望んでいるなら無理に止めるのは筋違いなのだろう。内容はどうあれ……」

「いや、心配つてのもあるんだけどさ……そうじゃなくて、俺、あのスーパーの戦いで思いだした事あるんだよ。そういやまだ小さい頃、週に何度か千冬姉がスリ傷作りながら買ってきてくれたスーパーの弁当の事。なんでか1個の弁当を2人で分け合ってた。どん兵衛とセットで食べたんだけど……すげえ美味かったんだ。アレって千冬姉がさつきみたいに戦って手に入れた弁当なんだなってさ……なあ箒、優さんの事、覚えてるか？」

「……………忘れる訳ないだろ」

何をバカな事を言う。といったニュアンスを含みながら一夏の問いに応える筈。何しろその人物は……一夏には口が裂けても言えないが所謂1つの『初恋の相手』だったのだから……

端正な顔立ちと落ち着いた佇まい。一見して華奢とも言える細身だが服から覗く引き締まった体つきに知的で理性的な彼に対し、当時小学校低学年で有った一夏はカッコイイお兄さんとして憧れを抱いた様に、筈もまた淡い恋情を抱いていた。

尤も、それは今一夏に抱く恋心とは少し毛色の違う。子供の頃に特に女子は大抵1度は患う背伸びした想いのそれであり、本当の意味での初恋はやはり一夏である……というのが彼女の中での結論だ。

そして今現在の彼女からすれば、姉と共にISを作り、結果として家族や一夏と離れ離れになるきっかけを作った彼に対する想いは、ちよつと複雑なものであったりもした。

「……………なんかさ。佐藤って時々、優さんに似てるなっと思う時があるんだ——」

「眼科に行け」

とはいえ、一度は淡い思いを抱いた相手を変態の引き合いに出されれば、腹が立つのもまた真理だ。ふざけた事を言うなとばかりに鋭い眼光を一夏に向ける。

「一体何をどう間違えたら全裸でIS学園に飛び込む変態と、神童と謳われたあの人が似てるというんだ。……全く、お前の冗談は昔から基本的に笑えん」

「うつ！……お、俺のユーモアのセンスに関しては置いてくとして……なんつーかさ。さっき俺が強引にでも引きとめようとした時に見せた目とか、この間の模擬戦の時とか、佐藤って普段はよくわからない奴だけど、こう“戦い”に入った時って妙にいい顔するな、ってその時の雰囲気とかがさ」

頭ごなし且つ無関係のギャグセンスについてダメだしを受けつつも、今のところ彼女にとって人類として最下層の位置にいる佐藤の一面について語る一夏。

確かに彼は……ちよつとアレだ。頻繁に思考の世界に旅立つし、理解不明な発言を口にする。学園内でも裸族だDMだセガ信者だと転校早々様々なレッテルを張られている変わり者ではある。

——が、同時にどこか物事に対し純粹で、それがどんな事であれ真っ直ぐ立ち向かう強さを持ち合わせており、一夏は好感を抱いていた。

その佐藤が挑み、そして心から尊敬する姉がかつて居た世界に、彼は理解できないと感じつつも……否、だからこそその興味を抱いていた。あの戦いの先に何かあるのか？ 傷つき、倒れながらどうして彼らはたかだか200〜300円安くなった。賞味期限の切れかかった弁当を求めるのか？ その疑問が、彼の足をスーパーへと運ばせるのだ。

「一夏っ！……全く、一体どうして……ハッ！ もしや奴が女子生徒に対し妙に淡白なのは……い、いかん。その道は魔道だぞ一夏あ~~~~~！！」

「ほう。もしやと思っていたけど、サイトー君に続き織斑君まで……これはこれは……」

そしてそんな少年の行動は1人の少女は悶々とし、更に別の少女は
壮大な妄想の世界を拡張させてイクのであった。

「クッ、まさかこのタイミングで……！」

普通に歩けば15分ほどのアブラ神の店へ、少し遠回りして30分
かけて辿り着き、自動ドアを開けた時、僕は思わず苦々しく呟く。

店内の至るところに合わせて数十人の巨軀きよくが徘徊はいかいし、汗と男性フェロ
モンの香りを漂わせていたのだ。

「ようワンコ。お互い運がなかったな……まさかここでアラシ>
と出くわすとはな。……アブラ神の店で弁当さえ取れりやあな……」

スナック菓子コーナーの陳列棚を見つめる僕と背中合わせにあるガ
ムコーナーに目をやる顎鬚あごひげがどこか焦燥にかられた声で漏らす。

アラシ——天災である 嵐 やネット世界などでもある 荒らし
など複数の意味合いを込められて付けられたその正体は、近隣の
大学にある数十名の強豪ラグビー部の部員たち。普段はあまり現れ
ないのだが大会前などで練習が長引いた時、彼らはまさに天災の如
く狼たちの狩り場に現れ、その鍛えられた肉体と体育会系ならではの
統率。集団ならではの戦法を用いて狼たちを薙ぎ払い、弁当・総

菜を根こそぎ奪い去っていくのだ。

おおし

オバチャン

織斑先生から 大猪 と呼ばれる最悪の強さを持つ豚と共に狼にとつて嫌悪と畏怖の念を込めて呼ばれるこの存在と遭遇するのは今回で2度目であるが、初遭遇した先週は、その圧倒的な『数の力』をまざまざと見せつけられた。

彼らの真の恐ろしさはそれだけの物量を持って1つの巨大な個として動く性質にあると言えよう。

実際、狼の中でも常時コンビやトリオを組んでいる者や強敵や激戦を突破する為に一時的な共闘を行う事はあるのだが、その大前提として『一頭の狼が狩るのはその日、自分が食す分だけ』というルールがあり、あくまで弁当奪取そのものは個々で行わねばならないのに対し、彼らのそれは完全な集団戦。1人を除く全員で他の狼たちを抑える肉の壁となり、残りの1人がその間に全ての弁当と総菜を根こそぎ奪い去っていくのだ。その様はまさに嵐が過ぎ去った跡のそれ……

その時、共にその天災に挑み、地に伏した茶髪の弁によれば、『単独の狼による撃退はまず不可能。仮に狼同士で組んだとしても無名の狼による即席チームでは到底対抗できない。腕の立つ2つ名持ちが最低2人、その上にその場にいる他の狼が続いて初めて対抗できるだろう』との事だ。

しかし現状、店内にはそれ程の実力者は存在せず、狼の数も未だに弁当を手にした事がない“犬”である僕を含めても10人前後であり、その大多数が、今夜はもう無理か……という諦めの色を示していた。

僕の背後にいる顎鬚も含め……

「ワンコ、忠告しとくが連中に挑もうなんて考えんなよ？ 前に茶

髪も言つたと思うが奴ら天災みたいなもんだ。しょうがねえ。明日に備えて今日は諦めな」

そういつてガムの陳列棚から離れ、彼はその他の狼と共にカップ麵コーナーへと向かう。

それは僕より多くの戦いを経験し、この領域フィールドでの様々なルールを知る先人からの警告であり、恐らくは正論。相当のものであるう弁当への未練を微塵も見せず、潔くその場を立ち去る姿にはカツコ良ささえ感じ、自身は雨天中止になった遠足への未練を断ち切れず、駄々をこねている子供と変わらないのではないか？ という気持ちに揺れる。

ここで諦めるのはきつと、正しい判断なのだ。機タイミングが運が悪かった。仕方がなかった。いくらでも言い訳が立つ。弁当を手に入れられなくても、自分には傷ついた心と身体を温かく包み込んでくれるどん兵衛がある。しかも今日は、その奪取に貢献した著莪から、おかずのからあげを1つ貰える事は確約済みだ。からあげ入りどん兵衛……いいじゃないか。あの芸術的な汁からあげを浸すなんて中々の贅沢だ。そう、僕には著莪のからあげがある。著莪の……

——公園で待っててやるさ。その代わりに、今度はキッチリ弁当獲って、そんで少し私にくれ

ふと、脳裏に浮かぶのはそんな著莪の言葉。僕が半額弁当を獲れると信じ、待っていてくれる彼女との約束だ。

果たして僕は、このまま何もせずどん兵衛を買った後、胸を張って彼女の元へ行けるのだろうか。

——アラシがいたから諦めた。全くついてないよね。

なんて知った風な事を言つて、苦闘の末に弁当を手にした彼女と夕餉を共に出来るのか？

生まれた疑問の渦はたちまち僕の胸の中で逆巻き、顎鬚に続こうとする僕の足を止める。

「——おいワンコ。まさかお前……」

「忠告ありがとう。けど僕は……弁当が食いたいんだ」

「俺だつてそうさ」

「勝ちたいんだ」

「誰だつてそうさ」

「戦く前から、諦めたくないんだ」

「皆そうさ！　けど、今はその時じゃ……いや、言うだけ野暮だったな。生き方は人それぞれだ。俺にそれを止める資格はない。行きたければ行け。俺は……降りる」

何も知らない若造の無謀な挑戦に挑もうとする姿勢に苛立ちを覚えたのか。一瞬感情的な態度を見せつつも、スグに冷静さを取り戻した顎鬚はそう言つて再びカップ麺コーナーへと向かう。

その様はやはり引き際を心得た大人のそれに感じさせ、自身の幼稚さを痛感させられるがそれでもいい。という気持ちの柱が今の僕にはあった。

想い返すのは著莪との約束と、子供の頃から教えられてきた親父の言葉、佐藤家の家訓——

『人生は諦めてもゲームは諦めるな!』

普通に考えれば『逆だろ!』というツツコミが真っ先に飛び、発言者が人として色々終わってる親父である事を考慮すればかなりアレな教えだが、僕はこの家訓が結構けっこう気に入っている。あの親父の教えの中では非常に稀まれな真っ当なものではないかと考えている。

何故なら、この言葉には例えどれ程のリスクがその後待ち構えていても、損得を考えれば割に合わない事であっても、目の前の戦い（ゲーム）に全力を注げという事なのだから。

愚かでも、無様でも、負け戦でも、その果てに得られるのが売れ残った弁当だとしても、己の全てを賭けて挑む姿勢こそが、佐藤家の男の生き様なのだ。

常日頃から親父や祖父の様な人間にだけはなりたくない。というかいつか母の口から『母さんね、実はお父さん以外の人と関係を持っていて……洋、実はあなた、お父さんの子じゃないのよ!』という割とシリアス全開なカミングアウトがされることを切実に望んでいる僕ではあるがその矜持だけは持っている。だから……ここで踵かかとを返すわけには、行かないのだ。

「どうやら、腹は決まった様だな佐藤……」

「ア、アンタは……!」

そんな僕の目の前に、ダークスーツに身を包んだ黒髪の女性が姿を現し、丁度向かい合う様な場所に居た顎鬚を何故だか戦慄させつつ、僕の前に立った。

言うまでもなく。僕をこの世界へと誘い。見守り続けてくれている
織斑先生だ。

「佐藤。分かっていると思うがアラシ（奴ら）は強い。加えて店内
に入る狼の大半は戦わずして場を去ろうとしている。恐らく立ち向
かう狼は貴様1人。ただただ袋叩きにされて終わる可能性がある。
それでもお前は戦うんだな？」

どこか威圧的な彼女の問いに委縮こしゅくしつつ、僕は首を縦に振る。

「腹が……減っているんです」

ひょっとしたら怒られるのかもしれない。という恐怖の中、それで
も下手な嘘はつかず、約束と家訓に続く3つ目の動機を口にする。

「そうか。奇遇だな……私もだ」

「え？」

すると彼女は僕から視線を離し、スナック菓子コーナーから覗く事
の出来る弁当・総菜コーナーにそれを捉える。そこには既に、この
店の半額神である老人 ジジ様 が半額シールを張り始めていたの
だ。

ジジ様はその年齢もあってシールを張り終えるのに時間が係る半額
神ではあるが、恐らく後2〜3分後には作業を終え、バックヤード
に戻っていくだろう。

即ち、戦いへのカウントダウンはもう始まっていたのだ。

「ま、まさか……織斑先生自らも狩りに……!？」

「何を驚いている小憎。私とて所詮は一介の狼だ。仕事にかまけて
久しく狩り場から離れているく古狼ころう>ではあるが、偶には暴れてや
りたくもあるさ。特にああいう。数にモノを言わせて狩り場を蹂躪
するく群れ豚>どもが現れる夜はな」

そう言つて彼女は缶詰コーナーに潜むアラシの1人を侮蔑する様な
目で一瞬見やる。

確かに最低限のルールを守っているとはいえ、彼らの行いは豚と呼
ぶに相応しいものだ。しかしその圧倒的な強さからアラシという畏
怖の念が込められた名で呼ばれる彼らをただの『豚の群れ』と言ひ
切るとは……それ程の強さを、彼女は秘めているというのだろうか？

「動くと言つのか……かつて最強の名をほしいままにして来た魔導ウィザ
士イトの相方にしてく騎士王>とすら呼ばれていた伝説の女狼……『黒
騎士』織斑千冬が……！」

彼女とすれ違ふや否や金縛りに圧倒ようにかたまっていた顎鬚が消
え入りそんな声で口にした言葉が耳に入る。

『黒騎士』……それは間違いなく織斑先生の2つ名だ。そしてそれ
は、彼女が他の狼と一線を画す強さを持つ狼である事を示す異名。

「そんな化け物を見る様な顔をするな。今の私は一介の古狼、この
世界ではとつくに一線を退いた気分屋のロートルでしかない。それ
より佐藤、貴様の獲物はなんだ？」

「あ、すいません……」

たちまち委縮してしまった僕の緊張をほぐすように気持ちおどけた

様な口ぶりで語りかける先生の言葉で我に返りつつ、僕は『サバの味噌煮弁当』が第1希望である事を口にする。

すると織斑先生は、何故だか少し感心した様な表情を見せて後、『ならば私は肉じゃが弁当を狙うとしよう』と僕と獲物が被らない事を示してくれた。つまり、共闘してくれるという事だ。

「連中に勝つにはいくつか方法があるが、その中でも1番手堅いのは奴らが到達するより早く弁当を奪取してしまう事だ。だが、この方法には1つ問題がある。分かるか？」

間もなくジジ様が全ての弁当に半額シールを張り終えようとする中、織斑先生は教師らしく、僕に問いかけてくる。

「それは……1つ間違えると僕たちまで豚になってしまうからじゃないですか？」

僕はその問いに自信なさげに答える。すると先生は『そうだ』と短く頷き、補足をする。

「戦闘行為を極力避け、スピード勝負に出ること自体は確かに1つの戦術ではあるが、度を越した事をすればそれは卑しい行為になってしまう。初動を如何に早めるか。良い待機場所を確保できるか。などという小手先の技術ばかりを求め、フライング気味のスタートをし、拳句は豚として処分される。故に、真つ当な狼は誰もやらなくなつた」

依然としてその場で固まる顎鬚と僕の前で、織斑先生は淡々と語る。恐らく彼女は実際にそうやって豚に堕ちてしまった狼を何人も見てきたのであろう。その横顔には、微かな哀愁を感じる事が出来た。

「だからこそ私は、そういった奇をてらう戦法ではなく。正面からぶつかり合う事がこの場で最も美しく正しい戦い方であると思う」

「けど、それじゃあアラシには勝てません」

僕は言った。顎鬚も含めた3人の中を数瞬の沈黙が包み込む。先生は言葉に詰まったのかと思ったがそうではない。彼女はジジ様がスタツフルームに戻る際の音に注意を払っていただけにすぎなかった。ボタンと扉が閉まる。店内には地響きの様に靴音が轟く。先生が、ゆっくりと動き出す。僕の脇を通り過ぎる。

「そうだ。姑息な勝利より胸を張れる敗北を選ぶ。それがこの領域に生きる者だ。故にお前の決断は……………何より正しい」

そう僕に囁くように口にする先生は、一瞬、横目で僅かに僕に微笑みかける。

その微笑みに僕の体の芯が震えた。体内で微弱な電流が流れる様なこそばゆさを感じ、両手を強く握りしめた。

「所詮、私たちが狙うのは半額弁当だ。真つ当な人間からすればみすばらしく、嘲笑う者もいるだろう。しかし、だからこそ私は、お前は、誇りを持ってここに立つ。みすばらしいこういだからこそ、誇りを持って全力でこれにあたる。何人も一生懸命に頑張っている者を非難することなど出来はしないのだから」

僕は頷く様に唾を飲む。そして彼女は言ったのだ。かつて、僕を導いたあのと同じ言葉を――

「誰しにも負けると思われる勝負を覆す。それが……楽しいんだろ
う？」

「っ！！」

その言葉を聞いた刹那、僕は衝動的に地を蹴って駆け出し、前を往
く彼女へと続く。

なんということだろう。かつて織斑先生の相方であったという魔導
士が、よもや自分も良く知る。世界的にもその2つ名で知られる天
才と同一人物であったとは……！

確かにISの開発者である彼と第1世代機からの乗り手である織斑
先生が知人であること自体なんら不思議な事ではないが、半額弁当
争奪戦などという極狭の世界の中でも同様の有名人であり、揃って
僕の師と言える立場になるとは何と言う偶然だろうか？

地球は広いが、世間は限りなく狭い。という事を改めて痛感しながら僕は 騎士王 と呼ばれた彼女に続く。

僕にかつてあの人の相方を務めた魔導士の真似事が出来るなどと考
えはしない。だがそれでも、1人の狼として彼女の背中を追いか
けたいという強い想いはあった。同時に彼女となら、どんな敵であ
ろう怖くないという想いがあったのだ。

最早、自分達を邪魔する者はいない。今宵この場での弁当・総菜は
全て自分達の餌となるのが当然とばかりの態度を取り進軍するアラ
シ達だが、道に立ち塞がる先生の姿を見た途端。その気迫に気落と
されるように立ち止まり、息を呑む。

「黒騎士……何故貴様がここに！？」

「フツ—— 分かり切った事を聞くなよ豚共。弱さが引き立つぞ？」

「クツ…… とつくに一線から退いた古狼風情が！」

「恐れるな！ 進め！ 如何に最強の一角とはいえ、1人ならば恐れる事は何もない！」

「そうだ！ “聖剣”も持たず、魔導士もない騎士王など恐るるに足らない！ 数で押せつ！！」

アラシたちは彼女の放つ気迫に一瞬たじろぐも数による優位を絶対のもの信じ、再び進軍する。しかし対する先生はおよそ20人を超える屈強な男たちを前に、涼しい顔をして相對する。

「来い豚共、お前らに血と敗北の味を教えてやる。」

そう言つて彼女はひらりと跳躍、常人のソレを遥かに超える脚力を持ってスーパールの天井を蹴り、重力と脚力を合わせて降下しつつヒラリと回転し、有名なバツタのヒーローのような鮮やかな跳び蹴りを持ってアラシの一体を沈めつつ、汗臭い肉の海の中に突入。四方から襲いかかるアラシたちの攻撃をまるでヒラヒラと舞う木の葉の様にかわし、向かい合う彼らの同士討ちを誘発したのだ。

豪胆極まる大技を駆使したかと思えば、群れを成す相手の数と力を逆に利用し、最小の動きで沈めていく。その研ぎ澄まされた動き、圧倒的な数の差を物ともせず勇ましく斬り込んで行く様は正に誇り高き騎士のソレ——

しかしそんな加勢など無意味…… とすら思える様な圧倒的な強さを見せる彼女だが、流石に最初から挑まず、仲間たちが引きつけている間に弁当を奪取しようと駆ける数人のアラシまでは手が届かない。

僕は素早く彼らに向かって駆け、その内1人に向かって減速なしのタックルを叩き込む。

「うおおおおっ！」

「チィ！ 騎士王に触発された犬がつ——！」

先生以外眼中になかったアラシ共は接触直前まで僕の存在になどまるで気付かなかったのかタックルを受けて男はアッサリとダウン。倒れる彼をクッションにダメージを抑えた僕はスグさま立ち上がって弁当コーナーに背を向け、5人のアラシと向かい合う。全員が全員、ラグビーで鍛え上げられた屈強な肉体を誇示し、また先生に続いて邪魔立てする僕に対する憎悪の念を向け、血に飢えた化け物の様にすら見える。数や腕力を鑑みれば絶望的な状況だが、不思議と恐怖はない。

どれほど血に飢え、群れを成そうと所詮彼らは唯の豚。誇りを胸に戦う気高き狼の前には有象無象の集団でしかない。

そんな根拠のない自信が僕に立ち向かう勇気を与える。

——いや、正確には僕たち（、、）に……

「っ！ アンタ……」

「俺だってプライドのかけくらい持ち合わせている……。古狼やワンコが戦ろうつてのに現役の狼が引くわけにはいかねえだろ！」

そう言つて顎鬚を始め、アラシを前に諦めていた狼たちが僕と共に立ち塞がってくれたのだ。先生の……気高き黒騎士の存在が、彼らに立ち向かう勇気を与えたのだ。

そういつて数頭の狼は雄叫びを上げて進軍し、迫りくる4人の弁当奪取班であるアラシや寄つてたかつて先生に挑む残りのアラシに立ち向かつていく。通常はバトルロイヤルしながら乱戦が展開される領域の中にあつて、共通の敵を殲滅せんと狼たちは群れを成して天災——否、卑しき豚の群れに挑みかかった。

当然、その中に僕も混じる。

「弱きは——」

「叩くつ！」

「豚は——」

「潰すつ!!」

次々と倒れるアラシの面々、最早形勢は完全に逆転しつつあった。そんな中僕と先生はお互いに背中を預け、囲むように立ち塞がるアラシを相手取る。

「どうだ佐藤。たかだか数百円の弁当を賭けて戦つ。下らなくも最高の戦場はっ！」

「ハイっ！ 楽しいです！」

背中越しの彼女の問いに僕は力いっぱい答える。

「腹は減っているか？」

「はいっ！」

「弁当が食いたいかな？」

「はいっ!!」

「ならば勝て！　そして喰らえ！！　勝利の味を噛みしめろ！！」
「はいっ！！！！」

「……………うおおおおおっ！！」「……………」

全方位から一斉に襲いかかるアラシの群れ、僕らは互いの背中を預け襲い来る男たちをなぎ倒して行く。当然その中で何発も殴られボロボロになっていくが不思議と痛みは感じない。それどころか、力がみなぎって仕方がない。脳内麻薬が凄まじい勢いで分泌されていくのが実感出来る。空腹も、殴られる痛みも疲労も、全てが僕の心を昂ぶらせる。これが、半額弁当争奪戦——多くの人間の心を魅了してやまない。狼たちの戦場なんだ！

ガシッ！

「なっ……………！！」

そんな中、殴り倒されて昏倒したアラシの一体が唐突の僕の足首を掴む。

「今だやれ！　黒騎士はどうにもならんが、せめてツレの犬だけでもぶちのめしてやれっ！！」

「おおおおおっ！！」

足を掴んだアラシがその場で生き残った数少ない仲間に向かって叫ぶ。どうやら楽な狩りを妨害した僕と先生にどうあっても一矢報いたいらしく。その中でも容易く仕留められる僕を標的にしたらしい。仲間と言われるがまま、立っていたアラシは僕に向かって拳を振り

上げる。

「くっ！」

倒れている男の手を振りほどいては間に合わないと判断し僕はダメージを覚悟して防御の姿勢を取る。……が、予想されたダメージは数秒たっても訪れない。何故なら――

「洋っ！」

「織斑君っ！？」

全く予期していなかった助っ人の横槍により、僕を襲おうとした男は倒されたのだ。

「どうして君がここに！？」

「お前が心配になって来たんだけど……何でかな。洋や千冬姉、それにあそこの顎鬚の先輩のやり取りや戦いを見てたら、お前らがそこまで夢中になる半額弁当の味って奴が知りたくなっただんだ！」

「織斑君……」

正直、僕らのやり取りをずっと立ち聞きしてたのか？ 物凄く美味しいタイミングで参戦したけど狙ってた？ とかツツコミたくなる部分もないわけではないが、僕自身そんな彼の奇行に助けられたのは紛れもない事実である為、黙殺するでしょう。何はともあれ1人の騎士の登場によって誇りを思い出した狼と僕と織斑君という2匹の犬によってアラシと言う名の群れ豚は完全に駆逐されつつあった。

「フツ——ついて来いガキ共！ 一気にカタをつけるぞ！」

「はい先生っ！」 「ああ、千冬姉え！」

飼いならした獵犬を呼びだす様な先生の声に反応し、僕と織斑君は最も戦いの激しい織斑先生の元へ駆け出し、彼女が差し出した両の手を共に片方ずつ掴む。

次の刹那、『跳べ！』という言葉と共に女性とは思えない腕力で僕と織斑君を上方へと持ち上げる。その補助力と自身の脚力を加え、彼女が初撃に見せた様に僕たちの足は天井を衝き、同時にそれを思い切り蹴って急降下、身体を反転させ、彼女が見せてくれた様な跳び蹴りを未だ生き残った最後の—— 1番ガタイの良いリーダー格に向けて見舞う。

「沈めっ！」

僕と織斑君—— 最強の騎士の力を借りた2匹の犬が放ったダブルキックは見事命中。体重100kgはゆうに超えるであろう巨漢のアラシはぶっ飛ばされ、天災は完全にその姿を消す。

「ハア……ハア……ハア……」

多くの狼が息を乱し、疲労困憊と言った様子で有るが、弁当を取った訳でもないのにどこか何かをやり遂げた心地よさそうな表情を作っている。

その中心で、最も激しく動いていたにもかかわらず行き1つ乱していない気高き騎士王は告げる。

「さあ、アラシは—— 豚は去った。宴を始めるぞバカ共！」

これより始まるのは満身創痍のバカ共による。いつもと変わらぬ乱戦——狼同士による純粋な争奪戦だ。

「くくくくうおおおおっ！」「くくくく」

先程まで群れを成し、互いに背中を預けあつた者同士がそんな事実など一切なかったかのように全力をもつて拳をぶつけ合う。

敵は味方に、味方は敵に——“誇り”によって結ばれた仲間（狼）たちは、その“誇り”を賭けて戦う最高の敵（狼）同士として殴り合うのだ。

それは僕らも例外ではない。

顎鬚が、織斑君が、僕に向かって容赦なく襲いかかる。

「勝負だ洋！」

「来いっ！」

「先輩を無視するなよワンコ共っ！！」

互いに全力で殴り、殴られ求めて奪い合う。

今なら分かる。何故、僕はあの時織斑君の制止も、奢ってくれろという魅力的な誘いを断つたのかも、僕は、魅せられていたのだ。このどうしようもなくバカバカしい、それでいて最高の戦いに——

「悪いな。待たせた」

スーパーで入り口横にある自動販売機に寄りかかる織斑千冬に対し、紫色のスタッフジャンパーを着た初老の老人が皺がれた声で話しかける——狼たちには『ジジ様』の通称で崇められるこの店の半額神である。

彼はポケットから『峰』という最近では珍しい部類に入る銘柄の煙草の箱を取り出すと、一本啜えて煙を出す。

千冬にとってその香りは優や束と狩り場を駆け抜けた現役時代を思い出させる懐かしい香りであった。あれから十数年——自分を取り巻く様々なモノが移ろいで行く中で、このスーパーだけは変わらない。それを象徴する峰の香りは千冬の心を微かに癒す。

「いえ、それよりどうしたんです突然？ 顔なじみとはいえ本来誰に対しても等しくあるべき“神”たる貴方が個人を呼びつけるなんて……」

「何、久しぶりに顔を出した顔なじみとちよいとばかり世間話をしたいと思っただけさ……随分とまあ、スーパーの外でも有名になったようだな？ お前も、その仲間も……」

ええ、まあ——濁す様な曖昧な返事をする千冬。別に世間での知名度を気にしたことなど殆どないのだが、自身の幼さを知る人物に触れられと妙な気恥ずかしさを感じる。経験した事はないが年始などに親類が集まった時などはこういう感じなのだろうか？ とふと考えてしまう。

「……ま、そんな事は別にどうだっていいんだ。それより今回お前さんが引つ張つて来た小憎……ありやあ中々の逸材だな。それに途中で加わったお前の弟、あれも悪くない」

「買いかぶり過ぎですよ。佐藤はまだこの世界に足を踏み入れた新^ル米^キにしか過ぎないし、一夏^{アレ}はそもそもまだ犬ですらない。腕利きが集まるこの界限じゃまだまだ平均以下の力量ですよ」

「表面上の強さはな。だがココの強さはそうじゃない」

ジジ様は親指で自身の胸を指しながら言葉を続ける。

「アブラから聞いた話を合わせるとあの小憎、弁当が半額にならない可能性が高い土日を除けばどれ程深手を負おうとも毎晩のように参加してたそうじゃねえか。それもアラシや大猪なんてもんに遭遇して尚、だ。少なくとも俺やアブラの店じゃそこまでの根性を持った新入りが現れたのは十数年ぶり……お前や魔導士の小憎以来なもんだ」

「ゆとりの弊害による狼の減少……この業界にも迫っている様ですね」

「ああ、特に男の狼なんざ酷いもんさ。世間の風潮か何だか知らんが、豚ばかり増えていく始末だ。だからこそ久しく見ない気概を持った骨のある新入りには、道を踏み外さずに進んで欲しいなんて思うのさ。そんだけだ」

「フ——私とてそうです。佐藤にはこれからもっと強くなって貰わねば困る。狼として、1人の人間としても……」

「フン、何か考えがあるって口ぶりだな？ 魔導士の小憎に守って貰っていた小娘が、変われば変わるもんだ……」

「言わないで下さいよ。私だって好きでこんな可愛気のない女になった訳じゃない。……そうならなければ、守れないモノがこの世界には多すぎるというだけの事ですよ」

そう言い残し、千冬は一礼した後に店を出る。するとスグに主の歸りを待っていた犬の様に弟が駆け寄ってくる。

「待たせたな一夏、飯はもう買ったのか？」

「ああ、鮭おにぎりとどん兵衛そはをな。それより千冬姉、あのおじいさんと知り合いなのか？」

「ん？ ああ、まあちよつとしたな……それより行くぞ。今日は特別に宿直室に入れてやるからそこで夕餉としよう。聞きたい事もあるだろうしな」

死闘の果て、そして10日にも及ぶ永きどん兵衛生活の果てに晴れて初めての半額弁当——サバの味噌煮弁当を獲得した僕はスーパ―に設置されたレンジで加熱した後僕は著莪に連絡を入れ、当初の予定通り学園とスーパ―の中間にある『どう見ても池にしか見えない“湖”』があるレイクパークで待ち合わせする事にした。

5月も過ぎたと言えまだまだ夜は涼しさを感じ、その適度な夜風が戦いで火照った身体をいい感じにクールダウンさせてくれる。右手に残るどん兵衛よりずっと確かな重さがある弁当の入ったレジ袋の重量も勝利を実感させてくれる。

「うわっ、ヒデエ……どうした佐藤？ 変態みたいなニヤケ面して、夜道をそんな顔で歩いてたら通報されるぞ。ガチで」

と、そんなささやかな余韻よゐんに浸る僕の心情をぶち壊すのは、背後から迫り、体重の全てを任せる様に飛びついて来た著我であった。全く……死闘を潜り抜けた従弟に対し変態みたいとは何事だ？ こういう無粋な発言な多分に父方の血筋を感じさせる。外見上の遺伝子は全く引き継いでないがやはりコイツも佐藤一族と言う事か……全く、背中に感じる大変素晴らしい双丘の感触がなければ怒っている所だ。

「ま、とりあえずお疲れさん。その感じだとジジ様の店も相当荒れたみたいね」

「ん……かなりね。アラシが出てきて大変だったよ」

「ゲツマジ!? よく弁当獲れたな」佐藤

「獲れたっていうより半分は獲らせて貰っただよ。騎士王……織斑先生に。それより取敢えず食べよう。いい加減腹の虫が暴走しそうだ」

断片的に語った先の争奪戦に対し興味津々という様子で僕を離さない著我にそう言って離れた貰いレイクパークの由来となっている池にしか見えない湖の前に設置されたベンチに座り夕餉の支度を始め

る。

僕がジジ様の店に行っている間にアブラ神の店で買っといってくれたペットボトルの緑茶（安い無印タイプ）を1本真ん中に置き、お互い奪取した店で温めた弁当を膝の上に置き、落とさない様に気をつけながら蓋を開ける。

途端、ホワッ温かな湯気と共に腹の虫を刺激する芳しい香りが鼻腔を撥る。

グギョルル……と生理現象的に僕と著莪の腹の虫が同時に泣く。

何かもう、衝動的に割り箸を尽き立てなくなってしまうが、グツと堪え、狼として最後まで礼儀を重んじ、飯を喰らう前にするべき儀式として掌を合わせこの命を分け与えてくれる食材、調理してくれた半額神、共に競い、奪い合ったライバルたち——その全てに感謝をこめて口にする。

「いただきます！」

ありったけの感慨と共にその言葉を口にした後は何の憚りもない。飢えた胃と心を満たす時間だ。まず最初に箸をつけるべきおかずは、もう決まっている。

僕の奪取した弁当は枝豆がたっぷり入った豆ご飯に人参・筍・椎茸・こんにゃくの煮物、紅白のかまぼこに柴漬け、卵焼きと脇役にとどめておくには惜しい魅力的なラインナップで固められているがそれらを下に就けるだけの圧倒的な魅力を持つこの弁当の名の由来となる主菜——サバの味噌煮からだ。

身に箸をつけて一口分切り取って、口の中に——美味しい。噛みしめた瞬間に口に広がるサバの旨味が僕の涙腺からとめどなく涙を流させる。死ぬ程、美味しい！母やリタ（著莪ママ）には若干の申し訳なさを感じるが、僕の16年間の人生の中で1番とを感じる程に美味しいのだ！

サバ味噌の濃い味わいは続き、ご飯を求めさせる。小学校時代は給食で好き嫌いが分かれた枝豆たつぷりのご飯——コレも美味い。煮モノも、卵焼きやかまぼこ、漬物も、全てが最高であった。

そんな最上のおかずをひとしきり食べ、溢れだす涙を拭う為に一旦箸を止め、横を見やるとからあげ弁当を喰らう著我もまた僕と似たりよったりと言った様子で弁当に心奪われた様子だった。

売れ残り、廃棄寸前の弁当に、半額弁当に僕らはこの世のものとは思えない至福を与えられたのだ。

「はー何かこのからあげ最高！ 弁当だけあってサクサク感みたいなのは流石にないんだけど鳥肉が噛むとジューッっておつ、佐藤のもうまそうじゃん！ からあげ1個やるからちよつと頂戴！」

「いや、それはいいけど……著我、その弁当獲る時手を貸した僕としては他に+@が欲しいんだけど……」

例えばからあげ+1とか、肉汁したたるからあげ+1とか……

「えー緑茶買ってやったじゃん」

「いや、けどこれ半分ずつだね？ 流石にからあげ+1の代わりには……」

「んだよー贅沢だなもーじゃあ——ん」

至って正当な等価交換を要求する僕に対し、著我は若干面倒くさいといった様子を一瞬見せた後、不意に僕の唇……のすぐ下の傷口に湿った舌先を着け、湿ったと行きと共に舐め、続き頬についた米粒

を舌で獲る。

「ホイ、消毒と顔の掃除でイーブンね。それじゃとつと交換交換
よ。」

「イーブンってお前、いくら人気がないからって……」

「嬉しくなかった？」

「そうは言わないけど」

「素直でよろしい。はいこれからあげ、でもって頂きます——
——」

正直、著莪の唇がそのまま僕のそれとが3年ぶり位に重なるんじゃないかと動揺したのは絶対の秘密だ。全く……コイツは自分の見た目とか、分かってないんじゃないのか？ 中1頃まではイタリア人の母と常時ラブラブな父の影響もあってか、割としよっちゅうキスしていたが流石に思春期に突入してからはそういう機会はあまり無くなった訳で……なんていうか……流石にテれる。

「んん~~~~~！ 何だよこのサバ！？ 超美味いじゃん！ ……
ってサバ味噌？——佐藤、もしかしてコレ……先生が離れたく
月桂冠>って奴なんじゃないの!？」

「えっ……………?」

佐藤と著莪が初めて手にした半額弁当の味に酔いしれていた頃、織斑姉弟もまた、手に入れた弁当とおにぎり、どん兵衛による夕餉を始めていた。

「月桂冠??」

「ああ、その日、その半額神が自信を持って『最高の1品』と自負する弁当だ。あの店——ジジ様の店の場合だと得てしてサバ味噌やサバの塩焼きなどの弁当が売れ残った場合、それに至るな。要するにあの場にあつた弁当の中で、文句なく最高の弁当ということだ。そして……月桂冠を得た者はその日そのフィールドに於いて絶対的な勝者として扱われる」

「そんなスゲー弁当を……けどそんな凄い奴を千冬姉えはどうして狙わなかったんだ?」

「何、別に他意はないさ。確かにジジ様のサバ味噌は至高の一品と言えるものだが、かといってそれ以外の弁当に魅力がないという訳じゃない。今回、私の腹の虫が最も求めたのはこの肉じゃが弁当だった。というだけの事だ。ホレ、食ってみろ」

「えっ……?」

不意に差し出される千冬の割り箸、その先に挟まれていたのは肉じゃが弁当のメイン、和風の汁がたっぷり染み込んだじゃが意味も細切れの牛肉だ。滴りそうな煮汁やほんわりと立ちこめる湯気がおにぎりを齧る一夏の喉を鳴らし、衝動的に頬張らせる。

「ん……っ！ この味って……!？」

「覚えがあるか？　そうれはそうだろう。何せ現役狼時代の私が好んで奪取して持ち帰った弁当の1つだからな」

フフ、微笑む千冬を前に一夏は忘れていた幼い日の記憶を思い出す。アレは自身が小学校に入ったばかりの頃——姉との2人だけの生活が始まって間もない頃だ。週に何度かは姉弟で通っていた篠ノ乃道場の師範夫婦——束と篤両親の好意で夕食をご馳走になっていたが、それ以外の日、自活する為に高校に通いながら働いていた千冬が帰りに買って帰ってきてくれたのは1人前の半額弁当とおにぎりに1つ2つの総菜ないしカップ麺だった。世間的にみればそれは侘^{わび}しい夕食なのだろう。しかし一夏はこと食事に於いてそんな気持ちになつた事は1度とてなかった。それは最愛の姉と一緒に食べれる喜びも過分にあつたのかもしれない。しかしそれとは別に、幼い彼の及び知らない所で死闘の果てに手にした半額弁当の芸術的な味わいがあつてこそだ。

肉じゃがを噛みしめながら一夏は千冬の『安価でも栄養があつて美味い物を与えてやりたい』という限らない愛によつてここまで成長できたという事実を思い知り、それを教えてくれた弁当の美味さも相まって涙を零す。

「分かつてたつもりだけど……俺、本当に千冬姉えに守られて生きてたんだな……あんなに凄い戦いをして、俺の為に——」

「コラ、美味しい夕餉を食べて泣く奴があるか。それに別に全てが以前の為と言う訳じゃないさ。私自身あの狩り場とそこで共に生きる戦友たちを愛していたというのも紛れもない事実だ。……寧ろ、帰りを待つお前がいたからこそ、通常の狼以上に力を引き出せ、騎士王なんていう恥ずかしい2つ名がつく様になつたとすら言えるな……」

…」

「カッコいいじゃん」

「茶化すな」

涙を拭いながら笑みを零しつつ、姉の2つ名について触れる一夏。すると今度は千冬の方が若干言葉に詰まる。大仰な2つ名は、彼女にとって若干恥ずかしい様だ。

「なあ、千冬姉え……俺もなれるかな——狼に？」

「フン、どうだろうな……あまり利口な生き方ではないのは確かだぞ？ それにお前が目指す“誰かを守れる強さ”とはある意味真逆の道だ。限られた獲物を賭けて欲望のまま拳を振るう。恰好良さなど微塵もない。無様で卑しい生き方であるのは違いない」

「けど俺は知っている。姉さんっていうそうじゃない狼の存在を、二番煎じになるのは分かってるけど……俺も姉さんが観てきた世界を見てみたいんだ」

強く気高い姉の様になり、いつかそんな姉すら守れる男になりたいと考える一夏にとって、ある意味それは必然の選択。正面から射抜くような視線を向け、その決意の胸を口にする弟に対し千冬は目を合わせない。いや、正確には合わせられず、ただ、『好きにしろ』と野暮ったく答えるのみなのであった……。

「――と、まあ……大体こんな感じかな」

月桂冠にアラシ、黒騎士の参戦と驚くべき事態が目白押しで有ったジジ様の店の争奪戦の内容を促されるままにあの場での戦いのあらましを語り終えると、著我『んだよもう!』と悔しそうな声を挙げ、ふてくされる様な仕草を見せる。

「何がそんなに悔しいんだよ……大変だったんだぞ?」

「けどそれって逆に凄い盛り上がったことでしょ? おまけの最終的に月桂冠って、何か結局佐藤の方がおいしいとことつたみたいじゃん」

どうやら弁当に対する情熱以上に刺激的な戦いを著我にとっては僕に先んじての白星以上の魅力を話の中で感じ取ったらしい。だが悲しいかな。1度弁当を獲った者はその後いかなる理由があってもその日の争奪戦には参加できない。競争相手でもある僕が経過はどうあれ最終的に月桂冠を手に入れた事も含め、どうにも負けた気分になるらしいのだ。

「別に僕が勝ちって訳でもないだろ? さっきも言っただけど今回は殆ど先生に獲らせて貰った様なもんだし、僕に言わせればそういう助力なしで先に弁当獲った著我の方が羨ましいよ」

「そうかあ? うーん……まあ、アレだよね。これからスーパ―に通い続ければこの先何度でもそういう機会にありつけるわけだから、今回はひとまずよしとするか!」

「やっぱりこれからやるんだ……」

正直、念願の弁当も手に入れ且つ基本的には懷を気にしないでいい著莪ならばこれをきっかけに『ゲームクリア』という事で引く事も考えたが、そうでもないようだ。

「あつたり前じゃん！ 寧ろようやくファーストステージクリアつてトコでしょ？ こんなに楽しい事知ったらもう簡単に止められないって、佐藤だってそうでしょ？」

「僕は……まあ……仕送りが………ううん、そうかもね。まだ言葉に出来ないけど——きっと親父の頭が正常に戻って、仕送りが倍になったとしても、きっと辞めない」

「それでこそ佐藤だ！」

何がそれでこそなのか分からないがそう言って著莪エラく上機嫌になり、僕のサバ味噌の身を豪華につまみ口の中に入れる。

「おまつ……ちよつ！？ 取り過ぎ取り過ぎ！ 明らかにからあげ1個分以上取つただろ！？」

「えゝホント細かいな佐藤はゝ。じゃあ、ホイこれ付け合わせのきんぴらごぼつ、残りやるからさ」

「不平等だ……」

「んなことないってゝ」

最終的にメインディッシュを3分の1持って行かれた事を若干引きずりつつ、僕たちは人生最高の夕餉を全て平らげた後、遊び疲れた

子犬の様に、ベンチの上で互いに重なりながら、明け方まで寝てしまっているのであった――

【おまけ】

翌朝早朝――夜明けと共に目を覚ました僕らはその後一旦寮に戻って着替えやらシャワーを済ませ、平常通り学校へと登校。ベンチで寝ていたせいかわ、身体の節々が編に固まっている感じもしたが昨晩の勝利の余韻が、疲労や痛みを忘れさせてくれていた。のだが――

「へぶしつ――！？」

教室の扉を開けるや否や、木刀を構えて待ち構えていた篠ノ乃による強烈な打突が僕の胸に直撃、それもかの有名な感動の少年漫画ドラゴンクエストDQのダイの大冒険に登場する某不死身の男の必殺技ブラッディ・スクライド ばりのひねり（・・・）も加えられている代物だ。朝からサービス精神満点過ぎるその一撃に僕は吹き飛び廊下の壁に叩き付けられた後、地に伏した状態で自分を取り囲む3人の美少女――篠ノ乃、鳳さん、オルコットさんの怒りに満ちた表情に目を向ける。おいおいベイビーたち、朝っぱらから積極的過ぎじゃないかい？

傍から見ればハーレム主人公ないし3股男がヤキモチ焼きなヒロインたちに責められるという理不尽で有りながら何とも素敵なシーンに映るかもしれない。教室の中から僕を見つめる内本君の表情はま

さに羨望のソレだ。しかしその渦中にある僕に伝わる感情は明確な殺意。この差は一体どうということなんだ!?

「今朝、一夏から『突然で悪いけど、俺、これから晩飯はスーパーに行く事にしたから、ホントに悪いけど、差し入れとかは遠慮させてくれ』と唐突に言われた」

「私も筭から聞いて未だに意味がよく分からないんだけど……アンタが弁当争奪戦とかいう訳の分からないものに誘ったのが原因なんだって……?」

「わたくし 私たちに築いた至福の時をよくも……よくも……!」

人殺しでもしそうな目で僕を見下ろす篠ノ乃に、一見して冷静だが何気にISを部分展開してる鳳さん。怒りに震えつつ何気に僕を踏みつけるオルコットさん——昨日の傷口が開いて非常に痛い。

「あ、あの……仰ってる意味がよく、わからないのですが……」

「問答無用!」

「くたばれ佐藤!!」

「弁明はあの世でして下さいまし!」

こうして僕は朝一から美少女3人に囲まれ、教室前の廊下と言う公衆の面前で非常にハードなプレイを強要される事になった。

一体僕が何をした? 織斑君がどうたらこうたらとかまるで意味が分からない。そしてそんな僕を見つめる内本君の『朝っぱらから衆人環視の中、篠ノ乃様だけでなく他のクラスの女王様にまで……クソゝ羨まし過ぎるぜ兄弟!』なんて言いながら羨望と嫉妬の入り混

じった視線を向ける内本君の存在とか、本気で意味が分からない。

「ら、らめえ……！こ、これいじょう……これいじょうブチこまれたら（物理的に）こわれちゃうっ！」

「フムフム、衆人環視、3対1による容赦のない責め苦に絶頂仕掛けるサイトウ……篠ノ乃さんたちを全員男に置き換えれば使えるか……」

ついでに4組の方から感じる不快な視線なんかもまるで……意味がわからな……。い……。

それから僕が目覚めたのは半日後の病院のベッドの上であった

第6話 誇りと空腹の大衆向け大規模小売店（スーパーマーケット）

後編

ようやく終わった……派手なIS戦より何倍も疲れるのはなぜだろう（笑）

笑いあり感動ありの争奪戦は今後もサイドストーリー的に間にはさんでいこうと思いますが、次回より再びISパートで物語が進みます！

が、その前に次回は彼女が表舞台に！

次回、『筋肉刑事^{マッスルデカ}は今日もイク！』

シャルとラウラが出てくる2巻編は8話からでw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0563y/>

アイ・エス

2012年1月9日18時54分発行